

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第135集

# 梅 替 古 墳

2015

岐阜県文化財保護センター

うめ  
梅

がえ  
替

古

墳

2015

岐阜県文化財保護センター



発掘区から木曾川を臨む（北から）



梅替古墳完掘状況（西から）



坏身·坏盖 (上列: 缘内系、下列: 尾張系)



梅替古墳出土遺物

## 序

坂祝町は加茂郡の南西、岐阜県中南部に位置します。町の南端を流れる木曽川は、日本ラインとして著名であり、また名勝「木曽川」として国指定を受けている景勝地です。

このたび、国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所による一般国道21号坂祝バイパス建設に伴い、坂祝町深萱地区にある梅替古墳の発掘調査を実施しました。梅替古墳は、坂祝町中央部に位置する郷部山西斜面の尾根上に立地しています。尾根の西側には、各務原山地の急峻な山並みの手前に広がる深萱・勝山地区の平坦地があり、古墳からはこれらの地区を一望にできます。坂祝町には、町史跡である「坂祝火塚古墳」をはじめとして数多くの古墳が分布していることが知られていますが、古墳の本格的な発掘調査は今回が初めてであり、町内の古墳時代後期の古墳の様相を深萱・勝山地区において先んじてうかがい知ることができます。

今回の発掘調査によって、梅替古墳はこの地域に特有の横穴式石室をもち、特徴的な二段築成の墳丘を築造していることが明らかとなりました。木曽川中流域における後期古墳の指標となりうるものであり、また、岐阜県の古墳時代を考える上でも貴重な資料を得ることができたと考えています。本報告書が、広く県民の皆様に活用され、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、坂祝町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成27年12月

岐阜県文化財保護センター  
所長 宮田 敏光

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県加茂郡坂祝町深萱に所在する梅替古墳（岐阜県遺跡番号 21501-11606）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成 26 年度一般国道 21 号坂祝バイパスに伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘作業は平成 25 年度に、整理等作業は平成 26 年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は、第 1 章を長谷川幸志が、それ以外は大本直人が行った。また編集は大本が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社ユニオンに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 放射性炭素年代測定（AMS 法）は、株式会社パレオ・ラボに委託して行い、その結果は第 4 章に掲載した。執筆は株式会社パレオ・ラボによる分析結果をもとに、大本が行った。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）  
赤塚次郎　田中弘志　長屋幸二　藤澤良祐　森島一貴　渡邊博人　坂祝町　坂祝町教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2002『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目次

### 序

### 例言

### 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2

### 第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8

### 第3章 調査の成果

第1節 層序	12
第2節 遺構・遺物の概要	16
第3節 古墳時代の遺構・遺物	21
第4節 中世以降の遺構・遺物	56
第5節 繩文時代の遺構・遺物	68
遺構観察表、遺物観察表、発掘区全城図・分割図	74

### 第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要	95
第2節 SL2・SK24 出土炭化材の放射性炭素年代測定	95

### 第5章 総括

第1節 墳丘の構築工程について	98
第2節 梅替古墳の位置付け	101
第3節 梅替古墳とその周辺の土地利用の変遷について	105

### 参考文献

写真図版	106
------	-----

### 報告書抄録

## 挿図目次

図 1 梅替古墳の位置	1	図 15 石室平面図及び土層断面図	28
図 2 周辺の地形と試掘坑の位置	3	図 16 石室実測図	30
図 3 地区割り図	6	図 17 石室右側壁積み上げ状況図	31
図 4 梅替古墳周辺の地質	8	図 18 石室掘方平面図及び床面断面図	32
図 5 周辺の遺跡	11	図 19 石室排水溝平面図・断面図及び側壁見通し図	34
図 6 発掘区土層断面図の位置	13	図 20 墳丘断削土層断面図 1 - 1	36
図 7 発掘区土層断面図 1	14	図 21 墳丘断削土層断面図 1 - 2	37
図 8 発掘区土層断面図 2	15	図 22 墳丘断削土層断面図 2	39
図 9 土坑分類模式図	19	図 23 石室下層出土石製品・金属製品 出土位置図	40
図 10 柱穴分類模式図	19	図 24 頸・脚付壺出土状況図	41
図 11 墳丘平面図及び周溝断面図	22	図 25 須恵器出土状況図	41
図 12 墳丘下地形及びⅢ層上面地形合成図	23	図 26 SD3・SK22・23 遺構図	46
図 13 舟石見通し図	24	図 27 出土遺物実測図（1）	47
図 14 壺形埴土（SX1）分布図	27	図 28 出土遺物実測図（2）	48

図 29	出土遺物実測図（3）	49
図 30	出土遺物実測図（4）	50
図 31	出土遺物実測図（5）	51
図 32	出土遺物実測図（6）	52
図 33	出土遺物実測図（7）	53
図 34	出土遺物実測図（8）	54
図 35	出土遺物実測図（9）	55
図 36	SW 1 遺構図	57
図 37	SW 1 出土遺物実測図	57
図 38	SK 3・SK 3 遺構図	59
図 39	SL 1・SK 1・5・7・10・11 遺構図	61
図 40	SK 11 出土遺物実測図	61
図 41	SD 4 以東の遺構図	63
図 42	出土遺物実測図（10）	65
図 43	出土遺物実測図（11）	66
図 44	出土遺物実測図（12）	67
図 45	SL 2・SK 24 遺構図	69
図 46	出土遺物実測図（13）	70
図 47	出土遺物実測図（14）	72
図 48	出土遺物実測図（15）	73
図 49	II 層上面発掘区全城図・割付図	81
図 50	II 層上面発掘区全城図分割図①②	82
図 51	III 層上面発掘区全城図・割付図	83
図 52	III 層上面発掘区全城図分割図①	84
図 53	III 層上面発掘区全城図分割図②	85
図 54	III 層上面発掘区全城図分割図③	86
図 55	III 層上面発掘区全城図分割図④	87
図 56	III 層上面発掘区全城図分割図⑤	88
図 57	III 層上面発掘区全城図分割図⑥	89
図 58	III 層上面発掘区全城図分割図⑦⑧	90
図 59	墳丘下発掘区全城図・割付図	91
図 60	墳丘下発掘区全城図分割図①	92
図 61	墳丘下発掘区全城図分割図②	93
図 62	墳丘下発掘区全城図分割図③④	94
図 63	曆年較正結果	97
図 64	墳丘構築工程模式図（1）	99
図 65	墳丘構築工程模式図（2）	100
図 66	稻荷原 1・2 号墳 墳丘断面実測図	102
図 67	梅替古墳類似例の石室実測図	103
図 68	時期別山茶碗出土状況図	106

## 表目次

表 1	周辺跡地一覧	11
表 2	古墳以外の遺構検出数	16
表 3	遺物出土点数	16
表 4	遺構ごとの遺物出土点数	17
表 5	土器類出土数	17
表 6	石器類出土点数	18
表 7	溝状遺構概観表	74
表 8	土坑觀察表	74
表 9	被覆地盤構造表	74
表 10	柱穴状遺構概観表	74
表 11	土器觀察表（1）	75
表 12	土器觀察表（2）	76
表 13	土器觀察表（3）	77
表 14	土器觀察表（4）	78
表 15	土器觀察表（5）	79
表 16	石製品觀察表	79
表 17	金属製品觀察表	80
表 18	石器觀察表	80
表 19	測定材料及び処理	95
表 20	放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果	96
表 21	墳丘の構築工程	99
表 22	梅替古墳出土須恵器の様相	101
表 23	梅替古墳類似例古墳一覧表	102

## 插入写真目次

写真 1	発見時の梅替古墳	2
写真 2	伐採後の発掘区	2
写真 3	テラス上の転落石（墳丘北側）	26
写真 4	石室内に落ち込んだ石材	28

## 写真図版目次

図版 1	SL 2・SK 24・墳丘
図版 2	墳丘完結状況（南西から・南東から）
図版 3	墳丘完結状況（東から・西から）
図版 4	周溝・葺石・石室
図版 5	石室・石室側方・排水溝
図版 6	墳丘土解剖面・結縫車出土状況・SD 3・SW 1・SL 1
図版 7	SK 3・SK 3・SK 5・SK 7・SK 10・SK 11・SD 4 以東の遺構群
図版 8	出土遺物
図版 9	出土遺物
図版 10	出土遺物
図版 11	出土遺物
図版 12	出土遺物
図版 13	出土遺物

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

梅替古墳は、加茂郡坂祝町深萱字梅替に所在する（図1）。

一般国道21号坂祝バイパス建設に先立ち、その建設予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「見城寺跡」（岐阜県遺跡番号21501-10140）が所在することから、平成23年度に岐阜県教育委員会（以下「県教育委員会」という。）が現地確認を行い、墳丘状の高まりを発見した（写真1）。その後、同事業主である国土交通省中部地方整備局多治見砂防国道事務所長（以下、「事務所長」という。）からの依頼を受け、平成24年1月に県教育委員会が試掘確認調査を実施した。その結果、墳丘状の高まりが人為的な盛土であることを確認し、須恵器が出土したことなどから、古墳である可能性が高いことが判明した。これを受け、県教育委員会と坂祝町教育委員会で協議を行い、梅替古墳（岐阜県遺跡番号21501-11606）として新たに遺跡として登載をすることとなった（平成24年4月23日付け社文第152号坂祝町教育委員会教育長あて県教育委員会教育長通知）。その結果をもとに平成25年1月15日の平成24年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、840m<sup>2</sup>の本発掘調査が必要との意見をまとめた。



図1 梅替古墳の位置  
(国土地理院新版淡色地図(25,000分の1)を縮小して作成)

## 2 第1章 調査の経緯

なお、見城寺跡については、平成24年度に県教育委員会が試掘確認調査を行ったが、寺院に関する遺構は確認されなかった。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、事務所長から県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あての発掘の通知（平成25年4月12日付け国部整多調設6号）が提出され、同法94条4項の規定に基づき、県教育長から事務所長あて発掘調査の実施を求める勧告（平成25年4月23日付け社文第4号の12）を通知した。事務所長から発掘調査の依頼を受け、岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）は、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査着手の報告（平成25年6月12日付け文財セ第63号）を県教育長に提出した。



写真1 発見時の梅替古墳

## 第2節 調査の方法と経過

### （1）調査の方法

梅替古墳の発掘区は、墳丘の盛土及び表面観察で確認された周溝状の地形、周辺の平坦地を含めた840m<sup>2</sup>で設定した。なお、TP4とTP5の間などの平坦地の範囲は、試掘確認調査結果や観察による地形の変化に基づいて設定した（図2）。立木の伐採後、現況地形測量を実施し、墳丘等の遺存状況等を確認し、墳丘から裾付近までの土層観察畦を図面上で設定し、現地に位置を落とした。遺物取り上げ等に用いる調査グリッドの設定は、世界測地系の座標に基づき、一辺5mとした（図3）。試掘確認調査により、表土の腐葉土直下が遺構検出面であると認識していたため、表土掘削はすべて人力で実施することとした。調査の進展に伴い、埋葬主体部である横穴式石室を検出し、墳丘の主軸が明らかとなった。そのため土層観察畦とは別に墳丘記録用の墳丘主軸を設定し、以降の記録作業に用いた。その後、墳丘を除く発掘区全体が流土（II層）に覆われており、尾根を切



写真2 伐採後の発掘区

る墳丘東側の周溝が広がることが判明したため、調査範囲を 78 m<sup>2</sup>広げ、さらにII層の大部分を重機により除去した。横穴式石室の埋土掘削中に北側側壁に崩落の兆しが現れたため、その時点で掘削を中止し、そのままの状態で空中写真による景観撮影を行った。墳丘の断ち割りは重機を用いて行い、横穴式石室と墳丘構築過程、下部遺構の調査を行った。

遺構の記録は、手測り測量とデジタル測量を併用して実測図を作成し、写真撮影した。遺物は原則として全点の原位置をデジタル測量により記録した。

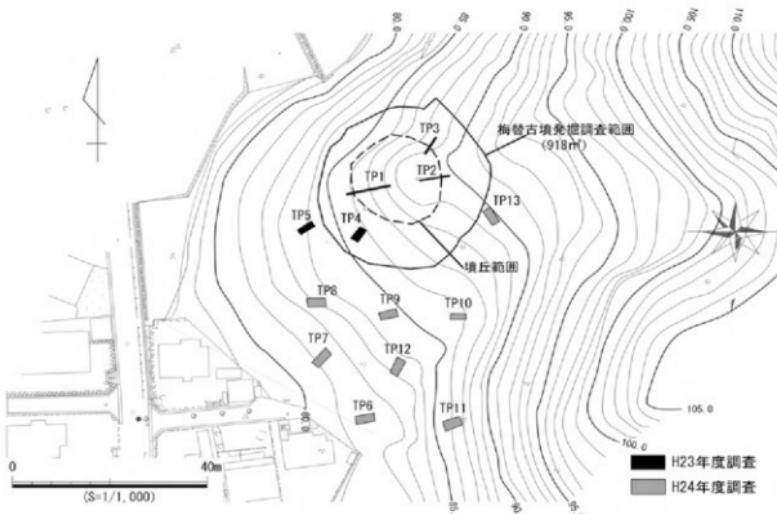


図2 周辺の地形と試掘坑の位置 (S=1/1,000)

## (2) 調査の経過

調査の経過は、以下のとおりである。

### 発掘作業（平成 25 年度）

- |       |           |   |
|-------|-----------|---|
| 第 1 週 | 5/16～6/1  | 16 日から発掘区及び排土置き場の伐採作業開始し、同時に調査員事務所の設置工事等準備を進めた。23・24 日に現況地形測量を実施し、31 日から人力による表土及び遺物包含層の掘削を開始した。 |
| ～ 3 週 |           |   |
| 第 4 週 | 6/2～6/8   | 表土及び遺物包含層の掘削を継続した。  |
| 第 5 週 | 6/9～6/15  | 11 日から墳丘頂部に近い D・E 7 グリッドの遺構検出作業を開始した。墳丘頂部周縁に盃掘排土 (SX 1) が存在していることを確認した。                         |
| 第 6 週 | 6/16～6/22 | 引き続き検出作業を実施したが、週の後半 (19～21 日) 雨天により作業中止となった。18 日に石室の盃掘坑埋土 (S005) の一部を確認したが、当初は                  |

#### 4 第1章 調査の経緯

- 小規模な土坑と認識していた。
- 第7週 6/23～6/29 D4グリッド付近の墳丘面が判然としないため、サブトレンチ（墳丘TR1）を設置して掘削した。調査当時は墳丘面を確認できたと判断したが、最終的には墳丘面まで到達していなかったことが判明した。
- 第8週 6/30～7/6 引き続き検出作業を実施したが、週の後半（3～5日）は雨天により作業中止となった。
- 第9週 7/7～7/13 11日に墳丘南西の裾から検出した石列（SW1）の写真撮影等を実施した。12日には墳丘全体の検出状況写真を撮影した。
- 第10週 7/14～7/20 16日から発掘区北東部の検出作業を進めると同時に、盜掘排土（SX1）の断ち割りを開始した。17日からは墳丘西斜面の堆積状況を確認するためのサブトレンチの掘削を行った。
- 第11週 7/21～7/27 25日に三重大学名誉教授八賀晋氏による現地指導を受けた。この際、葺石の存在について指摘を受け、盜掘排土除去を優先して進めることにした。実際にこの時点で墳丘2段目南側斜面の葺石を確認していたが、当初は後世の石積みと考えていた。
- 第12週 7/28～8/3 30日に盜掘坑埋土（S005）の範囲を確認し、掘削を開始した。その過程で石室の側壁を確認した。さらに墳丘2段目北東部の盜掘排土下から多量の礫を検出したことから、盜掘によって石室の石材が廃棄されたと判断したが、後に葺石とその転石が大部分である事が判明した。
- 第13週 8/4～8/10 墳丘の西斜面の石室開口部は後世の改変により完全に埋もれていた。検出の際は何らかの目的で墳丘を利用して盛土を行ったものと考え、その範囲に主体部とは別の遺構名をつけて検出を実施した。結果的には石室の南側と羨道、前庭部の埋土として取り扱った。
- 第14週 8/11～8/17 夏季休業
- 第15週 8/18～8/24 盗掘排土の除去過程で、墳丘に掘り込まれた横穴（SK3）を検出したが、天井崩落の恐れが生じたため、途中で掘削を切り上げた。石室東側の土層記録をとり、完掘作業を開始した。また、墳丘南西の斜面でも葺石を確認した。
- 第16週 8/25～8/31 石室の床面に近い部分には側壁などの転石が多数見られ、これを人力により除去しながら掘り進めた。
- 第17週 9/1～9/7 後世の盛土と考えたS015の一部とSX3の検出が終了し、表面の単点測量を実施した。その後、S015の掘削やSW1の解体作業を開始した。9月5日に再度八賀氏の指導を受けた。
- 第18週 9/8～9/14 石室内の底面付近から管玉や耳環、石製紡錘車が出土したが、それらの出土位置から、副葬品が原位置をとどめていない可能性が高まった。また、墳丘南東にも葺石が残存していることを確認し掘削を行った。この頃に発掘区全体が流土で覆われている可能性を考えるようになった。

- 第 19 週 9/15～9/21 墳丘の周囲にサブトレンチを入れて流土の堆積状況を確認した。この結果を受けて、東側に発掘区を拡幅すること、重機掘削により流土を除去することを決定した。21日に現地説明会を開催し、見学者173名が来場した。
- 第 20 週 9/22～9/28 24日から重機掘削を開始し、翌日に一旦終了した。その後、墳丘北側から遺構検出作業に入った。遺構掘削は、墳丘や石室の土層観察時の除去、墓道の排水溝（SD 2）を実施した。また、SX 3 の掘削を行い、多量の礫とともに墳丘 1段目の葺石基底石を検出した。
- 第 21 週 9/29～10/5 発掘区東側の拡幅部を重機により掘削し、古墳築造の際に尾根を造成した状況が明らかとなった。重機掘削後に当該部分の周溝（SD 1）などの検出・掘削作業を開始した。この際、周溝埋土上面から火葬施設と考えられる SL 1などを検出した。石室は、天井石や転落石を除去し、その下の埋土の掘削を進めた。
- 第 22 週 10/6～10/12 流土に埋もれていた墳丘南側の掘削を進め、1段目の葺石が良好に残っている状況が明らかとなった。また、前回の掘削では墳丘南側の流土除去が不十分であることがわかり、重機による再掘削を行いながら遺構検出・掘削を進めた。墳丘南の遺物包含層掘削では中世陶器などが多く出土し、基盤層上面で土坑や柱穴などを検出した。10日に八賀氏から墳丘解体時の調査に関する指導を受けた。11日に石室の北側側壁背後の墳丘に亀裂が見つかったため、石室内の掘削作業を一旦中止し、空中写真撮影後に石室の一部を取り壊した上で掘削することとした。
- 第 23 週 10/13～10/19 重機掘削と遺構検出、遺構掘削を併行して作業を進めた。SW 1 の周辺下層から中世以降の墓と考えられる SK 7・SK11 を検出した。19 日にはラジコンヘリコプターによる景観撮影を実施した。
- 第 24 週 10/20～10/26 埋め殺しとなっている墳丘 2段目の葺石基底石の検出から墳丘解体作業を開始した。併せて排水溝（SD 2）の図化、解体作業も進めた。24日から重機による墳丘の解体作業を開始した。石室内の掘削に入った。
- 第 25 週 10/27～11/2 墳丘断面の記録作業を開始した。石室は 29 日に掘削が終了し、測量作業を開始した。墳丘断面の記録作業と同時に墳丘下面の遺構検出を進め、石室の掘方のほか、被熱遺構（SL 2）などを検出した。墳丘の除去は 2 日にはほぼ終了した。10月 31 日に現場事務所を撤収し、同時期に調査を進めていた東野遺跡の現場事務所に拠点を移した。また、11月 1 日から遺物の一次整理作業を開始した。
- 第 26 週 11/3～11/9 最後に残った石室掘方の記録作業を行い、6日に現地における記録保存作業は終了した。7日から重機による埋戻しを実施し、8日に終了した。
- 第 27 週 11/10～11/16 12日に事業主である多治見砂防国道事務所の担当者とともに現地確認を行い、現地の引き渡しを行った。また引き続き一次整理作業を進めた。
- 第 28 週以降 一次整理作業は 11 月 26 日まで実施した。12 月には SL 2 出土炭化材の放射

## 6 第1章 調査の経緯

性炭素年代測定(AMS法)を委託し、3月20日に納品を受けた。その他記録類の整理等を年度内に行った。

### 整理等作業(平成26年度)

整理等作業は、平成26年4月から平成27年3月まで実施した。

### (3) 発掘作業及び整理等作業の体制

センターにおける梅替古墳発掘調査の調査体制は、以下のとおりである。

センター所長	丸山 和彦(平成25年度)、宮田 敏光(平成26年度)
總務課長	二宮 隆(平成25・26年度)
調査課長	成瀬 正勝(平成25・26年度)
調査担当係長	河瀬 実浩(平成25年度)、藤田 英博(平成26年度)
調査担当職員	長谷川幸志(平成25年度)、大本 直人(平成26年度)

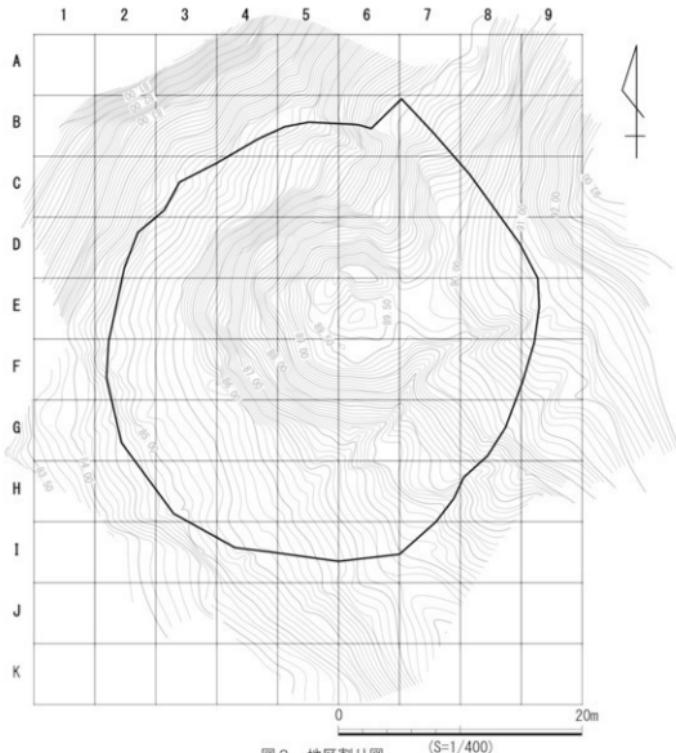


図3 地区割り図  
(S=1/400)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

加茂郡坂祝町は、岐阜県美濃地方の中央南端部に位置する。木曽川の中～下流域にあたり、木曽川を挟んで南側は愛知県犬山市、岐阜県側では東側から可児市、美濃加茂市、関市、各務原市と境を接する。町の南端を西に向かって流れる木曽川の流域は国指定名勝に指定されており、その景観が保護されている。

坂祝町周辺の地質は、岐阜県に広く分布する美濃帯を基盤としている。当地域の美濃帯中生層は、チャートと砂岩泥岩互層が重なる整然層で構成されており、美濃帯堆積岩類の内、上麻生ユニットに属するとされる。この上麻生ユニットは、三疊紀前期からジュラ紀中期の堆積物であり、典型的な海洋プレートの層序（チャート砕屑岩シーカエンス）を示す。この層序が断層により何層にも重なり、例えば三疊紀のチャートがジュラ紀の砂岩にのるような逆転した状況が見られる。こうした現象により、積算層厚は 7,000 mにも達するとされる。この美濃帯中生層が分布する各務原山地は、可児市西部から坂祝町南部を経て、岐阜市北部まで延びる細長い山地であるが、上麻生ユニットの硬いチャートは浸食を受けにくいため、坂祝町指定史跡「猿喰城跡」が立地する城山 (275.3m) を始め、急峻な地形が発達している。しかし、梅替古墳が立地する郷部山 (179.8m) はこのチャートが分布していないため、比較的なだらかな山体を呈する。なお、郷部山北東部及び加茂山は、新第三期中新世瑞浪層群の内、蜂屋累層の分布が見られ、さらに緩やかな地形となっている。

坂祝町は、坂祝町・美濃加茂市・川辺町・八百津町・可児市にかけて広がる美濃加茂盆地の一角に位置する。美濃加茂盆地内は河岸段丘が発達し、段丘崖が各地に見られる。平成 15・16 年度にセンターが国道 248 号バイパスの建設に伴い発掘調査を実施した東野遺跡（加茂郡坂祝町）は、中位段丘面（加茂野面）の段丘崖端部に立地する遺跡である。この段丘崖が木曾川水系と長良川水系を分けており、加茂野面は緩やかに西に傾斜する地形となっている。この中位段丘には、第四紀更新世の堆積である厚さ約 10m の加茂野層（木曾谷層）が分布している。加茂野層は、新期御嶽火山のオレンジ色の軽石を含む特徴がある。また、東野遺跡が立地する大針の段丘崖付近には、御嶽山起源の火山泥流と考えられる木曾川泥流堆積物が分布している。この堆積物は、御嶽山の東麓から西野川（木曾川支流）及び木曾川に沿って、犬山市まで約 150 km を流れ下った大規模な火山泥流の証拠とされており、木曾川から追間川を逆流して梅替古墳が所在する深萱近辺の平坦地まで達している。東野遺跡の調査においても木曾川泥流堆積物が確認されている<sup>1)</sup>。さらに深萱には、木曾川泥流堆積物が谷をせき止めた生じた水たまり内の沈殿により、崖などに堆積した粘土層（深萱粘土層）も見られる。深萱の平坦地は、大きくは先に述べた中位段丘面に属するが、梅替古墳の所在する付近では、追間川沿いの狭い低位段丘や、郷部山から供給された堆積物によると考えられる緩斜面（扇状地）も見られる。この様な立地から、梅替古墳から西にむかっての眺望は開けているが、正面に各務原山地の岩塊がそびえ、北側の前山 (162.8m) 周辺と比較すると、やや奥まった場所としての印象が強い。

#### 注

1) 調査では、基本層序VI層（褐色土層）とされている。財団法人岐阜県文化財保護センター2007『東野遺跡』

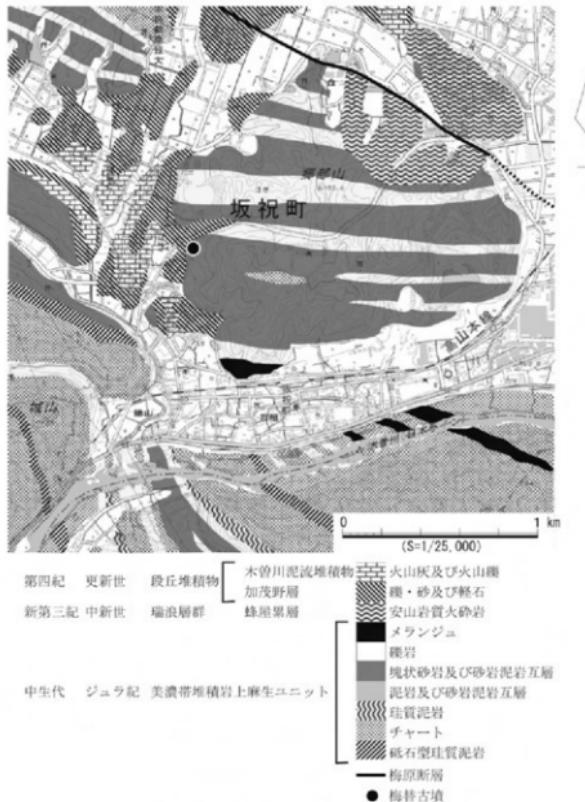


図4 梅替古墳周辺の地質 (S=1/25,000)

国土地理院新版淡色地図(25,000分の1)を利用して、『坂祝町史自然編』『第1章坂祝町の大地』図11(熊野2002)に基づき作成

## 第2節 歴史的環境

ここでは、発掘調査が実施された遺跡を中心に、梅替古墳周辺の歴史的環境について記述する。なお、文中の遺跡名との番号は図5、表1と一致する。

### 旧石器時代

発掘調査が実施された海老山遺跡（富加町）、市橋北野遺跡（美濃加茂市）をはじめ、加茂野台地周辺では、古くから旧石器時代の石器が多く採集されているが、坂祝町周辺の散布地としては、平井遺跡（20）・野田遺跡（25）がある。坂祝町では、東野遺跡（5）の第1次調査（平成15・16年度）において

台形石器やナイフ形石器、石核が出土している。ただし、いずれも表土層や搅乱坑からの出土であり、明確な遺構や遺物包含層は確認されなかった。

#### 縄文時代

坂祝町には、昭和 61・62 年度にかけて坂祝町教育委員会が木曾川改修工事に伴い発掘調査を実施した芦戸遺跡（16）がある。縄文時代中期の堅穴建物の他、前期後半～末葉の土器がまとまって出土した。センターが実施した東野遺跡の第 1 次及び第 2 次調査（平成 24・25 年度）においても、縄文時代中期後葉の堅穴建物 8 軒などが見つかっている。大杉西遺跡（21）においてはセンターが実施した調査の際、堅穴建物とともに、桁行・梁行ともに 2 間の掘立柱建物を検出した。また、隣接する大杉遺跡（22）においても、関市教育委員会の調査によって、同様な掘立柱建物が検出されている。北裏遺跡（43）では、昭和 46 年度に可児町教育委員会が調査団を結成して調査を実施し、五貫森式に比定される土器棺墓 9 基などが検出された。

#### 弥生時代

センターが実施した調査では、大杉西遺跡、東野遺跡で弥生時代中期から終末期（古墳時代初頭）の遺構を検出している。この他、美濃加茂市や可児市教育委員会によって多くの弥生時代の遺跡が調査されている。南野遺跡（28）では、貝田町式期の長方形の平面形が特徴的な堅穴建物が検出されており、東野遺跡（第 2 次調査）でほぼ同じ形態をもつ遺構が確認されている。また、大杉西遺跡や東野遺跡（第 2 次調査）では弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されている。

#### 古墳時代

集落遺跡では、東野遺跡において前期・後期とともに遺構が検出されているが、中期の遺構は確認されていない。大杉遺跡では、縄文時代から古代にかけての堅穴建物 285 軒（2007 年 10 月時点）検出されており、古墳時代の遺構も多数見られる<sup>1)</sup>。

坂祝町内の古墳では、現在宮内庁が所蔵する銅鏡等が出土した前山古墳（4）や町指定史跡である火塚古墳（8）が著名である。前山古墳は、明治 19 年 1 月、岐阜県令小崎利準から宮内大臣伯爵伊藤博文にあてた『古器物差出之義ニ付上申』（宮内庁所蔵）に、「美濃國加茂郡黒岩村字前山ト稱スル山嶺ニ於テ發見」した「古器物」、「古鏡 四面」「曲玉 三個」「管玉 三拾八個」「劍 一口」の取り扱いを「昨十八年六月十七日付ヲ以テ及上申」し、「同年十二月二十八日付ヲ以御指令」に従って、「通運會社」によつて郵送したことが記載されている<sup>2)</sup>。出土した銅鏡はいずれも仿製鏡であり、古墳の築造年代について徳田誠志氏は、「四世紀末から五世紀初頭」と推定している<sup>3)</sup>。火塚古墳は、小川栄一氏の調査によって上円下方墳と報告された<sup>4)</sup> 義内系両袖式の横穴式石室をもつ大型方墳である。同じ木曾川中流域に所在する次郎兵衛塚 1 号墳とともに、7 世紀の地域首長墓とされているが、発掘調査が行われていないため、正確な築造時期は不明である。『坂祝村誌』の記述によれば、この他、火塚古墳が所在する取組・酒倉地区の郷部山の南斜面には、多数の古墳が立地していたが、開発に伴い滅失したものも多く、坂祝中学校などに遺物が保管されている。また、梅替古墳の立地する深蓋地区に隣接する勝山地区では、個人宅の敷地内にあった塚から勾玉等が出土しており<sup>4)</sup>、現在も同家において保管されている。

梅替古墳と同じ深蓋地区には、南大洞古墳（3）がある。梅替古墳から北に約 100m 離れた緩斜面に立地し、現在は民家の庭となっている。露出している石材から横穴式石室を持つと考えられるが、詳細は不明である。地元の方の御教示によれば、南大洞古墳東の畑地を開墾した際、チャートを石材とする横穴式

石室が出土し、石室内から須恵器を発見したことであった。このことから、南大洞古墳近辺で数基程度が集まる群集墳を形成していた可能性が考えられる。

その他近隣の調査事例として、梅替古墳の南西、各務原山地の南斜面に立地する半ノ木洞古墳（49）がある。昭和 58 年に宅地造成に伴って、各務原市教育委員会によって発掘調査が実施され、全長約 8 m で無袖式の横穴式石室が検出された。梅替古墳に類似する点が多く、注目すべき事例といえる。

#### 古代

坂祝町においては、東野遺跡（第2次調査）において古代の竪穴建物が検出されている。また、美濃地方で最も古い古代寺院とされる願興寺廃寺跡出土の單弁八葉文軒丸瓦と類似する瓦が出土している雲埋廃寺跡（11）がある。その他、東野遺跡の東方丘陵（加茂山）に所在する坂祝神社は、『延喜式神明帳』に記載のある「坂祝（サカハフリノ）神社」に比定されている。

近隣の調査事例としては、大杉遺跡の集落跡や、大杉廃寺跡（23）がある。大杉廃寺跡は昭和 31 年と 50 年に閔市教育委員会によって発掘調査が行われており、一辺 7 m 前後の基壇が確認された。

#### 中近世

坂祝町内における中世以降の調査事例は、東野遺跡以外にはない。東野遺跡では、第2次調査において、上屋の痕跡を伴う竪穴状遺構が検出された。その他坂祝町内における中世の遺跡では、町指定史跡となっている猿啄城跡（17）がある。猿啄城跡は、勝山地区を東に見下ろす城山の頂上に立地しており、その東山麓には居館や家臣団の屋敷地とされる猿啄城居館跡（18）がある。閔市龍泰寺藏『住職肝銘記 無極由緒之事』によれば、応永 14 年（1407）年には城主西村善政が在城していたが、嘉吉元年（1441）に田原頼政により落城したという。『新撰美濃志』ではその後、田原氏は一族の多治見修理の謀反によって討たれ、織田信長に攻められるまで多治見氏が支配したとされる。信長は勝山城と名前を改めて家臣の河尻秀隆を置き、秀隆が天正 3 年（1575）に岩村城主についた際に廃城となつたと推測されている<sup>⑤</sup>。梅替古墳の調査の契機となった見城寺跡（2）は、『坂祝村誌』によれば、天文 8 年（1539 年）当時猿啄城主であった田原左衛門頼吉によって城の鬼門寺として建立され、大洞山見城寺と号し、文禄元年（1592 年）に勝山村に移転、江戸時代の転宗に伴い覺専寺と名称を改め、明治 33 年に現在地に移転したとされる寺院である<sup>⑥</sup>。その名のとおり、猿啄城跡を南西方向に望む立地となつてている。

坂祝町では、近世に中山道が通つておらず、鵜沼宿からうとう峠を越えて坂祝に入り、郷部山の南側を通つて太田宿に至つた。なお、東山道については、木曾川の渡河地点に諸説あるため、飛騨支路を含めて坂祝町との関わりは定かではないが、徳田氏は、梅替古墳より北の尾根上に所在する前山古墳の立地が、「南と西方向は前の尾根にさえぎられてまったく見渡すことができないが、北に向けて眺望が開けて」おり、「東方向に恵那山がそびえ、信州へ通じる道の祭祀遺構が見つかっている神坂峠を望むことができる」ことから、「巨視的に見れば後の東山道に関係してくるもの」と推定している<sup>⑦</sup>。

#### 注

- 1) 岐阜県教育委員会・財團法人岐阜県文化財保護センター2008『岐阜県新発見考古速報－平成 20 年度岐阜県発掘調査報告会－』
- 2) 坂祝町教育委員会町史編纂事務局編 2005『坂祝町史（通史編）』
- 3) 徳田誠志 1992「古墳時代前期末の二古墳－岐阜県行基寺・前山古墳をめぐって－」『阡陵・関西大学博物館学課程創設三十周年記念特集』

- 4) 坂祝村教育委員会編 1955『坂祝村誌』  
 5) 岐阜県教育委員会 2004『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第3集(可茂地区・東濃地区)』

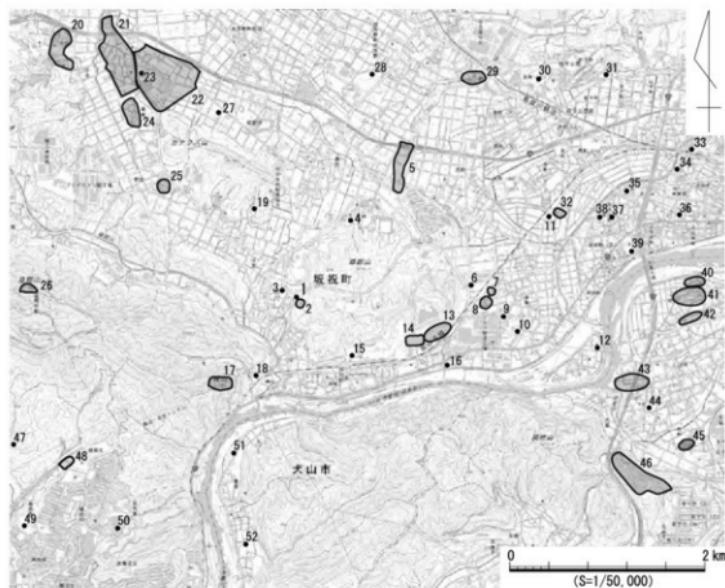


図5 周辺の遺跡 (S=1/50,000)  
 国土地理院新版淡色地図 (25,000分の1) を1/2に縮小して作成

表1 周辺遺跡一覧

鈴	遺跡名	時代
1	梅替古墳	古墳
2	見城寺跡	中世
3	南大洞古墳	古墳
4	前山古墳	古墳
5	東野遺跡	縄文～近世
6	山神古墳	古墳
7	西稻葉古墳群	古墳
8	火塚古墳群	古墳
9	新木林古墳	古墳
10	北高見古墳	古墳
11	雲理庵寺跡	奈良
12	東島古墳	古墳
13	野田古墳群	古墳
14	野田遺跡	縄文
15	神田古墳	古墳
16	芦戸遺跡	縄文・弥生
17	猿啄城跡	中世

鈴	遺跡名	時代
18	猿啄城居跡跡	中世
19	輪形古窯跡	古代・平安
20	平井遺跡	旧石器
21	大杉西遺跡	縄文～中世
22	大杉遺跡	縄文～奈良
23	大杉庵跡跡	奈良
24	栗倉遺跡	弥生～平安
25	野田遺跡	旧石器
26	迫間城跡	中世
27	稻辺遺跡	縄文
28	南野遺跡	弥生・古墳
29	愛電所南遺跡	弥生
30	県主神社西遺跡	弥生
31	矢田庵跡跡	奈良
32	トドメキ古墳	古墳
33	井口遺跡	弥生
34	井上遺跡	縄文
35	八幡神社西遺跡	平安

鈴	遺跡名	時代
36	藏の内古墳	古墳
37	太田元葉御麻寺跡跡	奈良
38	沖縄糞遺跡	弥生
39	太田宿本陣跡	近世
40	土田袖師遺跡	縄文
41	八幡古墳群	古墳
42	土田定安遺跡	古墳
43	北裏遺跡	縄文～鎌倉
44	宿遺跡	縄文
45	土田栄町遺跡	縄文
46	土田城跡	中世
47	中口洞古窯跡	平安
48	東洞古窯跡	平安
49	半ノ木洞古墳	古墳
50	うとう岬一里塚	近世
51	尾崎遺跡	縄文
52	瀬ノ上遺跡	中世

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

今回の梅替古墳発掘区は、郷部山西斜面の尾根上に位置しており、第2章第1節で述べた砂岩・泥岩起源の風化土層とそれらが斜面上方から流入したことにより、地形が形成されている。墳丘東側から南側にかけては谷状の地形が多量の砂で埋没しており、古墳築造当時とは大きく地形が変わっている。墳丘北側や西側は、古墳本体により斜面上方から土砂流入が遮られたと考えられ、南側とは堆積状況が異なる。このなかには墳丘からの流入土も含まれる可能性が高い。

基本層序は試掘確認調査の調査坑及び調査結果により、I層からIII層を設定した。

#### I層 表土

地表面に堆積した腐葉土である。現況が山林であるため、発掘区全域に分布する。極めて薄い堆積であり、傾斜の強い箇所ではI層が斜面下方に流出し、II層が露出した箇所もみられた。

#### II層 流土（遺物包含層）

斜面上方から流入したIII層や墳丘からの流入土を一括した。総じてしまりが良く、色調は明褐色やにぶい黄褐色などさまざまだが、III層（基盤層）と同様な明るい褐色を呈するのが大半である。III層と類似することから、II層とIII層との区別が難しい箇所もあった。また、斜面上方からの流入土と墳丘からの流入土との区別が困難であった。これは、同じ基盤層が起源の土であるためと考えられる。

墳丘東側から南側（尾根の軸線より南側）では、斜面上方から流入した厚い砂の堆積（図7：24・27層/砂層・砂質シルト層、図8：34・37～39層/砂層）によって、確認した周溝のほとんどを埋めていた。南側では、III層を削平して造成された中世以降の遺構を確認したが、これらの遺構も厚い堆積によって埋没していた。さらには、最下層付近からも中世の遺物が出土し、墳丘下で確認できた旧表土が認められないことから、付近の開発や伐採などの影響を受けて中世から近世にかけて埋没したと考えられる。堆積している砂の粒が粗いことから、比較的短期間のうちに堆積が進行したと考えられる。

墳丘北側から西側（尾根の軸線より北側）では、確認した周溝が流入土で埋没していたが、墳丘南側と比べ薄い堆積であった。墳丘からの流入土（図7：22層/粘質シルト層、図8：33層/シルト層、35・36・41層/粘質シルト層、40層/砂質シルト層）が主体と考えられ、東側や南側よりもシルト質で粘性がある。

墳丘の南西で検出した人為的な盛土であるSX3は、中世に流土がある程度堆積した状態で造成されたものであり、II層の上に造成していることが確認できる（図8：28～32層）。これをふまえると、墳丘の改変前後で層序に段階を設定する必要が生じるが、調査においてこれを区別することは困難であり、墳丘東側の土層断面図で見られるように、墳丘からの流入土と斜面上方からの流入土が互層になっている部分もある（図8：34～41層）。このため、発掘作業中の遺物取り上げの際は一括してII層として取り扱った。この箇所からは須恵器と中世陶器を中心に出土した。墳丘の崩落と斜面上方からの流入のおおよその時期を示すとともに、崩落や流入が数回にわたったことを示すと考えられる。

### III層 基盤層

尾根を構成する基盤層をIII層とした。先述したように、II層と類似する明るい褐色（赤褐色・黄褐色）や橙色（にぶい黄橙色・橙色）を呈する。堆積土中に風化した砂岩を多量に含む。墳丘東の尾根上や周溝の底面付近では岩盤が露出している（図8：47層）が、斜面下方の西に向かうにつれて粘質の強いシルト層になる。これは古墳が造成される以前に斜面上方から風化した土層が流入したためと考えられ、基盤層は東から西にかけて岩盤→風化土層→崖錐性堆積が表面に露出していると推定される。古墳を造成する際には、岩盤が露出した急傾斜地を避けて、流土によって形成された緩傾斜地を選地したと考えられる。なお、墳丘盛土の下層から、旧表土及び漸移層を確認した（第3章第3節図20～図22）。古墳直下のみであることから基本層には含めていないが、古墳造成前には尾根全体にみられたと考えられる。

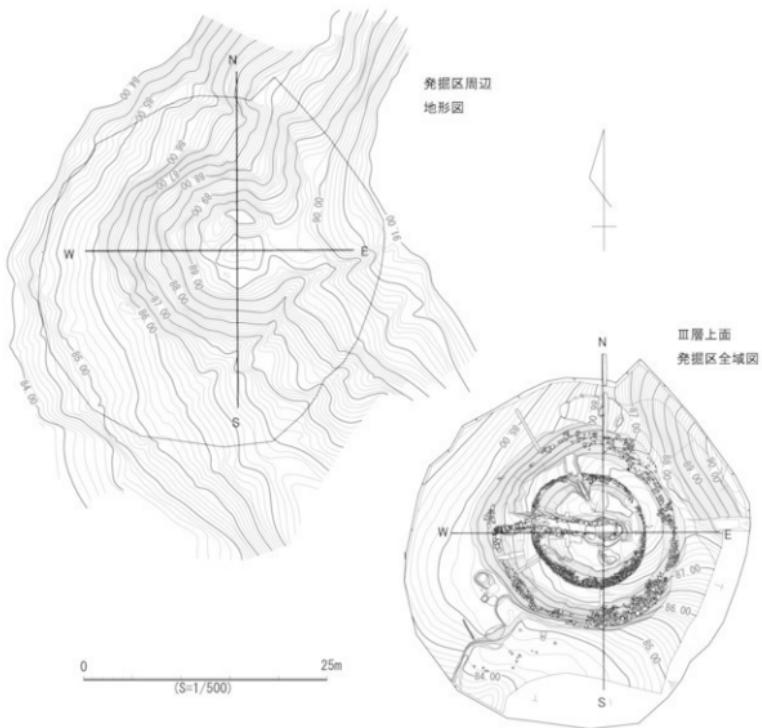


図6 発掘区土層断面図の位置

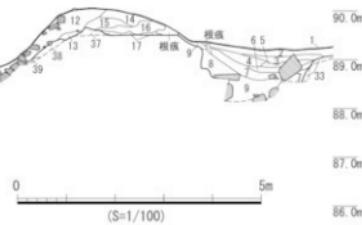
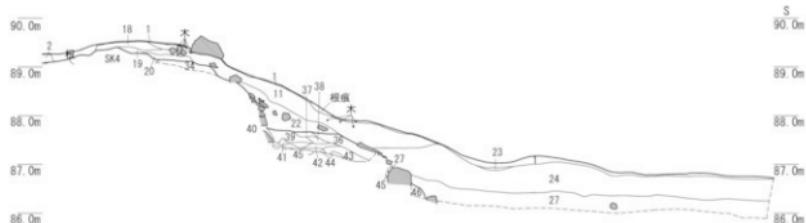


図7 発掘区土層断面図1



1. 7.SYB4/3 黄褐色土（しまりなし、粘性なし）蘿葉土  
2. 10YB4/2 反黄褐色シルト（砂岩粒・黄褐色土7%含む、炭化物わずかに含む、ややしまりあり）  
3. 2. SYB4/2 墓灰褐色砂質シルト（砂岩粒・黄褐色土3%含む、炭化物わずかに含む、ややしまりあり）  
4. 10YB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒1%含む、ややしまりあり）  
5. 2. SYB4/3 オリーブ褐色粘質シルト（砂岩粒3%含む、ややしまりあり）  
6. 10YB4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（砂岩粒3%含む、ややしまりあり）  
7. 10YB4/3 黄褐色粘質シルト（砂岩粒3%含む、ややしまりあり）  
8. 10YB4/6 黄褐色粘質シルト（砂岩粒1%含む、ややしまりあり）  
9. 10YB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒1%含む、ややしまりあり）  
10. 7. SYB4/3 黄褐色粘質シルト（砂岩粒、炭化物わずかに含む、ややしまりなし）  
墓灰褐色からの土層  
11. 7. SYB4/6 黄褐色粘質シルト（砂岩粒2%含む、ややしまりあり）  
12. 10YB4/8 黄褐色砂質シルト（炭化物わずかに含む、しまりなし）  
13. 10YB4/2 黄褐色砂質シルト（砂岩粒わざかに含む、しまりなし）  
14. 10YB4/6 黄褐色シルト（砂岩粒・砂質10%含む、ややしまりあり）  
15. 10YB4/6 にぶい黄褐色シルト（砂岩粒・砂質10%含む、ややしまりあり）  
16. 7. SYB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒・砂質15%含む、ややしまりあり）  
17. 7. SYB5/6 黄褐色シルト（砂岩粒・砂質20%含む、ややしまりあり）

18. 7. SYB4/4 黄褐色シルト（砂岩粒・砂岩7%含む、ややしまりあり）  
19. 7. SYB4/6 黄褐色粘質シルト（砂岩粒・砂質3%含む、しまりなし）  
20. 10YB4/8 黄褐色砂質シルト（炭化物わずかに含む、しまりなし）  
21. 10YB5/6 黄褐色砂質シルト（砂岩粒3%含む、しまりなし）  
22. 10YB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒、炭化物わずかに含む、しまりなし）  
填埋土上  
23. 10YB2/2 黑褐色粘質シルト（しまりなし）  
24. 10YB6/8 黄褐色砂質シルト（砂岩粒3%含む、しまりあり）  
25. 7. SYB5/6 明褐色粘質シルト（砂岩7%混じり、しまりなし）  
26. 10YB4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（砂岩7%混じり、しまりなし）  
27. 10YB5/8 黄褐色砂質（しまりなし）  
28. 7. SYB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩7%混じり、しまりなし）  
29. 7. SYB2/1 黒色土（炭化物の堆積）  
30. 7. SYB4/6 黄褐色粘質シルト（砂岩7%混じり、ややしまりあり）  
31. 7. SYB5/6 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
32. 10YB2/4 明褐色粘質シルト（粘性強く、ややしまりあり）  
33. 10YB4/6 黄褐色シルト（砂7cm程度の砂岩7%含む、しまりあり）  
34. 7. SYB4/4 黄褐色粘質シルト（砂2~3cmの砂岩7%混入、しまりあり）  
35. 7. SYB4/6 黄褐色粘質シルト（砂2~3cmの砂岩7%混入、しまりあり）  
36. 10YB3/4 明褐色粘質シルト（ややしまりあり）

37. 10YB3/2 黑褐色粘質シルト（褐色土が15%混じる、ややしまりあり）  
38. 37 層とはほぼ同じだがしまりあり  
39. 7. SYB2/2 黑褐色粘質シルト（褐色土がブロック状に15%混じる、しまりあり）  
40. 7. SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
41. 7. SYB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒が2%混入、しまりあり）  
42. 7. SYB4/3 黄褐色粘質シルト（砂岩粒が2%混入、しまりあり）  
43. 7. SYB4/4 黄褐色粘質シルト（砂岩粒1%含む、ややしまりあり）  
44. 7. SYB4/1 黑褐色粘質シルト（45層が4号間に混じる、しまりあり）  
45. 7. SYB4/6 黄褐色粘質シルト（砂岩粒・ブロック10%混入、黄褐色ブロックが部分的に混じる、炭化物わずかに含む、しまりあり）  
46. 7. SYB4/1 黑褐色粘質シルト（砂岩粒・炭化物のほかに含む、しまりあり）  
47. 10YB4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
48. 7. SYB6/6 黄褐色土（径2~3cm程度の砂岩7%含む、しまりあり）

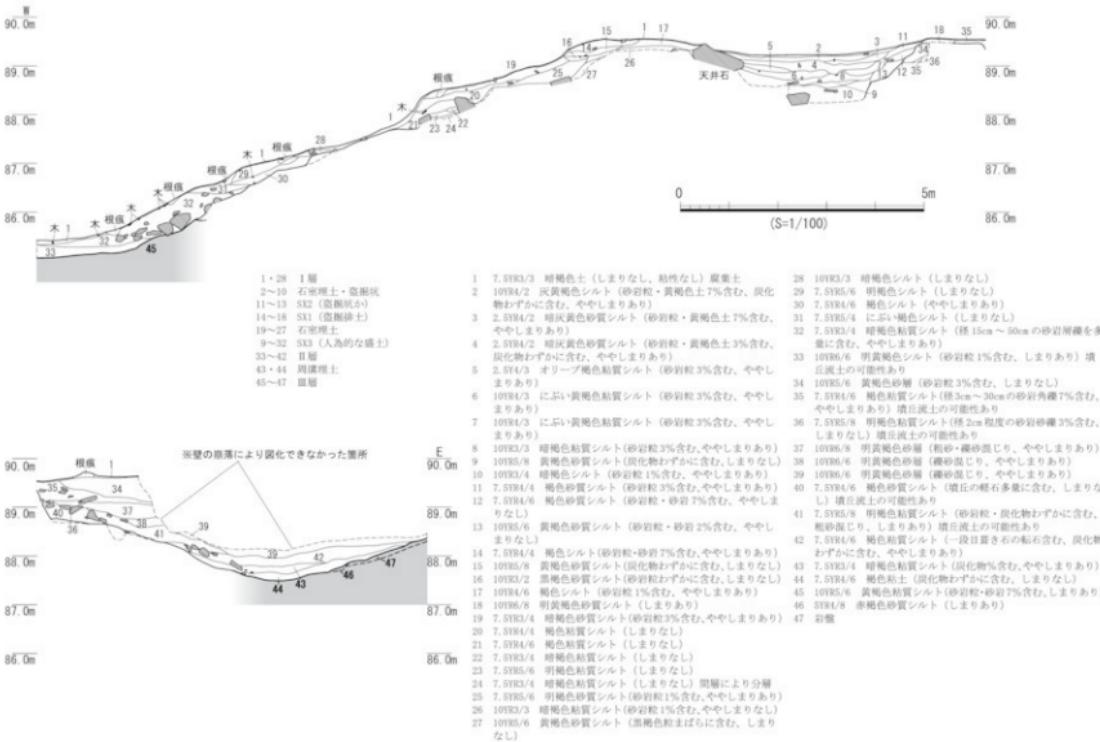


図 8 発掘区土壌断面図 2

## 第2節 遺構・遺物の概要

### (1) 遺構の概要

今回の調査では、古墳の他に溝状遺構、石列、柱穴、土坑などを検出した。古墳以外の遺構は表2のとおりである。時代は縄文時代から近世まであり、断続的に当地が利用されてきた状況が判明した。本書で用いた遺構の種別は以下のとおりであり、略号と番号を付してそれぞれ識別できるよう表示した。

**溝状遺構 (SD)** 長細い平面形をもち、人為的に掘削された可能性が高い掘方をもつ遺構を一括した。

**石列 (SW)** 積を人為的に組み合わせた遺構を SWとした。葺石には略号をつけていない。

**炉・被熱遺構 (SL)** 周囲の土と比較し、被熱による変色が確認できる遺構を一括した。

**柱穴・柱穴状遺構 (SP)** 柱痕跡が確認できる遺構、または柱痕跡は確認できないが掘方の形状が柱穴に類似する遺構を一括した。

**土坑 (SK)** 地面を掘りくぼめた遺構のうち、前述した SD・SP に当てはまらない遺構を一括した。

**その他 (SX)** その他の遺構を一括した。壺掘坑やその堆土、古墳以外の人为的な盛土がある。

表2 古墳以外の遺構検出数

遺構名	略号	遺構数	検出面	時期						備考
				縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
溝状遺構	SD	5	III層上面							SD 1 : 周溝 SD 2 : 排水施設
石列	SW	1	II層上面							
炉・被熱遺構	SL	2	III層上面							SL 1 : 火葬施設か、SL 2 : 煙道付炉穴
柱穴状遺構	SP	7	III層上面							柱穴を含む
土坑	SK	22	II層上面							
その他	SX	3	III層上面							

遺構検出面は、II層上面とIII層上面である。II層上面で検出した遺構は、古墳を覆うII層が堆積した後であることから、古墳築造よりも後にする遺構である。II層上面の遺構には、石列、土坑がある。III層上面から検出した遺構は、縄文時代の遺構、古墳、中世以降の遺構がある。縄文時代の遺構は、墳丘下で検出した煙道付炉穴と考えられる遺構がある。古墳に関する遺構は、墳丘、葺石、石室、排水溝、周溝などがある。中世以降の遺構は、土坑、柱穴、人为的な盛土などがある。

### (2) 遺物の概要

今回の調査で、発掘区から出土した遺物は2,698点である。所属時期は古墳時代を中心に縄文時代から近世まで長期間にわたる。遺物は、土器類、石器類、金属製品が出土し、その他には炭化物などがある(表3)。

表3 遺物出土点数

	土器類	石器類	金属製品	その他	合計
出土点数(点)	2,504	164	15	15	2,698

表4に遺構ごとの遺物出土点数(遺物包含層も含む)を示した。遺物総数の51.4%は、II層から出土した。II層出土遺物の55.9%は、本来は古墳に供献された須恵器で、後世の改変や壺掘によって原位置を保たない。須恵器は、II層の他、石室埋土や周溝埋土から出土した。縄文時代の土器や石器類は、墳丘盛土、

石室埋土、周溝埋土などから出土した。中世の遺物である山茶碗や陶磁器類は、中世以降の遺構の埋土に含まれる他に、II層、石室埋土、周溝埋土から出土した。なお、墳丘盛土内から須恵器が3点出土しており<sup>1)</sup>、うち2点は墳丘裾部、1点は墳丘盛土表面近くである。いずれも表面に近いため、掘削段階においてII層が除去しきれていた可能性が高い。大半の遺物は古墳築造や盜掘などによって、原位置をとどめていない可能性が高いと判断し、須恵器は古墳時代、山茶碗や陶磁器類は中世以降、縄文時代の土器・石器は縄文時代の遺構の節で詳細を述べる。

表4 遺構ごとの遺物出土点数（遺物包含層を含む）

遺構名 遺構番号	調査時 遺構番号	縄文 土器	石器類	土師器	須恵器	金属 製品	山茶碗	陶磁器 類	その他	合計
墳丘盛土 S001		22	22	1	3					48
墳丘上のII層 S001	<b>21</b>	<b>20</b>	<b>5</b>	<b>359</b>	<b>1</b>	<b>33</b>	<b>3</b>	<b>1</b>	<b>443</b>	
石室 盜掘坑 S005	15	23	10	78	6	2			4	138
石室 羨道部 S015	<b>11</b>	<b>10</b>	<b>2</b>	<b>131</b>	<b>3</b>	<b>32</b>				<b>189</b>
周溝（SD 1） S021	1	5	2	49			42		7	107
排水溝（SD 2） S022	<b>2</b>	<b>2</b>								<b>4</b>
SD 3 S032			2		17					19
SK 2 S013			<b>1</b>							<b>1</b>
SK 3 S016	1	1			1				1	4
SK 7 S026					<b>1</b>			<b>1</b>		<b>2</b>
SK10 S030					1	3	5	5		14
SK11 S031					<b>8</b>	<b>1</b>	<b>4</b>			<b>13</b>
SK15 S037							2			2
SK23 S057	1									<b>1</b>
SK24 S058									2	2
SL 1 S024				<b>2</b>					<b>3</b>	<b>5</b>
SL 2 S049									2	2
SP 5 S046							<b>1</b>			<b>1</b>
SP 6 S047									1	1
SW 1 S008					<b>2</b>	<b>1</b>	<b>1</b>			<b>4</b>
SX 1 S002	61	36	1	237		76	40			451
SX 2 S014		<b>2</b>		<b>5</b>						<b>7</b>
SX 3 S020	11	14	7	174		60	11			277
攪乱坑 S009				<b>2</b>	<b>1</b>					<b>3</b>
試掘坑（TP 2） S006	6	4			6					16
遺物包含層（II層） —	<b>16</b>	<b>22</b>	<b>7</b>	<b>416</b>	<b>3</b>	<b>388</b>	<b>91</b>	<b>1</b>	<b>944</b>	
合計	168	164	40	1,491	15	646	159	15	2,698	

## ①土器類

土器類は、縄文土器、土師器、須恵器、山茶碗、陶磁器類がある。接合後の破片数は、須恵器が全体の53.9%を占め、次いで山茶碗が約27.1%を占める（表5）。須恵器、山茶碗、陶磁器類の接合比率が縄文土器、土師器に比して高い。

表5 土器類出土点数

	縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	陶磁器類	合計
接合前破片数（a）	168	40	1,491	646	159	2,504
接合後破片数（b）	168	39	858	432	94	1,591
(b) の全体に対する割合 (%)	10.6	2.5	53.9	27.1	5.9	100.0
接合比率 (%)	0	2.5	42.5	33.1	40.9	36.5

以下、種別ごとに概要を示す。なお、点数はすべて接合後の破片数である。

**縄文土器** 168点が出土した。大半は細片で、器種が確認できたものはすべて深鉢である。時期は、早期から前期の様相を示す<sup>2)</sup>。

**土師器** 39点が出土した。大半は細片で、時期・器種の特定が困難なものもある。時期・器種が確認できたものには、古墳時代の甕(25点)、中近世の土師器皿(10点)などがある。

**須恵器** 858点が出土した。器種は壺蓋、壺身、高杯、甕、器台、壺、瓶、罐がある。時期は5世紀末から7世紀末までで、その產地・編年観は渡辺氏、田辺氏、斎藤氏の研究を参照した<sup>3)</sup>。

**山茶碗** 432点が出土した。器種は碗、皿がある。東濃産が大半を占め、その他美濃須衛産、尾張産がある。

時期は12世紀末から15世紀中頃までで、その產地・編年観は藤澤氏の研究を参照した<sup>4)</sup>。

**陶磁器類** 94点が出土した。器種は古瀬戸、常滑の甕、中国産の磁器がある。古瀬戸は、四耳壺、天目茶碗、綠釉小皿、内耳鍋、擂鉢、片口鉢がある。常滑産には甕の他玉縁状口綠壺がある。中国産の磁器には、青磁と白磁がある。時期は13世紀後半から15世紀中頃までで、その產地・編年観は藤澤氏、中野氏、原氏の研究を参照した<sup>4)</sup>。

## ②石器類

164点が出土した。石器類は、縄文時代の石器の他、古墳に副葬されていたと考えられる石製品、中世の石鍋、詳細時期不明の砥石がある。石器種別ごとの出土点数と石材を表6に記した<sup>5)</sup>。スクレイパー、楔形石器、RF、MF、磨石・敲石の種別認定については以下のとおりである。

**スクレイパー** 縁辺部に連続した剥離を施して刃部を作り出した不定形の剥片石器。

**楔形石器** 相対する二側辺に潰れ状の剥離痕が見られる剥片石器。

**RF** 縁辺の一部に二次加工を施すもので、器種認定できない剥片石器。

**MF** 微細な剥離が不連続に施される石器、または二次加工がなく使用面のある剥片石器。

**磨石・敲石** 拳大の川原石または棒状の石材を用い、その表面に使用痕としての磨痕や敲打痕が確認できるもの。

表6 石器類出土点数

石材	石 鐵	石 錐	石 匙	さ ざ く	楔形 石器	石 核	M F	R F	剥 片	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	石 錘	石 皿	磨 石 盤	紡 錐 車	管 玉	石 鍋	砥 石	合 計
チャート	5		1	7		25	5	21											64
下呂石	5	1			1	3	7	2	16										35
頁岩				1															1
黒曜石						1		1											2
ホルンフェルス										4									4
粘板岩										2									2
泥岩									2									1	3
流紋岩										1									1
濃飛流紋岩														2					2
安山岩											1	1	12				1	15	
花崗岩											1	2							3
花崗斑岩											1								1
砂岩											5							4	9
凝灰岩											2								2
黒色片岩											1								1
緑色片岩													2	15					17
滑石																1			1
不明												1							1
合計	10	1	1	8	1	3	33	7	38	8	1	1	3	25	2	15	1	6	164

## ③金属製品

金属製品は、15点出土した。副葬品と考えられるものが多く、古墳と中近世墓に伴うものがある。確認した金属製品は、耳環、鉄鎌、銅錢、鉄砲玉である。

## ④その他

炭化物15点と骨1点がある。SK24・SL2の炭化物は、縄文時代早期である（第4章参照）。骨はG4グリッドのII層から出土したが、細片のため詳細は不明である。

## (3) 遺構一覧表、遺物観察表、遺物実測図について

本報告書に掲載する遺構一覧表、遺物観察表、遺物実測図のなかで使用している記号や表記について、ここで説明する。

## 遺構一覧表

- 地区割りは、遺構を検出した地区で、複数にまたがる場合は「～」で結んだ。
- 遺構の検出層位は、基本層序と検出面で表し、II層上面で検出した遺構の場合「II層上」と表記した。
- 遺構の規模の単位はmであるが、（　）で示したものは、全形が確認できなかったため、残存長を測ったものである。
- 遺構の堆積状況、平面形状、断面形状は図9・10のように分類し、記号で表した。

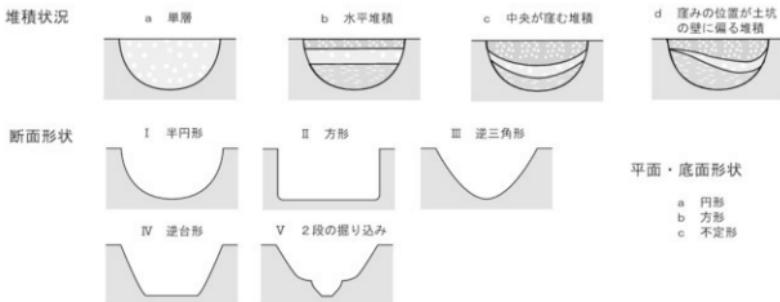


図9 土坑分類模式図

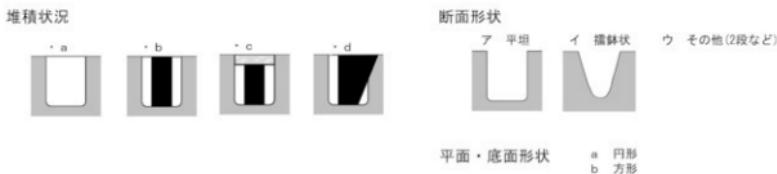


図10 柱穴分類模式図

### 土器観察表

- ・出土層位のa～uは深さを示す。
- ・a層（0～5cm）、b層（5～10cm）、c層（10～15cm）、・・・t層（95～100cm）、u層（100～105cm）
- ・出土層位のI・II・IIIはI層・II層・III層を示し、アラビア数字は、遺構の埋土を分層した層位を示す。
- ・（ ）で示した数値は、口径・底径は推定値、器高は残存高を示す。なお、残存高は口縁部または底部が残存している遺物について計測した。また、合成して実測を行った遺物の器高は「推定」と表記した。
- ・縄文土器の型式名については、「総覧 縄文土器」を参考にした。
- ・須恵器の型式名については、田辺氏、斎藤氏、渡邊氏の編年における記述を引用した。
- ・山茶碗・陶磁器類の型式名については、藤澤氏、中野氏、原氏の編年における記述を引用した。

### 石器・石製品・金属製品観察表

- ・「最大長」「最大幅」「最大径」「最大厚」の単位はcmである。また、「質量」の単位はgである。なお、欠損している場合は、（ ）内に残存値を記入した。
- ・摩耗痕や線状痕の有無は、ルーペ（×10）により行った。

### 遺物実測図

- ・石器実測図中のスクリーントーンは摩耗痕の範囲を、実線は線状痕の方向を示した。
- ・石器の自然面はドット、節理面は一点鎖線で示した。

### 注

- 1) 墳丘盛土から出土した須恵器3点は、甕片2点と壺片1点である。実物を見る限り、古墳築造以前の時期とは考えられない。甕片の1点は、掲載遺物79と同一個体と考えられる。
- 2) 縄文土器の分類に際しては以下の文献を参考にした。  
小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』アム・プロモーション
- 3) 須恵器の器種・編年観及び产地については、渡邊博人氏の指導を受けた。また以下の文献を参照した。  
渡邊博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相一蓋坏の型式設定とその編年試案一」『美濃の考古学』創刊号  
斎藤孝正 1995 「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録 第3巻 東日本編I』雄山閣  
田辺昭三 1982 『須恵器大成』角川書店
- 4) 山茶碗・陶磁器類の器種・編年観及び产地については、藤澤良祐氏の指導を受けた。また、以下の文献を参照した。  
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社  
藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター  
中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
- 5) 石器種別、石材については、長屋幸二氏の指導を受けた。

### 第3節 古墳時代の遺構・遺物

#### (1) 梅替古墳の遺構

梅替古墳は、丘陵の尾根上に単独で築造された古墳である。今回の調査では他に古墳を確認する事は出来なかった。ここでは、今回の発掘調査によって明らかとなった梅替古墳本体とそれに付属する遺構について述べる。

#### ○墳丘の規模・形状（図11）

墳丘は、明瞭なテラスがある2段築成の円墳である。墳丘規模は、墳丘斜面の傾斜変換点（A）と1段目葺石基底石の位置（B）で推定した範囲で若干異なる（図11）。Aはおよそ1段目葺石基底石の外側0.5m～4mをめぐる。その規模は北西～南東方向22m、北東～南西方向20mで、北西～南東方向が長い不整な梢円形を呈する。長軸方向を主軸とするとN-30°～Wとなる。Bは、1段目基底石を結んだ範囲で、北西～南東の軸が長い梢円形を呈し、長軸はN-28°～Wを向き、Aとほぼ同じである。その規模は推測値で長軸長19.5m、短軸長18mを測る。詳細は後述するが、Bの1段目基底石は盛土のおよその範囲と一致し、Aの傾斜変換点は削平した基盤層の範囲を示していると考えられる。

図12は墳丘盛土の除去後（以下、墳丘下という。）の地形と、墳丘より外側のⅢ層上面の地形を合成した図である。北東からのびる旧地形の尾根筋と墳丘下の地形に比して、墳丘より外側の北側や西側が平坦な地形になっている状況が確認できる。墳丘の盛土を行う際に、現状で周溝として残る部分のほか、墳丘周囲の地形を削平している可能性がある。墳丘下には、墳丘断面図（図20～図22）において、旧表土を確認していることから、古墳築造以前の地形が改変されないまま残されていることは明らかである。つまり、地形が墳丘下と連続しない北西部の平坦に近い地形は、墳丘築造に伴う削平の結果と捉えることも可能で、先に述べたAの基盤層を削平した範囲とほぼ合致する。

2段目墳丘の平面形は、A・Bと同様に北西～南東の軸が長く、主軸はN-28°～Wを向く。その規模は長軸長12.7m、短軸長11.3mを測る。Bと2段目の平面形は長軸と短軸の比が1.1前後で相似形に近い。

当古墳の墳丘規模は、葺石基底石で区画して墳丘盛土を構築しつつ葺石を施したBの範囲とするのが妥当と考えられる。長軸長19.5mと短軸長18mとの誤差は、墳丘の東側の尾根を大規模に削平する制約に起因し、本来意図した規模は長軸長19.5mであろう。Bの範囲で石室主軸方向（図11 C-C'）及び石室主軸直交方向（図11 B-B'）で測った規模もほぼ19.5mで一致することから、長軸長をもって墳丘規模としてよいと考えられる。

墳丘の高さは、2段目上部が消失しているために不明だが、墳丘残存部分の最高所が89.52mで、墳丘南側の葺石基底石の底面（約85.0m）との比高は約4.5mで最大である。また、墳丘東側の葺石基底石の底面（約87.5m）との比高は約2mで最小である。

#### ○葺石（図11、図13）

1・2段目ともに、墳丘法面が葺石で覆われていたことを確認した。石材は石室と同じく、表面が白色・灰白色を呈する硬質の砂岩を多く使用している。発掘区の基盤層に含まれるものと同質で、断面が褐色・橙色を呈する軟質砂岩もわずかにみられる。いずれも郷部山基盤の石材である。なお、葺石の定義は横幕氏の分類による<sup>1)</sup>。

**1段目葺石** 長さ0.5m～1.0m程度の大型石材を基底石とし、長さ0.2m～0.6mの石材の平坦な面を外表

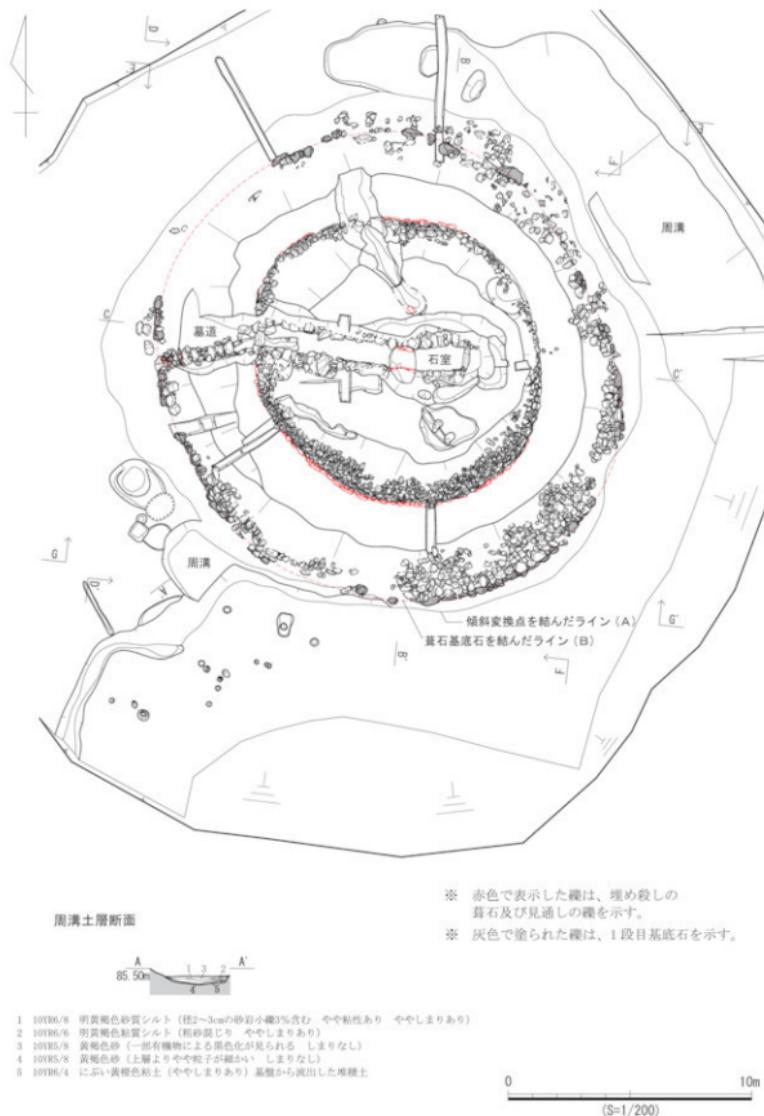


図11 墳丘平面図及び周溝断面図



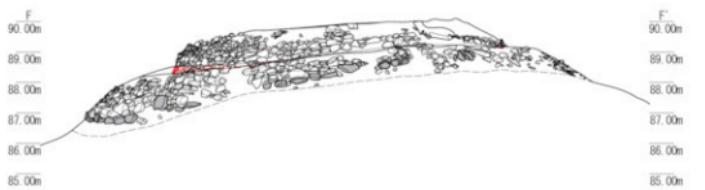
図12 填丘下地形及びIII層上面地形合成図

に揃えて積み上げている。全体的な傾向として、斜面上部ほど石材が小さくなり、面が不揃いなものが増える。積み方は、基底石に大型の石材を使う他は統一感が無く、あり合わせの石材で隙間を埋めるように積み上げている。残存状態が悪く、良好な状態で残る横目地を確認することができなかった。また、縦方向に目地を通す区画石列は認められなかった。以下、東西南北の4方向から見た法面(図13)ごとに1段目葺石の詳細について述べる。なお、図11で表記した傾斜変換点を結んだAラインを図13でも破線で表記した。

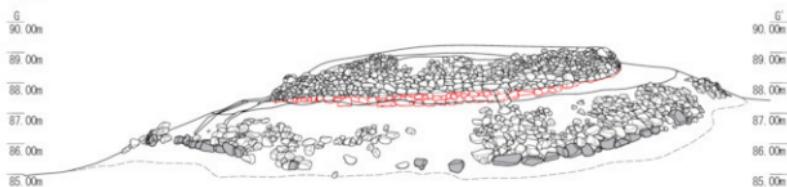
**東法面** Aラインの標高は、北端が88.0mを示し、南側へ向かってやや上がって88.4mとなり、その後南端86.3mへと下がる。これに沿って約0.3mの比高で葺石が配される。基底石は、間が抜ける部分が多いが、中央から南側にかけて確認できる。中央にある基底石は、後述する他の法面より標高が高い。北側は、残存状態が悪く、図示した石材は基底石を除き、原位置を留めていないものも多く含まれていると思われる。南側は、テラス付近まで葺石が確認できるので、比較的の残存状態が良い。

**南法面** Aラインの標高は、西端は85.3mで、中央の85.0mまで下がり、そこから東端87.4mまで上がる。基底石は、中央部分を除き、東西両側で確認できる。Aラインと約0.4mの比高があるが、その方向は揃っている。東法面から続く葺石は南法面中央付近まで良好に残存する。この箇所では、全体がII層に覆われていたため、残存状態が良いと考えられる。基底石も含め面が揃ったものが多く、8~9段まで残存している部分も認められる。ただし、面が揃っていないかったり間が抜けたりしている部分も多く、特に上半で顕著である。

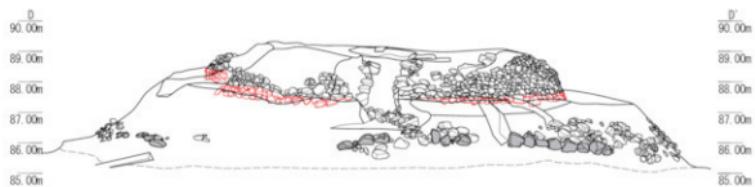
東法面



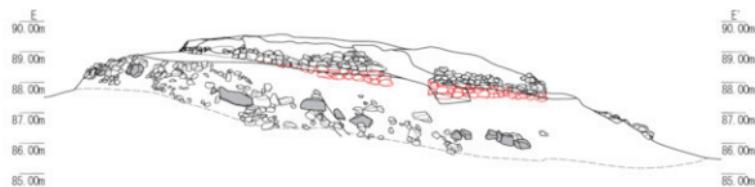
南法面



西法面



北法面



※ 赤色で表示した縦は、埋め殺しの葺石を示す。

※ 灰色で塗られた縦は、1段目基底石を示す。

※ 破線で示した縦は、傾斜変換点を結んだライン（A）である。

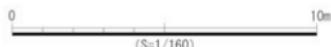


図13 蔽石見通し図

**西法面** Aラインの標高は、85.2m付近ではほぼ一定である。Aラインと基底石は約0.4m～0.7mの比高をもって設置しているが、方向はおよそ揃う。南側は中世以降の人为的な盛土であるSX3に覆われていたためか、基底石が良好に残存し、基底石から上2～4段まで残存している箇所もみられた。基底石は中央付近の設置位置が高く、南側に向かって下がる。北側では、葺石が検出されなかった。この部分は墓道の北側で、棺を運び込むルートとして当初から葺石が敷設されていなかったとも考えられるが、単に残存状況が悪い箇所、もしくは後世の遺構の転用によって葺石が使用されたことなども想定でき、構築時から敷設していたかについては不明である。

**北法面** Aラインの標高は、東端87.7mから西端85.5mへ向かって大きく下がる。全体に残存状態が悪いが、基底石とした石は原位置をとどめていると考えられる。基底石より上部の石材については、法面の裾に転落石が集積している状況もみられなかつたことや法面の流土中にも一部石材が含まれていたが、それらを含めても法面全体を覆うには量が少ないとから、後世に持ち去られた可能性がある。その1つは、SX3の芯材や中世以降の石列であるSW1の石材として二次的に転用されていること（第3章第4節参照）が挙げられる。また、流土中の転落石が2段目のものと考えた場合、構築時から基底石のみであった可能性も残る。西法面北側と同じく、西側では葺石は検出されなかつた。理由は西法面で述べた通りである。

**2段目葺石** 1段目より良好な残存状態で検出した。調査当初は、盗掘排土や流土などにより、一部を除いてほとんど埋没していたため、後世の石垣である可能性も考えていた。基底石を埋め殺しにする特徴をもつため、2段築成でなく「内回り石組」をもつ墳丘である可能性も考えた<sup>2)</sup>が、北東部テラス上の流入土が少なく2段築成の形状をとどめていたことや、土層観察の結果、古墳構築時から石材が外面に露出していたことが明らかになった。このことから、2段目の墳丘に伴う葺石であると判断した。1段目と比較すると使用されている石材は長さ0.2m程度と小ぶりであるが、基底石には長さ0.6m程度あるものも認められる。積み方は1段目と同様に規則性はみられず、区画石列も認められなかつた。法面の裾に基底石を積んだ後は、石材の大きさに合わせて隙間を埋めるように積み上げたと考えられる。以下、1段目と同様、法面ごとに2段目葺石の詳細について述べる。

**東法面** 表出している最下段の葺石は、北端89.2mから南端88.5mに向かって下がる。他の法面と比較して埋め殺しとなる葺石が少なく、南端から4mの範囲で1段目途中～2段目途中が埋め殺しとなる。その直上3～6段が残り、残存状況が良い。

**南法面** 表出している最下段の葺石は、東端が88.5mから西端87.5mに向かって下がる。基底石はほぼ埋め殺しとなり、中央付近で2段～3段目途中、東西両端で1段目途中～2段目途中が埋め殺しとなる。南法面は現存する墳丘法面全体を覆うほどの状態で検出した。基底石から上4～5段までは面を揃えて約70°の角度で立ち上がり、そこから上は石材が小さくなつて面が不揃いとなる。また、傾斜も約50°と緩くなる（図20）。

**西法面** 表出している最下段の葺石は、南端から中央付近まで87.6mとほぼ一定で、そこから北端88.5mに向かって上がる。石室開口部である中央付近は1段目途中～2段目途中が埋め殺しとなり、南北両端に向かって埋め殺しの石が増え、2段目途中が埋め殺しとなる。南側の残存状況が良好で、南法面で述べた葺石の立ち上がり角度もよく観察できる。北側は、基底石から上3～6段まで残存しているが、上半部は葺石が認められない。

**北法面** 表出している最下段の葺石は、東端 89.0mから西端 87.6mへと下がる。中央から西側にかけて 1段目途中～3段目途中が埋め殺しとなる。北法面は若干残存状態が悪く、基底石から上 3～4段程度が残存するのみである。特に東側では基底石と直上 1段程度が残存するのみであった。テラス上の流入土中には、石材の転落石が多数認められた（写真3）。

**全体** 墳丘北東部の尾根頂部付近には埋め殺しがみられない。2段目葺石基底石は南や西（石室開口部）に向かうにつれて設置位置が低くなり、徐々に埋め殺される石が多くなる。基底石のうち、標高の最低値にあるのは、先に述べた墳丘の平面形の長軸部分の両端にほぼ合致する。この部分では、3段目途中ぐらいまで埋まっているが、ほぼ同じ標高に設置された墓道付近の葺石は1段目途中～2段目途中が埋まる程度である。これは、基底石が最も低い部分から墓道に向かって水平に設置した可能性があると考えられる。また、石室正面から見た場合（図13 西法面）、埋め殺しのライン 87.5mと基底石最下段のライン 87.3mとほぼ水平である。そのため、葺石基底石の埋め殺しについては、テラスの整地とともに企図された可能性がある。

#### ④テラス（図11・図13）

2段目の墳丘の周囲を取り巻くようにテラス状の平坦面がみられる。検出段階では、流土や改変に伴う土砂、盗掘排土などで一部を除いて埋もれていたが、2段目葺石を確認したことにより、明確な形状を検出できた。テラスの幅は、1.5m～1.9m程度であるが、墳丘正面の石室入り口の両脇は約1mで若干狭くなっている。また、傾向としては南側が広く、北側が狭い。ただし、1段目の葺石の上端が流出により失われていることを考えると、築造当初はさらに1.5m以上の幅があった可能性が高い。墳丘北東部の旧尾根頂部付近が最も標高が高く（89.0m）、西に向かうにつれて低くなり（図13 北法面）、西端 87.6mとの比高は約1.4mある。後述するが、テラスの北東部や南東部で須恵器甕4個体が出土した。面として十分な広さがあり、テラス上で何らかの儀礼行為が行われた可能性がある。

#### ⑤周溝（図11）

墳丘の北東部は尾根頂部が大きく削られており、堀切状になっている。この部分の背後の尾根頂部と溝の底との比高は、約2.5mに及ぶ（図51）。周溝の規模は、北側では幅約3.0m、深さ約0.2m、東側では幅約4.5m、深さ0.5m、南西（図11 A-A'断面）で幅約2.5m、深さ約0.5mである。周溝は墳丘周囲を全周していないものの、北から南西までの墳丘の約3分の2を廻り、周溝を含めた古墳の最大径は約26mになる。南側周溝の一部は後世に削平され、墳丘の南東側では周溝を確認できなかった。しかし、この箇所の旧地形は谷地形であり、周溝の掘方は南東側で当初から消失していたと考えられる。

埋没過程は、どの場所においても、基盤層または墳丘からの流土が堆積し、その後丘陵斜面の上方からの多量の流土によって埋没している。特に東側については、現存する墳丘の高さまで埋土が達していた。この部分の埋土には間層として墳丘からの流土も見られ（図8）、幾度かの雨水の影響を受けて埋没したと



写真3 テラス上の転落石（墳丘北側）

考えられる。北側は周溝自体が浅く、流土の堆積も東側ほどではなかった（図7）が、流土層下の周溝埋土上面から山茶碗（134）が出土しており、中世に周辺の利用が盛んになって以降、流土の堆積が始まったことが伺われる。周溝の南西端部は、埋土がほぼ砂質であり（図11）、またA-A'断面4層から山茶碗（143）が出土することから、流土の堆積が始まる前までは、ほとんど埋没していなかったと考えられる。

#### ◎埋葬施設（図15～図18）

**検出状況** 梅替古墳の埋葬施設は、横穴式石室である。墳丘の西法面に開口しており、石室基底石から計測した主軸は、N-82°-Wではなく西を向いている。平面形状は墓道と玄室の明瞭な境が無い無袖式であり、石室の前方に墓道が接続する。石室の全長は8.64mを測る。検出した段階では、完全に埋没しており、石室の存在さえ明確でなかった。墳丘頂部の精査により、埋もれていた天井石を検出した。その周囲の盜掘坑を掘削した結果、天井石の他に側壁の石材を確認したので、石室の存在が明らかとなった。また、この盜掘坑の排土（SX1）が墳頂部周縁に堆積しており（図14）、これを除去するまで天井石以西の石室についても確認することができなかった。なお、SX1の周辺から検出したSK2やSK4は盜掘に伴う掘り込みである可能性が考えられる。

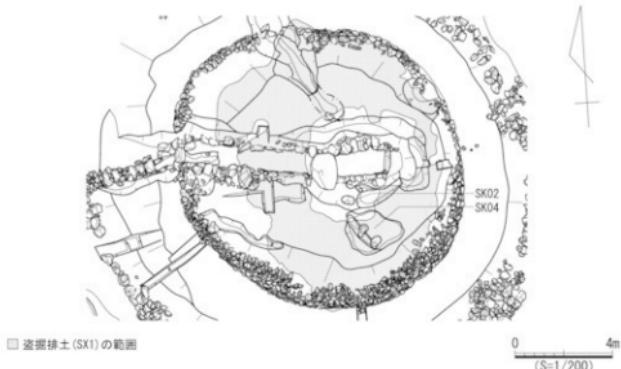


図14 盗掘排土 (SX1) 分布図

石室の埋土は、大きく分けて3つの段階があると考えられる。ア～ウに分けて以下に説明する。

**ア 石室埋土下層** 床面直上の堆積（図15 A-A' 3層、B-B' 6・7層）は、原位置をとどめない須恵器片や管玉、耳環、糾鍼車などが含まれており、石室内から主な副葬品が持ち出された後に堆積がはじまったと考えられる。原因是、天井石のずれなどによる墳丘盛土の流入などの自然堆積であると考えられ、少なくともこの時点では天井から1m程度空間があったものと考えられる。

**イ 石室埋土中層** 中層の堆積土（図15 A-A' 2層、B-B' 2～5層）は、墳頂部の削平に伴って生じた土砂を埋め戻したものと考えられる。その土砂は墓道から奥壁までを埋めており、天井石も破碎して石室内に投げ込まれたり、持ち出されたりしたとみられる（写真4）。ただし、残存する天井石から西側については若干くぼんでいたようで、中世以降の改変とその排土によって完全に埋没したと考えられる。SX

3の項で述べるが、削平は墳丘頂部の利用に伴う改変と考えられ、その時期は、墳丘周辺からの出土遺物が多い14世紀前半～15世紀前半と推定される(第3章第4節参照)。

ウ 石室埋土上層 上層(図15 A-A' 1層、B-B' 1層)は、墳頂部から掘削された盃掘坑と連なっていると考えられる。盃掘坑(石室埋土東側上層)は、残存する天井石東側の墳頂部中央を大きく掘り込んでおり(図7:1~9層、図8:1~10層)、石室奥壁上段や側壁最上段を破壊している。奥壁付近については、埋戻し土と中世の改変による埋没の範囲は区別することが困難であった。埋め戻し土にも破碎した天井石や奥壁・側壁の上段からの転落石が含まれる可能性がある。



写真4 石室内に落ち込んだ石材

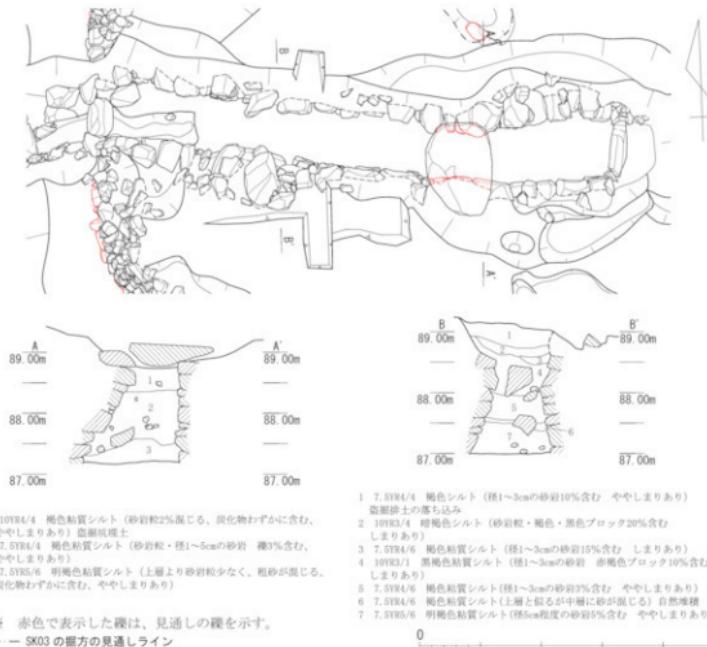


図15 石室平面図及び土壟断面図

**玄室** 石室の平面形状は、無袖式であり、玄門や楣石、框石など、羨道と玄室を明瞭に分ける構造は確認できない。しかし、以下の事由により玄室と羨道を区分することは可能と考える。

- ・石室奥壁付近から入口に向かって石室床面の幅がほぼ一定な部分と、入口に向かって床面幅を徐々に減じる部分
- ・後述する石室側壁に横目地を通して一連の工程で構築した部分と、後付けで石室壁体を加えた部分
- ・長方形に閉塞する石室掘方に收まる部分と、掘方の外に構築する部分
- ・排水溝を敷設しない部分と、敷設する部分

以上の各項目の前者を玄室、後者を羨道と区分することが可能で、両側壁ともに奥壁から7.2mの地点で両者が接続する。

なお、通有の横穴式石室の羨道には天井石が架設されるが、当古墳の羨道部は墳丘法面に位置して天井石をもたない。しかし、玄室への通路としての機能とともに石塊を積み上げて閉塞を行う機能をもったと推定されることから、羨道と位置づけた。

玄室基底部の長さは7.2m、幅は奥壁付近及び中央部1.44m、羨道部との接続部1.4mで、基底部が描く平面形には胴張りは認められない。玄室の高さは、残存する一石の天井石と側壁の天端の残存状態から、玄室床面から約2mの高さにはほぼ水平に天井石が架設されたと考えられる(図16)。天井石は、残存する一石と同程度の大きさと仮定すると、玄室部分に6石が必要である。

玄室の側壁<sup>3)</sup>は、残りの良い右側壁で観察すると横目地が通っており、最大で9段階に分けて積まれている。図17は、石室右側壁の横目地の状況を示した図である。最上部まで9段目までの目地が整っているのを確認できた。玄室左側壁は、基底石から上の石材が検出当初から内側に倒れ込んでおり、掘削する過程でさらにその傾向が増した。そのため積石の工程を明瞭に確認できなかったが、ほぼ同様な状況と考えられる。1段目の基底石は、斜面の傾斜に合わせ奥壁から羨道接続部へ0.2m低くなっている。2段目は、羨道接続部側に大きめの石が確認でき、次第にその大きさが小さくなり、羨道接続部から約4.5mの箇所で終わる。3段目は、大きさのそろった石が長手面をそろえて一列確認できる。奥壁付近は、石材がやや小さくなる。4段目は羨道接続部から奥壁側へ約3.5m確認できる。5段目は、大きさにばらつきがあるが、羨道接続部から奥壁まで一列確認できる。6段目は、奥壁から約3mのところまで石材を充填している。7段目は、羨道接続部から奥壁まで1列確認できる。8段目は、大きさのばらつきがさらに進み、列の中には細かい石材も含まれるもの、1列確認できる。9段目は、盗掘などにより失われた箇所が多いが、天井石の架かる最上段と考えられる。基底石や側壁断面の状況から、奥壁基底部の大型石材の上面を延長した高さまでが長手積みで、それより上部は小口積みとなっており<sup>4)</sup>、側壁全体は緩やかな持ち送りが認められる。6段目までと7段目以降が対応する。さらに先に述べた石材の大きさの違いも対応する。また、2・4・6段目の途中で終わる3列については小口積みの範囲と対応し、基底石を水平にそろえることと関係すると考えられる。

奥壁は、正面からみた形状が台形に近い高さ0.9m、幅1.0m、奥行き0.3mの大型石材を立て、それぞれ側壁と接する台形の側辺にあたる部分では、側壁の石材とかみ合うように石材を積み上げている(図16)。この大型石材から上部にも、側壁からすると4段程度石積みがあったはずであるが、先述の盗掘により失われたと考えられる。

玄室床面は、石室掘方の底面を黄褐色粘土を用いて厚さ0.1m程で整地した上に、厚さ0.05m~0.08m

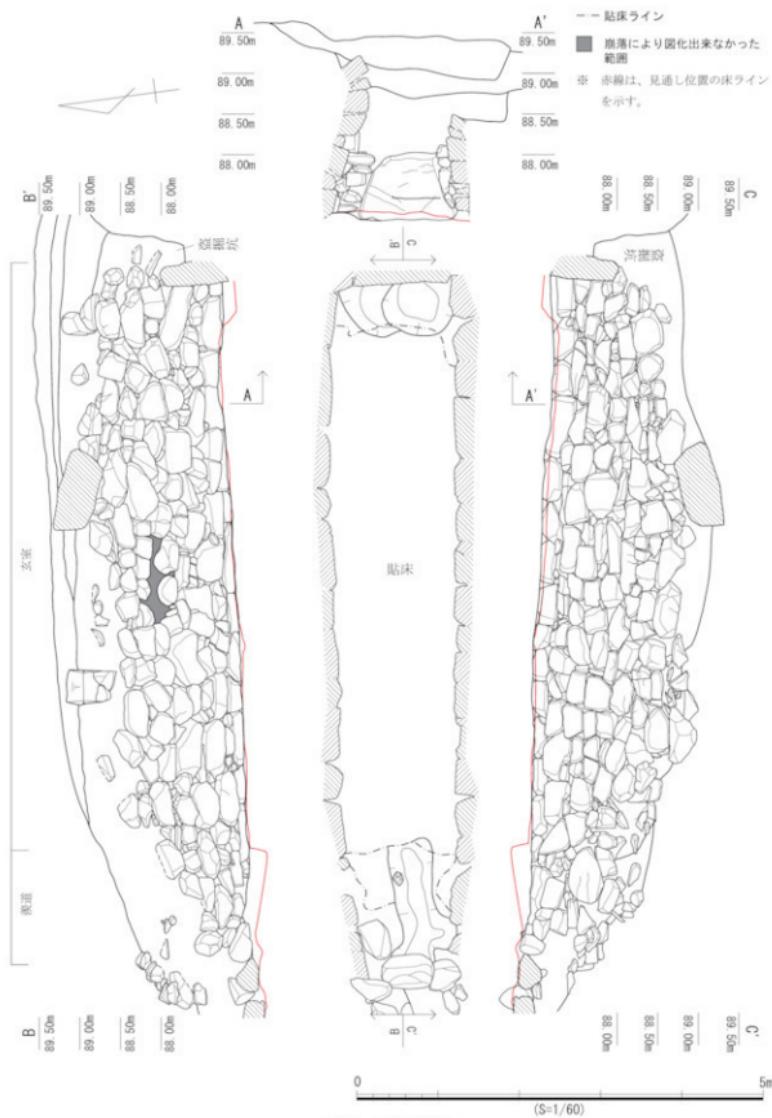
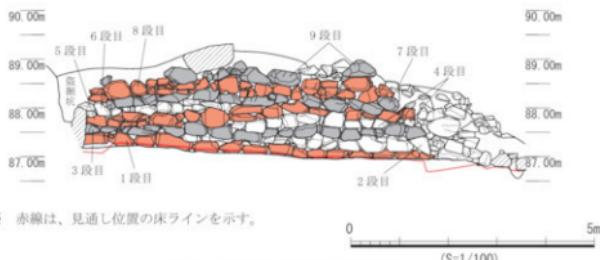


図16 石室実測図



のしまりのある明褐色粘質シルトで貼床を敷設する。貼床の上面は奥壁付近から羨道部付近に向かって緩やかに降り、約0.4mの比高がある。貼床面やその上部の石室埋土には、床面に敷設されるような礫は認められなかつたことから、礫床は形成されていなかつたと考えられる。

玄室側壁基底石の配置は、石室掘方の底面にではなく、この貼床を敷設した上に行われている。ただし、貼床に埋まっている基底石も若干みられる。石室掘方の上端ラインと側壁基底石との間には0.3m～0.5mの空間があり、掘方の壁際には基底石とは別の石材が部分的に認められる（図18）。これは、側壁基底部の石材を裏から安定させるために、石材や土を充填させて裏込めとしたものと考えられ、壁体の上部においても通有の堅穴式石室ほどではないが、控え積み状に壁体の背後に石材の配置が認められる。

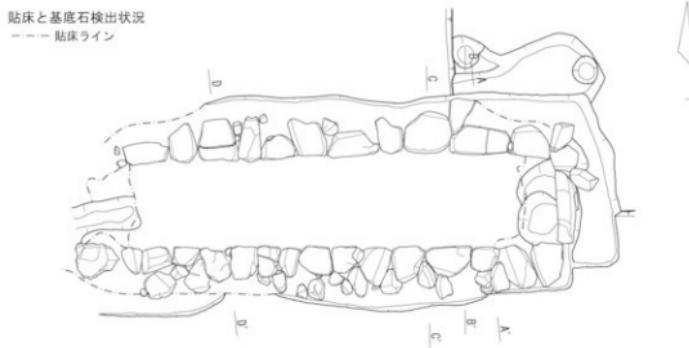
奥壁基底石は貼床を施した後、奥壁石材の大きさに合わせた掘方を深さ0.2mで新たに掘削して設置している。なお、奥壁前面には径0.8mと径1.0mの掘り込みが並列して認められ、深さは奥壁基底石掘方とはほぼ同様であり、奥壁設置に伴って掘削した可能性も考えられるが断定はできない。また、奥壁基底石の底面は不安定な形状であり、奥壁基底石掘方底面に密着していないが、隙間には土（図22：24層）を充填させて固定しているようである。奥壁付近の石室掘方は、東側へ1段、さらに北側へ1段の段をもつ拡張部が付属する。これらの段は、大型の奥壁を搬入し設置するための足場として機能した可能性がある。上段に所在するSK22、SK23も、奥壁搬入・設置に関わる可能性が考えられるが、それを判断する資料は認められなかつた。

石室掘方は平面形が長方形で、長さ7.8m、幅3.5mを測る（図18）。奥壁側から入口側へ緩やかに下がる斜面を0.2m～0.4m掘削している。掘方表面の高さは、奥壁付近を0.4m、羨道付近を0.2mとして、掘方掘削前の旧地形の傾斜よりも掘方底面の傾斜を水平に近づける意図が見られるが、底面の高さは奥壁付近で標高87.2m、羨道部付近は標高86.8mで、玄室貼床面と同様に約0.4mの比高がある。この掘方底面及び貼床面が羨道部に向かって降る傾斜は、石室の壁体及び石室内に進入した雨水を羨道部床面の排水溝に集約する機能をもたらせた結果と考えられる。

玄室内部は、盜掘と後世の改変によって、本来の埋葬施設としての痕跡をことごとく失っており、棺の痕跡や棺台及び副葬・片付け等の諸行為を示すような資料は得られなかつた。

**羨道** 先述したように、玄室から入口に向かって石室床面幅を徐々に減じ、玄室側壁とは別工程で側壁を付加し、排水溝を床面に伴って石室掘方の外部に設置された部分を羨道部として判断した。当古墳の場合、羨道が墳丘法面に位置するため天井石は架からず<sup>5)</sup>、埋葬空間である玄室への通路、玄室と外部とを遮断

貼床と基底石検出状況  
--- 贴床ライン



1 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト（径1cm程度の砂岩・砂岩粒15%、暗褐色ブロック10%、しまりあり）貼床

- 2 10YR5/8 黄褐色粘土（ややしまりあり）壁地土  
3 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト（径3cm～5cmの砂岩10%、ややしまりあり）壁地土

1 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト（径1cm程度の砂岩・砂岩粒15%、暗褐色ブロック10%、しまりあり）貼床

- 2 10YR5/8 黄褐色粘土（ややしまりあり）壁地土  
3 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト（径3cm～5cmの砂岩10%、ややしまりあり）壁地土

1 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト（径1cm程度の砂岩・砂岩粒15%、暗褐色ブロック10%、しまりあり）貼床

- 2 10YR5/8 黄褐色粘土（ややしまりあり）壁地土

1 7.5YR5/8 明褐色粘質シルト（径1cm程度の砂岩・砂岩粒15%、暗褐色ブロック10%、しまりあり）貼床

- 2 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト（径1cm程度の砂岩3%、暗褐色ブロック10%、ややしまりあり）壁地土

石室掘方

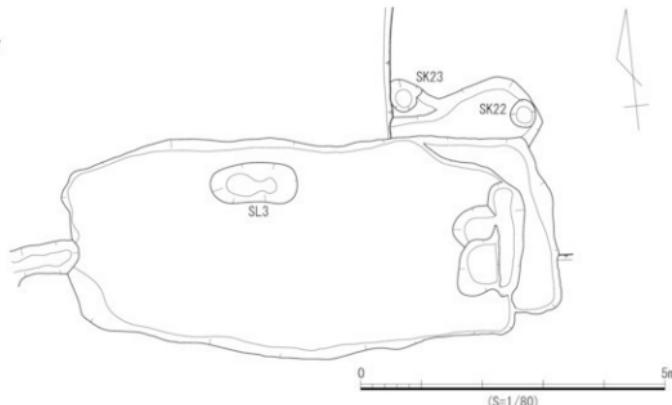


図18 石室掘方平面図及び床面断面図

するための閉塞、石室内に侵入した雨水の排水の機能を合わせもっている。

羨道の長さは1.44m、幅は玄室との接続部で1.4m、石室入口部で1.0mを測る。羨道両側壁の高さは、玄室左側壁天端から連続する接続部で2.0mを最高とし、入口に向かって2段目墳丘の葺石と連動する角度で傾斜する。残存状態の良い右側壁部とその付近の葺石の接続状況から判断して、羨道側壁と葺石の壁体は稜をなして接続する。羨道側壁は、すでに構築された玄室両側壁に付加して積み上げられ、玄室両側壁の石材の積み上げ方と比べて乱雑であり、また基底石を古墳構築以前の旧表土の上に配置しており、壁体の不安定さから玄室両側壁との残存状態の差を生じている。

羨道部入口床面には長辺0.65m、短辺0.4m、高さ0.3mの石材を、長辺を石室主軸に直交させて設置して石室の内外を明確に区分している。この石材の平面的な位置は、2段目の葺石の基底石がめぐる位置に一致させている。また、羨道部床面には石室主軸に沿って、やや南側に偏った位置に排水溝が認められる。排水溝は、入口床面の石材から玄室側へ長さ1.4m、幅0.5m、深さ0.25mで、羨道と玄室との接続部まで伸び、玄室床面下の石室掘方に接続する。

羨道部も玄室同様に盜掘や後世の改変を受けており、本来は羨道部空間を完全に充填し、入口左右の葺石と面を揃えて石室入口を閉塞したであろう石塊による閉塞施設は残存していない。

**墓道** 墓道は、墳丘のテラス部より低い墳丘1段目法面の途中に入口を設ける（図11・図13）。そこから石室主軸に沿って石室入口に接続する。墓道の規模は、石室入口部から墳丘面まで長さ3.2mを測り、上端の幅は石室入口付近で2.0m、墓道入口部付近で2.4m、下端の幅は石室入口付近で1.1m、墓道入口部付近で2.1mである。墓道入口部端部の床面は、北側に平坦面を拡張して広くなる部分が認められる。墓道壁面には石材を用いず、墳丘盛土が露出する。墓道の床面には、旧表土の上に0.1m～0.2m程度で墓道入口側に厚く盛土が認められ、傾斜を緩やかにする（図22：19層）。この墓道床面から掘り込んだ排水溝が、墓道中軸から南に偏って右側壁下端に沿った位置に認められる。羨道の排水溝が素掘りであるのに対し、墓道の排水溝は側壁と蓋石を伴う。排水溝が墓道の南側に偏って設置された背景には、石室構築や閉塞施設構築時の石材搬入、初葬時の棺の搬入の機能を果たした可能性が考えられる。墓道入口部北側の床面が拡張する部分は、これらの搬入に連動した形状をなすとも考えられる。

墓道の排水溝に蓋石をもつのは、暗渠としての機能を意図したものと考えられる。検出した墓道の床面は、石室構築時から初葬時に機能した面と考えられ、閉塞石を羨道部に充填して2段目葺石と面を揃えた後は、墳丘テラスと同じ高さまで土を充填し、石室開口部の所在を見かけ上分からなくしていたと思われる。墓道の埋土から尾張5型式併行の山茶碗がまとまって出土しており（図68）、後世の改変によって土の充填の程度は確かめられなかった。

#### ◎排水溝（図19）

排水溝を羨道部から墓道の床面で検出した。排水溝は1段目墳丘の法面から石室入口部まで4.5mの長さでほぼ直線的にのび、そこから向きを変えて羨道部内に1.4m程度続く。石室の主軸N-82°-Wに対して、羨道部の排水溝はほぼ並行するが、墓道はN-102°-Wで方位が異なる。

羨道部の排水溝には石材の使用が認められなかった。溝の掘方から石材の抜き取り痕跡も確認できなかったので、素掘りの可能性が高い。排水溝の底面の標高は、玄室との境付近の羨道部で86.7m、墓道西端部で86.0mと墓道に向かって下降しており、玄室部にのみ認められる石室掘方に接続し、床面の傾斜と合わせて石室内の雨水を墳丘外へ排出する仕組みになっていたと考えられる。

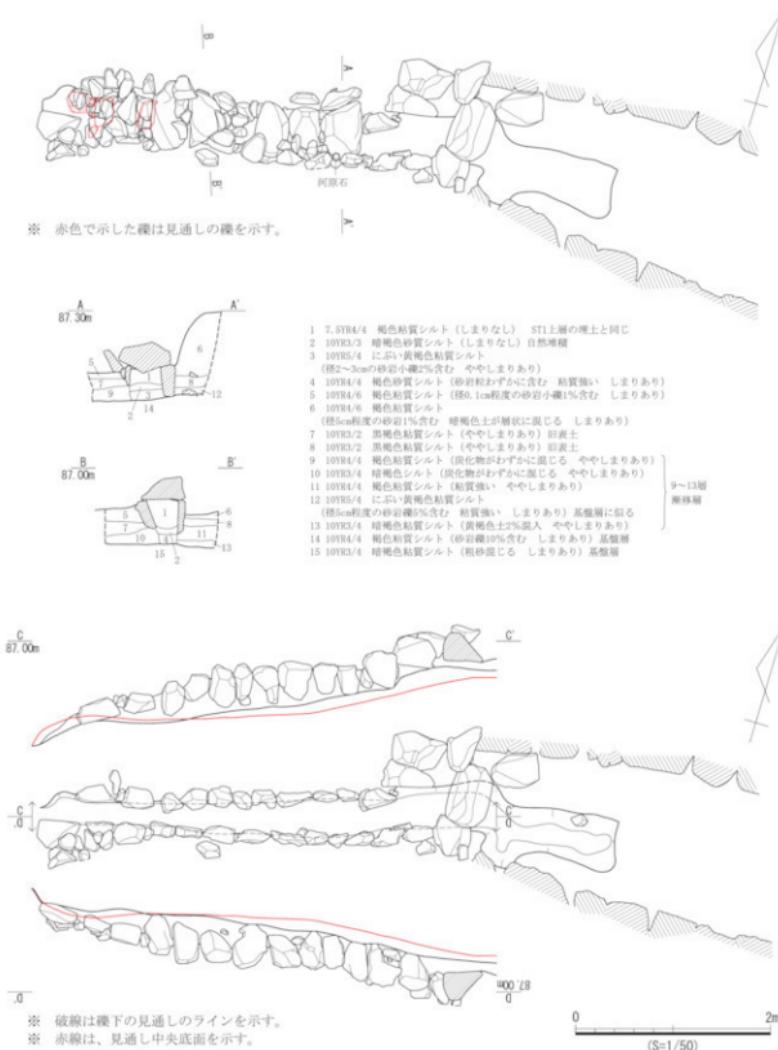


図19 石室排水溝平面図・断面図及び側壁見通し図

墓道の排水溝からは、両側壁部と蓋部に石材の使用を確認した。蓋石は、石室入口部から西へ0.8mほど欠損するが、そこから西側は原位置を保つ蓋石が認められる。蓋石には長辺が0.5m～0.6mの石材を排水溝と直交する方向に横架し、蓋石と蓋石の目地がなす隙間には0.1m～0.2m程度の石材を多数詰め込んで排水溝へ土砂が入り込むことを防止している。蓋石の石材は平らな面を下に向けて設置しており、排水溝上面を平坦にする意図は見受けられない。排水溝の側壁部には長辺約0.4m、短辺約0.2m、厚さ約0.1m前後の石材を用い、平らな面を壁面とし、長辺を垂直方向に並べて天端で蓋石を受ける。

排水溝の掘方は、旧表土及び基盤層まで掘り込んでいる（図19）。南側の壁面では、旧表土上に盛土（図19：6層）が認められたが、排水溝との先後関係は不明である。なお、掘方の埋土は、下層は自然堆積であるが、上層は墓道を埋めた埋土と同質であった。検出面（蓋石上面）と同レベルで尾張5型式併行の山茶碗が出土したことから（図68）、後世には蓋石が露出していた可能性が高いと考えられる。

#### ○墳丘の盛土（図20～図22）

墳丘は、石室の主軸を基準に断ち割りし、土層観察を行った。以下、墳丘南北断面図と墳丘東西断面図に分けて詳細を記述する。

**墳丘南北断面図（図20・図21）** 墳丘南北断面を1層～240層に分層した。これを大別するとAからIになり、図20・図21の太線で示した。第5章第1節でA～Iを図示した（図64）。以下にそれぞれの概要を記す。

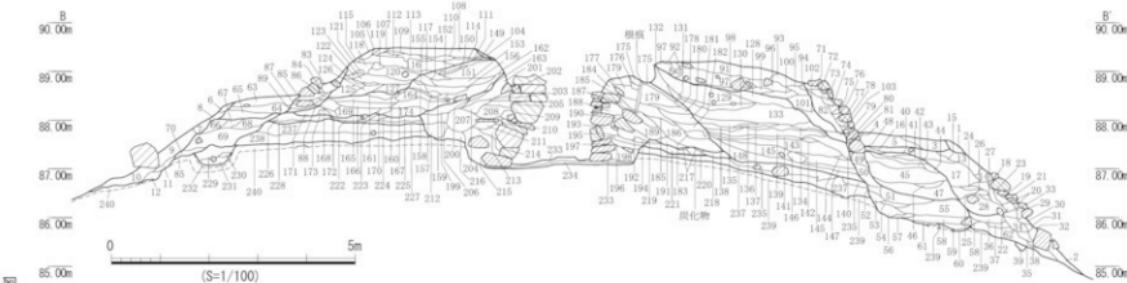
**A 基盤層・旧表土** 基盤層は、漸移層も含んで、237層～240層にあたる。その直上には旧表土が235・236層で認められる。なお、旧表土は側壁からそれぞれ南北方向の約5m先には認められない。217層～228層は、石室掘方外側に分布する。基盤層に類似する明褐色土及び基盤層起源の砂岩ブロックの混ざった土が中心であることから、基盤層を掘った石室掘方の排土と考えられ、それを石室掘方外側に残置したものと考えられる。

**B 石室掘方付近** 石室掘方は、基盤層・旧表土をほぼ垂直に掘削していることが観察できる。北側は階段状に壁面が掘削されていることから、2段階の掘削が行われた可能性がある。233層・234層の石室掘方底面の薄い盛土は、床面を構築した敷土で、基盤層と類似する土色・土質である。

**C 玄室側壁外側付近** 175層～216層は、側壁の壁体外側へ2mの範囲に分布する。側壁の石材を積み上げる際に、天井石の高さまで同時に盛り上げられた盛土である。基盤層起源の明褐色土や周囲に堆積していた流土を起源とする褐色土を積み上げたと考えられる。水平方向の盛土と斜め方向の盛土が下半と上半に認められる。下半の水平方向の盛土は、奥壁上端や北側掘方上端の高さ、石室の構築で述べた側壁の長手積みで目地の整ったラインとそろうことから、上半と下半で別の性格をおびる可能性がある。

**D 墳丘2段目下半** 128層～174層は、175～216層を覆うようにした盛土で、Cの上半と比べて水平方向の盛土が目立つことからCと区分した。特に南側では層厚の薄い水平な盛土が連続する。黒褐色土や砂岩ブロックの混ざった土をおよそ交互に積み上げていることから、両側壁壁体の外側5m先、旧表土が認められない箇所の基盤層・旧表土を削平した土で盛り上げられたと考えられる。南側に見られる各層厚の合計は約1.5mであり、北側における0.7mより厚い。北側より南が入念に盛土を行ったと考えられる。また、端部の傾斜は南側が急で、その後構築される葺石の角度と揃う。

**E 墳丘2段目上半** 90層～127層（104層SX1 残土を除く。）は、墳丘2段目上部を形成する盛土である。Dと同じく水平方向の盛土だが、Dと比べて各層が厚いことから区分した。褐色土が中心だが、様々な土が混ざることから、周溝掘削土を含む広範囲から採取されたと考えられる。南北両端では、2段目葺石と



202

- 1 7.SYB5/6 明褐色粘質シルト（しまりなし、径1~3cmの砂岩を2%含む）  
S1理土  
2 10YH4/2 黒褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
3 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
4 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（しまりあり）  
5 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
6 7.SYB5/6 明褐色粘質シルト（しまりあり、径3cm程度の砂岩を1%含む、砂岩粒を2%含む）  
7 7.SYB5/6 明褐色粘質シルト（ややしまりあり、径3cm程度の砂岩を1%含む）  
8 7.SYB5/4 にじみ黄褐色粘質シルト（しまりあり、径1~3cmの砂岩を3%含む）  
9 7.SYB5/4 にじみ黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、径3cm程度の砂岩を3%含む）  
10 10YH4/3 にじみ黄褐色粘質シルト、10YH3/3暗褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を3%含む）  
11 10YH4/6 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
12 10YH4/6 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
13 10YH4/3 にじみ黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
14 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）  
15 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
16 7.SYB5/3 暗褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
17 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色ブロックを1%含む）  
18 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
19 10YH4/6 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
20 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
21 10YH4/3 にじみ黄褐色粘質シルト（しまりあり）  
22 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、径3cm程度の砂岩を1%含む）  
23 10YH4/4 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）  
24 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、径1cm程度の砂岩を1%含む）  
25 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
26 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）。  
炭化物をわずかに含む  
27 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
28 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を3%含む）  
29 10YH4/4 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）  
30 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
31 10YH4/6 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
32 10YH4/3 にじみ黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、黄褐色ブロックを2%含む）  
33 10YH4/6 黄褐色粘質シルト、10YH3/3暗褐色粘質シルトの混合（ややしまりあり）  
34 10YH4/3 黑褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色ブロックを2%含む、黒褐色ブロックを1%含む）

- 35 10YH4/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、粘性強い、黄褐色ブロックを3%含む）  
36 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
37 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、径3cm程度の砂岩を1%含む）  
38 10YH4/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
39 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
40 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
41 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
42 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を20%含む）  
43 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色ブロックを20%含む）  
44 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を20%含む）  
45 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を20%含む）  
46 10YH4/5 黄褐色粘質シルト（しまりあり）  
47 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
48 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を2%含む）  
49 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、黄褐色ブロックを10%含む）  
50 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を10%含む）  
51 10YH3/1 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を10%含む）  
52 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、黄褐色ブロックを15%含む）  
53 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、粘性強い、黄褐色ブロックを15%含む）  
54 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）  
55 10YH4/3 黄褐色粘質シルト、7.SYB4/4暗褐色砂質シルト。  
10YH3/1黄褐色粘質シルトの混合（しまりあり、砂岩粒を3%含む、炭化物をわずかに含む）  
56 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（しまりあり、炭化物をわずかに含む）  
57 7.SYB4/3 暗褐色粘質シルト（しまりあり、粘性強い）  
58 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト、10YH3/1暗褐色粘質シルトの混合（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
59 10YH4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、径3cm程度の砂岩を1%含む）  
60 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（しまりあり）  
61 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
62 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
63 7.SYB4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
64 7.SYB4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
65 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
66 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
67 10YH4/2 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を5%含む）  
68 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
69 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
70 7.SYB5/4 にじみ黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
71 7.SYB5/4 明褐色粘質シルト（しまりあり）  
72 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
73 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
74 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
75 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
76 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
77 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
78 7.SYB4/6 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
79 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
80 7.SYB5/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
81 7.SYB5/3 黄褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色ブロックを3%含む、砂岩粒を5%含む）  
82 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、黄褐色ブロックを10%含む）  
83 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
84 10YH4/6 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
85 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
86 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
87 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト、7.SYB4/4暗褐色粘質シルトの混合（しまりなし）  
88 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を10%含む）  
89 10YH4/3 にじみ黄褐色粘質シルト、7.SYB4/4暗褐色粘質シルトの混合（しまりあり）  
90 7.SYB4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、炭化物をわずかに含む）  
91 7.SYB4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を1%含む）  
92 7.SYB4/6 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を2%含む）  
93 10YH2/3 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
94 7.SYB4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
95 10YH4/1 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり）  
96 7.SYB4/2 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、黄褐色ブロックを3%含む、砂岩粒を1%含む）  
97 7.YSB4/4 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を5%含む）  
98 7.SYB4/4 黄褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色シルト（黄褐色ブロックを5%含む）  
99 7.SYB5/4 にじみ黄褐色粘質シルト（しまりあり、黄褐色シルト（黄褐色ブロックを5%含む）  
100 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を5%含む）  
101 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を5%含む）  
102 10YH4/3 黄褐色粘質シルト（しまりあり、砂岩粒を5%含む）  
103 10YH3/3 黄褐色粘質シルト、7.SYB4/4暗褐色粘質シルトの混合（ややしまりあり）  
104 10YH4/2 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）  
105 10YH2/2 黑褐色粘質シルト（ややしまりあり、砂岩粒を1%含む）



角度が類似する土層が認められる（101層・102層・125層）。葺石構築に伴う土層の可能性もあるが、葺石それぞれに対応しないため、Eに区分した。

**F 墳丘1段目** 40層～61層・66層～70層は、墳丘2段目の周囲に盛り上げられた墳丘1段目の盛土である。Dにおいて、基盤層・旧表土が削平された箇所に、南側では約3m、北側では約2mの幅で水平に盛土を行っている。下部ほど各層が厚い。南側では、2段目葺石の下に、葺石に連なるような土層が観察できる。土層の細分が可能であることから、2段目葺石と一連のように見えるが、51層、54層、57層との重複関係から、墳丘1段目に連なると考えた。しかし、先にも述べたように2段目葺石に連なる土層を見えることは検討課題である。

**G 2段目葺石付近** 71層～89層は、葺石それぞれに対応して細かく分層できることから、葺石敷設の際に充填された土と考えられる。南側の82層は、葺石敷設前に墳丘を形成したと考えられる土層である。北側の83層も同様であろう。

**H 1段目葺石付近** 2層・6層～38層・62層は、2段目葺石付近と同様、葺石に対応して分層できることから、葺石敷設の際に充填された土と考えられる。南側では、北側とは異なり、葺石の内側約1mまで関係する土層が認められる。この土層はさらに上部まで及んでいる（15層）。南側では、1段目葺石構築にあたって多くの土が充填されたことから入念に準備されたと考えられる。

**I 墳丘1段目上部付近** 1層・3層～5層・63層～65層は、テラスや墳丘を整地した土と考えられる。その際、2段目の葺石の基底部が埋め殺しになったと考えられる。

墳丘東西断面図（図22）墳丘東西断面を1層～65層に分層した。南北断面で見られたIの土層は観察できないため、大別するとA～Hになる。以下にそれぞれの概要を記す。

**A 基盤層・旧表土** 基盤層は、漸移層も含んで、61層～65層にあたる。その直上には旧表土が59層・60層に認められる。旧表土は、南北断面と同様、2段目墳丘下に認められるが、それより外側には認められない。また、石室掘方掘削とそれに伴う残置土は東側では認められない。

**B 石室掘方付近** 石室掘方がほぼ垂直に掘削されたことが東側で観察できる。石室の構築で述べたように、奥壁設置用の石室掘方も観察できる。西側の敷土が比較的厚い。19層は、石室掘方掘削土を利用した墓道の床面と考えられる土層である。

**C 玄室奥壁付近** 48層～54層は奥壁付近を充填した土である。44層～47層は天井石まで達したと思われる土で、南北断面同様、斜め方向の盛土であったと考えられる。

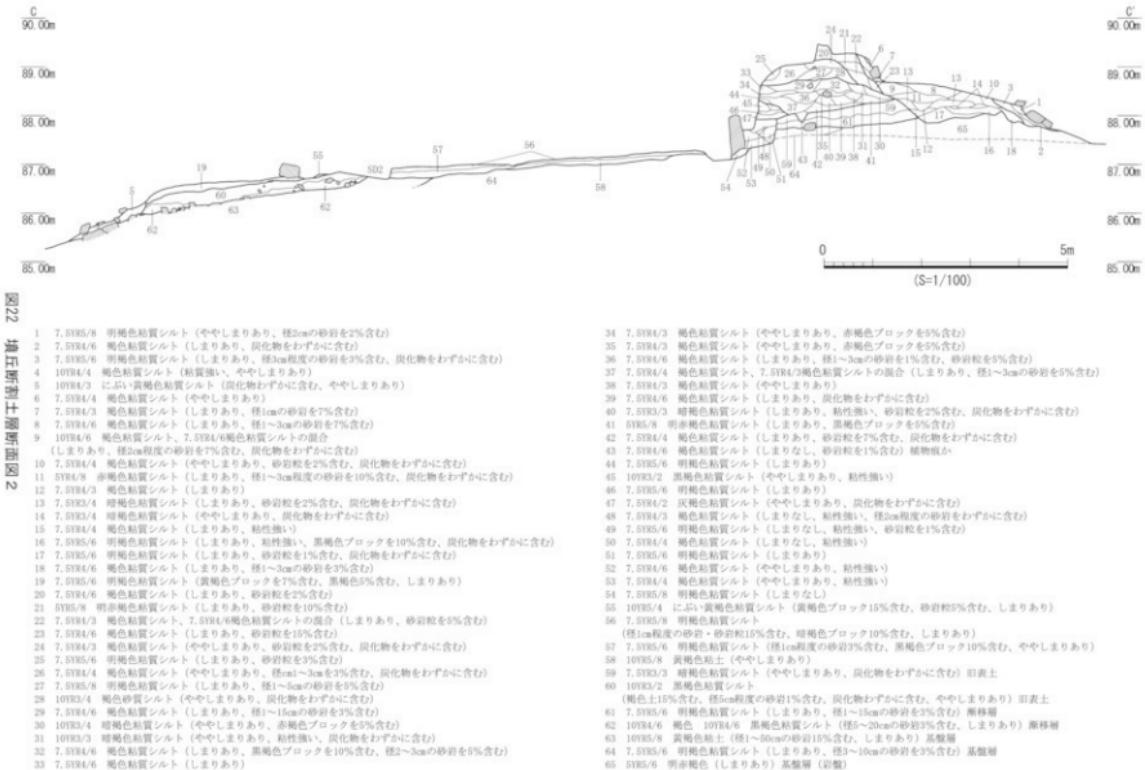
**D 墳丘2段目下半** 29層～42層は、2段目下半を構築した盛土で、水平方向の盛土が目立つ。墳丘断面南側のような厚みはなく、各層厚の合計は0.7mと北側に近い。

**E 墳丘2段目上半** 24層～28層は、墳丘2段目上半の盛土で、不規則に盛り上げられている。20層～23層は葺石に伴う盛土である可能性もあるが、葺石との対応関係が不明なため、この区分とした。

**F 墳丘1段目** 8層～18層は、南北断面と同様、基盤層・旧表土を掘り込んだ上からほぼ水平に堆積している。葺石の構築で述べたように、東側では1段目墳丘（テラス）構築に伴う2段目葺石基底部の埋め殺しは確認できない。

**G 2段目葺石付近** 6層・7層は、2段目の葺石敷設の際に充填された土と考えられる。

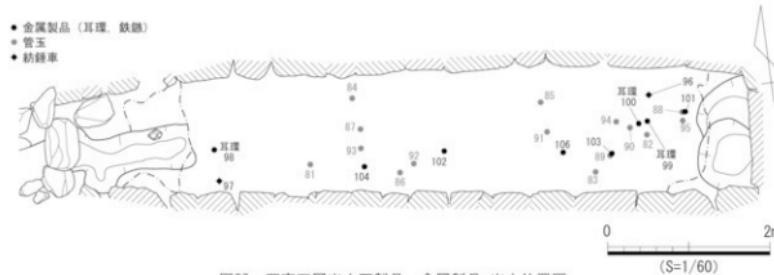
**H 1段目葺石付近** 1層～5層は、1段目の葺石敷設の際に充填された土と考えられる。



## (2) 梅替古墳の遺物出土状況

今回の調査では、古墳が営まれた時期に所属する遺物は、石製品、金属製品、須恵器、土師器が出土した。石室内から出土した管玉、紡錘車、耳環以外はすべて破片で出土した。特に、石室内外の広範囲から出土した須恵器は小片で出土した。最も出土点数の多い須恵器は、破片数で1,491点を数え、石室内からは210点、石室外からは1,281点が出土し、石室外が全体の約86%を占める。

石室内の遺物はすべて石室床面から浮いた状態で出土し、欠損の無い石製品や金属製品も原位置を保たない。しかし、出土層位が埋土下層であることや出土位置にまとまりが見られること(図23)から、管玉15点、紡錘車2点、耳環3点、鉄鎌5点は、副葬遺物として位置付けてよいと思われる。本来、供獻土器として石室内に大量に納められていたであろう須恵器も小片となって散在している状況である。石室内から出土した器種は、坏身・坏蓋・高坏・甕・碗・壺類、瓶類、器台の他に甕片があり、石室内に供獻されることのない器種も混入しているといえる。土師器甕片は石室内からは11点、石室外からは14点が出土した。土師器甕も散在している状況であるが、掲載した小型甕(55)が奥壁付近から出土しているのは興味深い<sup>6)</sup>。石室内の埋土下層から美濃須衛産の5型式併行の山茶碗(107)が出土しており、この時期以降に石室内の遺物が原位置を離れ、また大規模な盃掘によって散在したと考えられる。



石室外の遺物は、土師器甕、須恵器の坏身・坏蓋、高坏、罐、碗、壺類、瓶類、器台、脚付壺、甕が認められる。土師器甕、坏身・坏蓋、高坏、罐、碗、壺類、瓶類などの大半は、本来は石室内に供献されたものが後世の改変によって石室外に持ち出されたものと考えられる。須恵器の甕は4個体が確認できたが、個体ごとに出土状況に偏りが認められる（図24）。甕79は石室入口北側のテラスから埴丘裾部にかけて、甕80は石室入口の埴丘裾部に、甕78は埴丘南側のテラスに破片の出土が集中しており、埴頂部や石室入口両側のテラスに据え置かれていた可能性が高い。甕77は埴丘西側の広範囲に分布するが、SD3に破片が集中する箇所がみられる。これらの状況は石室外において、大型の須恵器の甕を用いた葬送儀礼が行われた痕跡を示すものと考えられる。また、石室入口北側テラスから埴丘裾にかけて出土した脚付壺（73）も、石室外における儀礼の痕跡である可能性がある。

墓道出土の山茶碗 107 号は石室内下層出土の破片と接合したことから、尾張 5 型式併行の頃に石室内及び墓道に人為的行為が加わった可能性がある。以下、古墳の供獻や祭祀、その後の人為的活動に関する遺物の個別の出土状況について述べる。

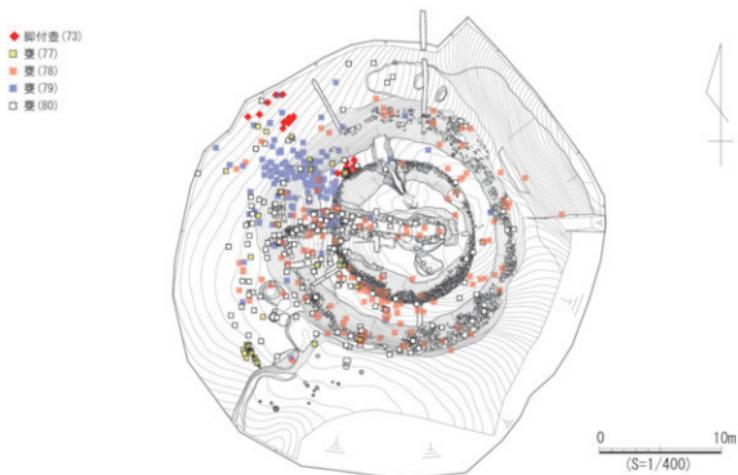


図24 壺・脚付壺出土状況図

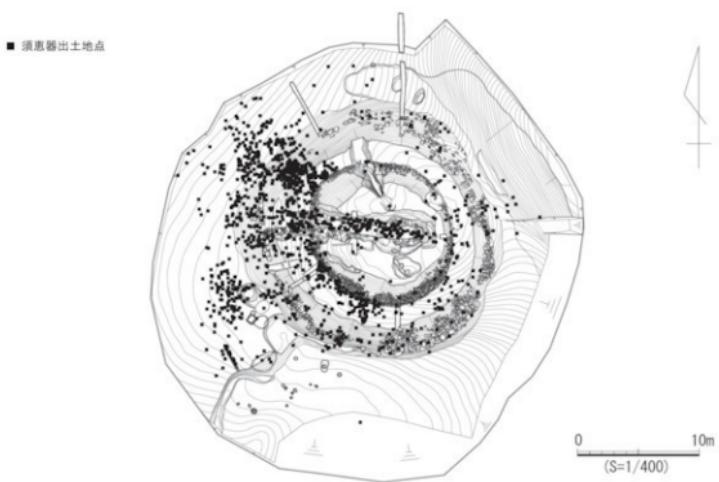


図25 須恵器出土状況図

**須恵器** 須恵器の分布をみると、墓道西側、1段目テラス北西部から南西部、墓道南西部の3箇所にやや集中する傾向がある(図25)。石室内から破片が出土した須恵器は、1、2、3、17、20、22、28、32、36、37、38、39、43、44、53、56、65、67、70、79である。出土層位は大半が石室埋土下層で、原位置を保持していない。2、3、37、38の接合関係をみると墓道西側に破片が集中する傾向があることから、盜掘や後世の改変によって多くの破片が石室から墓道を通って外へ移動したと考えられる。上記20点以外の須恵器は先述した須恵器片が集中する3箇所に主に分布する。

**土師器壺** 石室内から出土した11点中8点は奥壁付近にまとまって出土した。55は2点が接合した小型壺で奥壁付近の出土である。54はSX3から出土した。石室外からは14点が出土した。

**石製品・金属製品** 管玉は石室埋土下層から15点出土した。石室の奥壁付近と玄室と羨道部の境から2mの位置にまとまりがみられる(図23)。紡錘車は石室埋土下層から2点出土した。奥壁付近から1点(96)、玄室と羨道部の境付近から1点(97)が出土した。金属製品は石室埋土から8点出土した。耳環は奥壁付近から2点(99・100)、玄室と羨道部の境付近から1点(98)出土した。大半が鉄鏃と考えられる鉄製品は、石室内に散在している状況である。

### (3) 梅替古墳の出土遺物

#### 須恵器(図27~図33)

**坏蓋** 1は口径推定14.0cmを測り、天井部は稜まで回転ヘラケズリが認められる。口縁部と天井部との境に鋭く突出する稜をもち、口縁端部は内面に面をもって尖らせる。H11号窯式に比定される。2~7は口径14.0cm~15.0cmを測り、天井部はやや丸みをもち、2分の1から4分の3の範囲に回転ヘラケズリが認められる。口縁部は天井部との境に稜をもって垂下し、端部でわずかに外反する。内面には凹面が認められる。H61号窯式期に比定される。8は口径14.8cmを測り、天井部は丸く、4分の3まで回転ヘラケズリが認められる。口縁部は天井部との境に稜をもち、内彎気味に下り、口縁端部内側に顕著な凹面を形成する。蝮ヶ池窯式期に比定される。9~14は口径13.1cm~14.8cmを測り、天井部は丸みをもつが、頂部はわずかに平坦な部位が認められる。9はこの中に古相を示し、器高が高く、頂部がやや平坦である。10、13、14は天井部中位に1周程度回転ヘラケズリが認められる。口縁部は短く内傾し、天井部との境には稜が認められない。口縁端部内面は外傾する浅い凹面を形成する。天井部外面はヘラ切り後、未調整である。TK43号窯式期に比定される。15~19は口径9.4cm~12.0cmを測り、比較的小型である。天井部は2分の1まで回転ヘラケズリが確認できる。口縁部との境の稜は、上下部をナデて短く突出し、口縁部は外傾して下る。19の口縁部は内彎気味に下る。H15号窯式期に比定できる。20は口径11.4cmを測り、小型である。天井部は丸く、3分の1まで回転ヘラケズリ調整が確認できる。口縁部との境に稜が認められず、口縁部は垂下して端部はやや尖る。口縁部の一部にススが付着している。須術65号窯式期に比定される。

**坏身** 21~24は口径14.0cm~15.0cm程度を測り、底面がやや丸みをもちら立ち上がり、受部にいたる。底部には2分の1程度まで回転ヘラケズリが認められる。受部は上外方に突出し、口縁部は内傾する。端部内面はわずかな凹面を形成する。H61号窯式期に比定される。25~27は口径12.0cm~14.4cmを測り、底部は平坦で、外上方へ直線的に立ち上がり受部にいたる。底部には2分の1程度まで回転ヘラケズリが認められる。口縁部は内傾したのち直立し、端部内面に凹面をもつ。27は扁平な形状で、受部は横に突出し、受部の下部は底部との境に段をなす。蝮ヶ池窯式期に比定される。28~31は口径11.4

cm～13.8 cmを測り、底部は平坦で、外上方へ直線的に立ち上がり受部にいたる。底部外面はヘラ切り後、未調整である。受部は上外方に突出して、口縁部は短く内傾したのち直立してのびる。TK43号窯式期に比定される。32は口径11.2 cmを測り、小型である。底部は平坦で、やや丸みをもって受部にいたる。底部は2分の1程度まで回転ヘラケズリが確認できる。受部は上外方に突き出し、端部は丸くおさめる。受部の下部はややくぼむ。口縁部は内傾し、端部内面に面をもたせてやや尖る。H44～H15号窯式期に比定される。33は7世紀初頭へ後半の無台壺身で、底部のみが残存する。34は底部が平坦で外上方へ立ちあがる。底部に回転ヘラケズリが確認できる。H15窯式期に比定される。36は口径推定13.0 cmを測り、底部は平坦で、丸みもって受部にいたる。底部は2分の1まで回転ヘラケズリが確認できる。受部は上外方に突き出し、端部を丸くおさめる。口縁部は内傾してのび、端部はやや尖る。須衛65号窯式に比定される。

**碗** 35は碗である。外傾して立ちあがる底部から口縁部が屈曲して直立したのち、わずかに内傾してのびる。端部はやや外反して丸くおさめる。底部には丁寧な回転ヘラケズリが認められる。H15号窯式併行期に比定される。

**高杯** 37～40はボタン状の摘みのある有蓋高杯の蓋である。摘みの付根から天井部は丸みをもって下り、口縁部に連続する。天井部と口縁部との境に沈線状の凹面が認められる。39・40は摘み中央がやや突出する。TK43号窯式期に比定される。41・42は長脚高杯の脚部である。透孔は1段で、三方にある。脚裾部は逆L字状に屈曲する。蝮ヶ池窯式期に比定される。45・46は高杯の脚部である。裾部は外反する。透孔は三方にあり、46は透孔の下に1条の沈線を巡らす。46の裾部はね上げ状である。TK43号窯式期に比定される。43・44は長脚無蓋高杯である。杯部外面は、43には3条の沈線とその間に刺突文が認められ、44には沈線が認められる。脚部は付根から直立したのち、裾部に向かって強く外反し、透孔は2段で三方にある。上下の透孔の間には沈線を巡らす。43の脚裾部は逆L字状に屈曲し、屈曲部の外面に稜を形成する。H44号窯式期に比定される。47・48は無蓋高杯の杯部である。杯部が丸みをもって立ち上がり、中位に段を有する。H15号窯式期に比定される。49～51は長脚無蓋高杯である。透孔は2段で三方にある。上下の透孔の間には沈線を巡らす。51は上段の透孔が未貫通である。49は杯部外面に刺突文が認められる。49はTK43～TK209号窯式期、50・51はH15号窯式期に比定される。52は短脚無蓋高杯である。杯部は丸みをもって立ち上がり、脚部はハの字に開く。裾端部は内傾する強い平坦面を形成する。須衛65号窯式期に比定される。53は高杯脚部である。那加5号窯式期に比定される。

**甌** 56～59は体部片で、2条の沈線があり、その間に刺突文が認められる。TK43～217号窯式期に比定される。60～62は口縁部片で、頸部は直線的に外傾し、強く屈曲してから口縁部が上外方に開く。61の頸部外面には波状文が認められる。62は口縁部が内彎し、口縁部及び頸部外面に刺突による文様が認められる。60はH15号窯式期、61はMT85～TK43号窯式期、62はTK43～TK209号窯式期に比定される。63は小型品で口縁部が強く外反する。体部の肩が張ることから、長頸瓶の体部を模倣した小型品である可能性もある。須衛65号窯式に比定される。

**壺・瓶** 64は広口壺である。口縁部が弱く外反して、端部に強い凹面を形成する。体部は中位でやや強く張り、上半には沈線と波状文が認められる。蝮ヶ池窯式期に比定される。65は壺類の蓋である。天井部の摘み部は欠損する。天井部と口縁部の境の稜は短く突出し、口縁端部は垂直に下る。TK43号窯式併行期に比定される。66は短頸壺である。産地不明だがTK209～217号窯式併行期に比定される。67～72

は瓶類である。67 は体部のみが残る。体部の肩部に沈線が 2 条認められる。形状から平瓶の可能性が高い。68~72 は提瓶である。68 は頸部中位に 2 条の沈線が確認できる。69 は頸部から肩部の破片で、頸部には振幅の大きい波状文と沈線が認められ、肩部に刺突文が確認できる。71 は体部のカキ目が観察でき、横位に 2 条の沈線を巡らす。72 は体部片で、カキ目と把手が確認できる。67~71 は H15 号窯式期、72 は TK209~217 号窯式期に比定される。73 は大型の脚付壺である。口頸部を欠損する。脚部には丸形と方形の透孔、波状文が認められる。肩部に別の部位が接合してあったような刺雕があるため、把手や子持ちの壺などの装飾があった可能性がある。TK43 号窯式期に比定される。74 は口縁部が強く屈曲し、頸部には刺突文、円形の刺突文、沈線が認められる。頸部の屈曲が水平でないことから、子持ちの壺と考えられる。胎土は 73 とは明らかに異なる。TK43 号窯式期に比定される。

**器台** 75・76 は器台である。75 は脚部の付根で、方形の透孔が一部残存する。76 は脚部で裾部が強く屈曲して、端部は平坦である。外面は方形の透孔、刺突文が認められる。胎土や焼成が類似することから同一個体の可能性がある。H15 号窯式期に比定される。

**甕** 77~80 は甕である。77 は口径 22.0 cm、器高推定 28.7 cm を測る。頸部には突帯状の段を有し、体部外面に叩き痕が残る。78 は口径 45.8 cm を測る。現存高の図上の復元値は 51 cm を測り、器高は推定 60 cm 程度と考えられる。頸部は外反し、口縁端部は段を形成する。頸部に波状文と沈線（2 条）を交互に巡らし、体部外面に敲き痕が残る。79 は口径 41.8 cm を測り、器高は推定 80 cm を超える大型のものである。口縁部は頸部がやや外反し、端部が強く屈曲する。体部外面には叩き痕が確認でき、内面には同心円状の当て具痕がわずかに残る。底部外面の周間に径 32 cm ほどの輪状の圧痕がある。叩き痕の上に重ねられていることから、底部がある程度成形が進んだ段階で、何かの台の上に設置した痕跡の可能性がある。80 は口径 38.6 cm を測る。現存高の図上の復元値は 56 cm を測り、器高は推定 60 cm 程度と考えられる。器壁表面が黒色をなす。頸部はやや外反し、口縁端部を折り返して段を形成する。頸部に沈線（2 条）と波状文を交互に巡らし、体部外面に叩き痕が残る。甕は 6 世紀後半と考えられる。

**土師器（図 29）** 54・55 は甕のミニチュア土器である。54 は底部片である。外面にハケ目がわずかに残る。55 は口径 8.4 cm、器高は 8.3 cm を測る。器壁が厚く、器面の摩耗が著しい。口縁部が短く外反する。

#### 石製品（図 34）

**管玉** 石材は 15 点すべて緑色凝灰岩である。長さ平均 3.1 cm で、直径平均 1.1 cm である。82 が長さ 3.3 cm、95 が長さ 2.0 cm で、1.3 cm の差がある。また、82、83、86、87 の直径が 1.1 cm、95 が直径 0.6 cm で、0.5 cm の差がある。すべて片面穿孔で、両端の孔径差が大きい。中でも 89 は孔径差 0.23 cm あり、出土した中で最も差が大きい。孔の断面形状から尖った錐状の工具を使用して穿孔したと考えられる。81、95 は片側の孔が端に寄っている。この部分には、孔が貫通する際に割れたと考えられる外のくぼみを磨き消そうとした痕跡が残る。88、89、94 は貫通する際に割れたくぼみが大きく、磨いても残った状態である。15 点すべて全面研磨しており、光沢がある。また、両端部には線状痕が確認できる。

**紡錘車** 石材は 2 点とも緑色凝灰岩である。96 は、直径 3.8 cm、高さ 1.5 cm、穿孔径 0.7 cm で、断面形は台形で丸みをもつ。側面には 7 つの複合鋸歯文が施される。底部には穿孔と同心円状に径 2.1 cm の線刻が施され、底部外縁にそって 4 つの複合鋸歯文が確認できる。複合鋸歯文は、先に線の交点を敲打して目印を入れた後に線刻している様子が観察できる。97 は、直径 4.5 cm、高さ 1.9 cm、穿孔径 0.9 cm で、断面形は台形である。側面及び底面には多くの敲打痕と敲打の後に磨いた痕跡が確認できる。穿孔の内

側に穿孔途中に生じた工具痕が残る。

#### 金属製品（図35）

**耳環 銅芯金張である。**98は金張がよく残っている。99・100は銹化が進行して金張がわずかに残る。98は環の外径3.0cm、銅芯の径0.70cm、重さ20.7gである。99は環の外径3.2cm、銅芯の径0.66cm、重さ20.6gである。100は環の外径3.2cm、銅芯の径0.71cm、重さ21.0gである。

**鉄鎌** 出土した鉄製品は、全体の形状がはっきりしているものが少ないが、鉄鎌の可能性が高い。101は鉄鎌の鍔身部から茎部である。鍔身の形状は柳葉型で、鍔身関部にかえりがあったと考えられる。102は鉄鎌の茎部である。中央部と下方部に木質が確認できる。103は幅と形状から鉄鎌の鍔身部、105は形状から茎部の可能性がある。104、106は薄い鉄片で、形状不明であるが鍔身と考えられる。

**墓道出土山茶碗（図35）** 107～110は山茶碗である。107は美濃須衛産、108～110は東濃産である。107は器壁が厚く、底部内面は使用による摩耗が著しい。尾張5型式併行期に比定される。108は器壁が厚く、口縁部が強く外反する。浅間窯下1号窯式期～丸石3号窯式期に比定される。109は高台がやや外反気味で端部に面が認められる。浅間窯下1号窯式期に比定される。110は口縁端部がやや肥厚気味である。白土原1号窯式期に比定される。

#### （4）その他の遺構・遺物

##### SD3（図26）

**遺構の状況** 墳丘の南西のⅢ層上面から検出した溝状遺構である。周溝から外側のG3グリットに位置する。長軸の方位はN-30°-Wである。これは想定される尾根筋と直行する方向にあたる。長さ2.5m、幅0.2m、最大の深さ0.7mである。掘方は四方がほぼ垂直に深く掘り込まれている。規格性の高い構だが遺構の性格は不明である。埋土は、最下層に基盤層を起源とする流入土があり、上層には炭化物が含まれる。一定期間埋められることなく放置されたと考えられるが、上層については人為的な埋土であるかどうか判断できなかった。

**遺物出土状況** 埋土2層から石器2点が出土した。埋土1層から須恵器17点が出土した。須恵器は甕77の可能性が高い。

**出土遺物** 実測できる遺物は出土しなかった。須恵器は甕の体部片で、すべて同様のタタキ目が観察できる。そのタタキ目は77と類似するため、同一個体の可能性が高い。77は墳丘の南西に分布するため、SD3にもその破片が混入したと考えられる。

**所属時期** 須恵器の甕の破片は上層で出土しているため、遺構の所属時期は不明である。

##### SK22（図18・図26）

**遺構の状況** 石室掘方にある段の北東隅の壁面から検出した土坑である。E6グリットに位置する。平面形がほぼ円形を呈し、直径0.4mである。埋土は単層である。性格は不明であるが、石室掘方の壁面から検出したことから、古墳構築と何らかの関係がある可能性がある。

**遺物出土状況** 出土遺物は確認できなかった。

**所属時期** 検出状況から掘方同時に掘られたと考えられる。

##### SK23（図18・図26）

**遺構の状況** 石室掘方にある段の北壁面から検出した土坑である。D6・E6グリットに位置する。平面形がほぼ円形を呈し、直径0.4mである。埋土は単層で、北壁面付近にも同一の埋土が認められた。性格は

不明であるが、石室掘方の壁面から検出したことから、古墳構築と何らかの関係がある可能性がある。

**遺物出土状況** 繩文土器 1点が出土した。

**出土遺物** 実測できる遺物は出土しなかった。

**所属時期** 検出状況から掘方と同時に掘られたと考えられる。

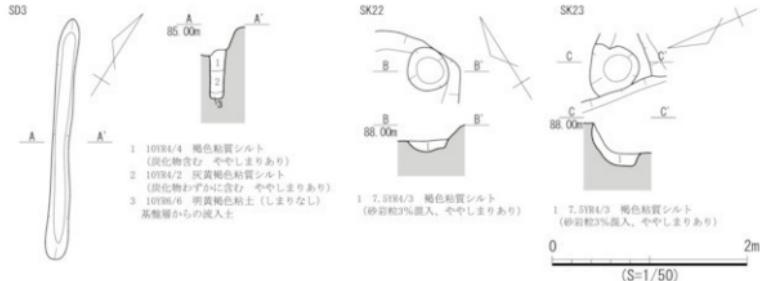


図26 SD3 SK22・23 遺構図

### 注

- 横幕氏は美濃における外護列石を「横穴式石室導入以後の古墳において、埴丘がある時は墳裾をめぐる石列で、主体部の構築及びそれに伴う埴丘盛土工程と、密接かつ連続的に関わる構造をとるもの」と定義しており、「主体部の構築及びそれに伴う埴丘盛土工程とは切り離せる構造を持つものを葺石、貼石等として区別するべき」としている。後述するように、梅津古墳の構築工程において、2段目は明らかに埴丘盛土の構築工程とは切り離せる構造を持つ。1段目についても、基底石は大型石材を用いるなど、埴丘の盛土範囲を示す区画として機能した側面もあると思われるが、構造的には2段目と同様である。したがって本報告では、埴丘斜面を覆う礫群について「葺石」と記述する。

横幕大祐 1997 「いわゆる外護列石について」『美濃の考古学』第2号

- 元三ヶ根3号古墳では、埴丘内部から石室を取り開む列石が検出され、石室を構築する際の一次盛土に伴うものと推定されている。また、土生田氏はこれを「埴丘内埋設石積み施設」として埴丘構築工程の手掛かりとしており、類例として可児市の稻荷塚1・2号墳が上げられている。

財團法人岐阜県文化財保護センター 1992 『元三ヶ根古墳群・白土原9・10号古塚跡』

土生田純之 2003 『横穴式古墳構築過程の復元』『古墳構築の復元的研究』雄山閣

- 石室入口から向かって、左側を左側壁、右側を右側壁と呼称する。
- 成瀬氏は、長手積みと小口積みを併用し壁面を二段構成にする技法をB類として分類しており、掘方と一段目の構築が連動していることを指摘している。

成瀬正勝 1999 「美濃における横穴式石室の構築方法—側壁の積石技法を中心に—」『岐阜史学』第96号 岐阜史学会

- 通常は、天井石の架からない部分は前底部と呼称される。前底部は羨道部の前面で墓前祭祀を目的とした空間であり、美濃地方の前底部は側壁が外部に向かって八の字状に大きく開く形状をとる。当古墳では前底部としてこのような機能と形状をもつ施設は認められない。天井石が架設されなくても玄室への通路と閉塞の機能を合わせもつことを優先させて、前底部ではなく羨道部の名称を用いた。また、横穴式石室に関する用語は、以下の文献を参照した。

小幡早苗・近藤美紀 2001 『横穴式石室用語の定義』『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム

- 長瀬氏は、東濃地方（可児市を含む）の後期古墳に副葬される小型壺の特徴について、玄室の奥壁角部の1方に1個体が通例であり、そのほとんどが平底であることを報告している。

長瀬治義 2001 『東濃地方の後期古墳文化』『美濃・飛驒の古墳とその社会』八賀晋編、同成社

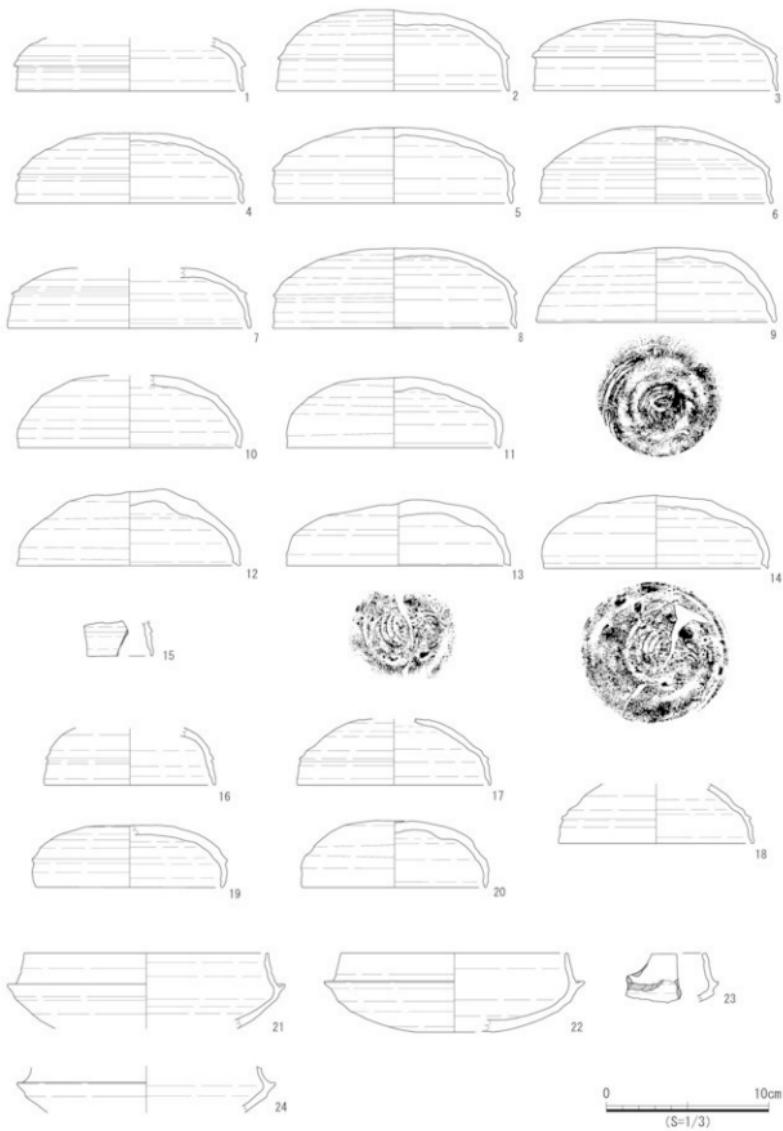


図27 出土遺物実測図(1)

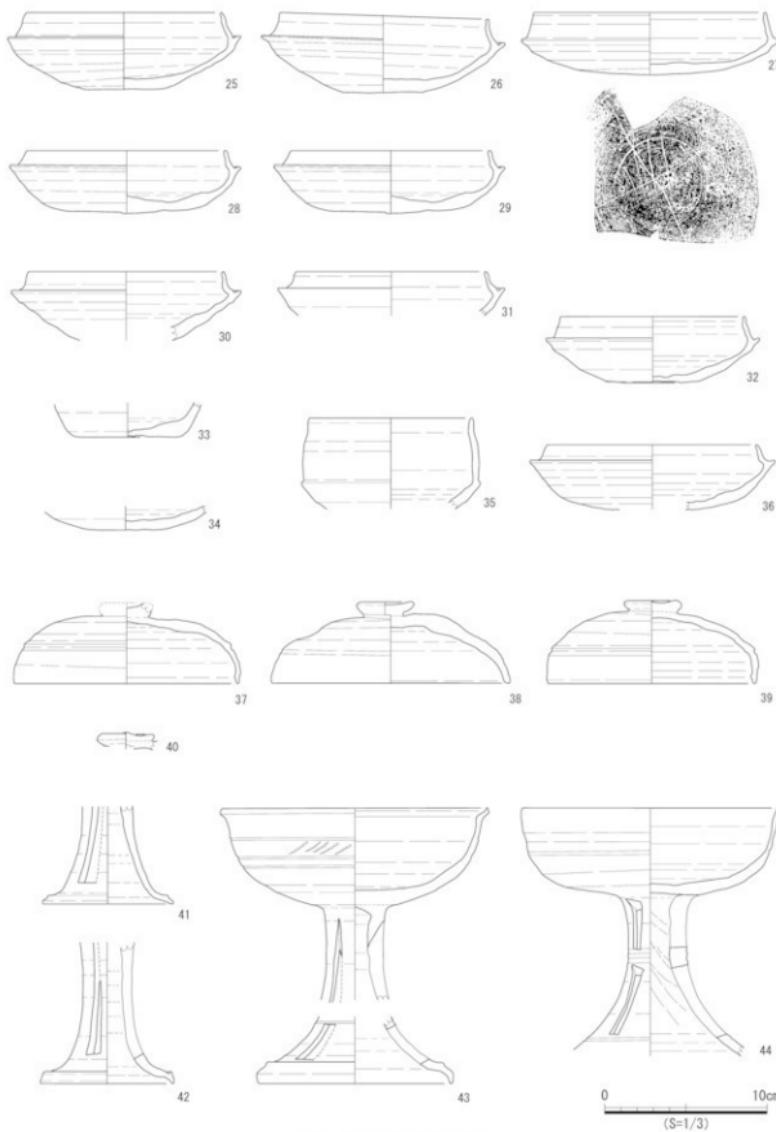


図 28 出土遺物実測図 (2)

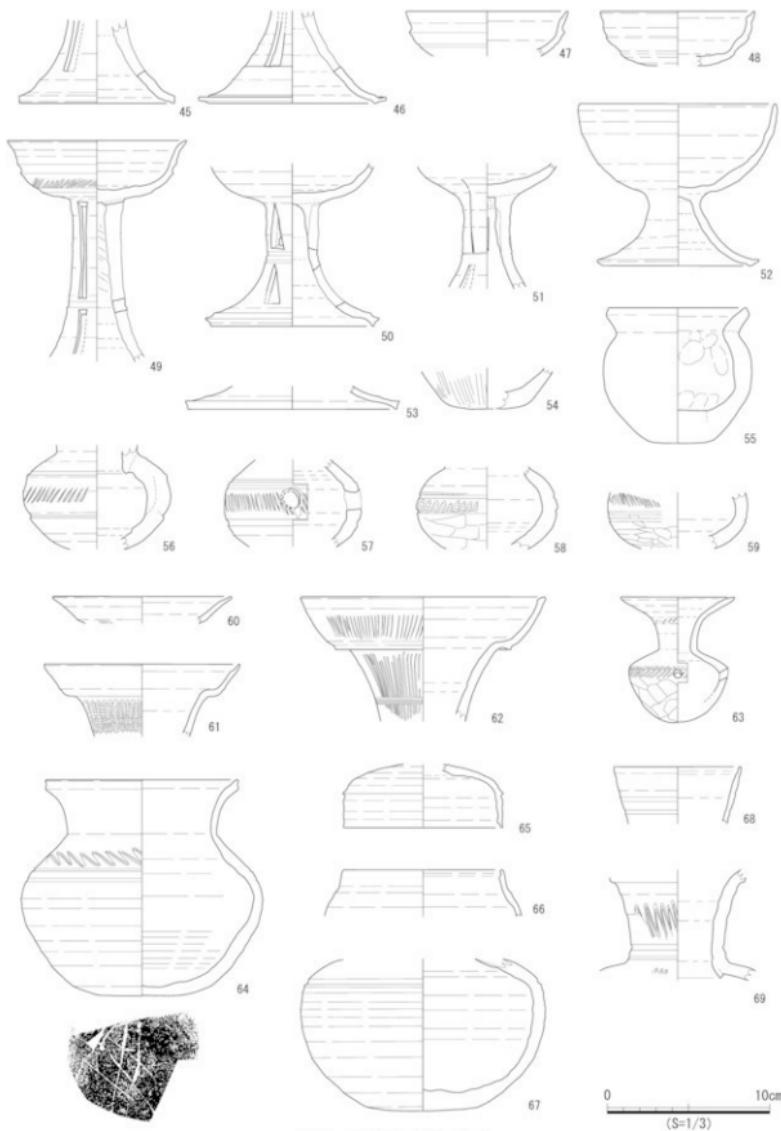


図 29 出土遺物実測図（3）

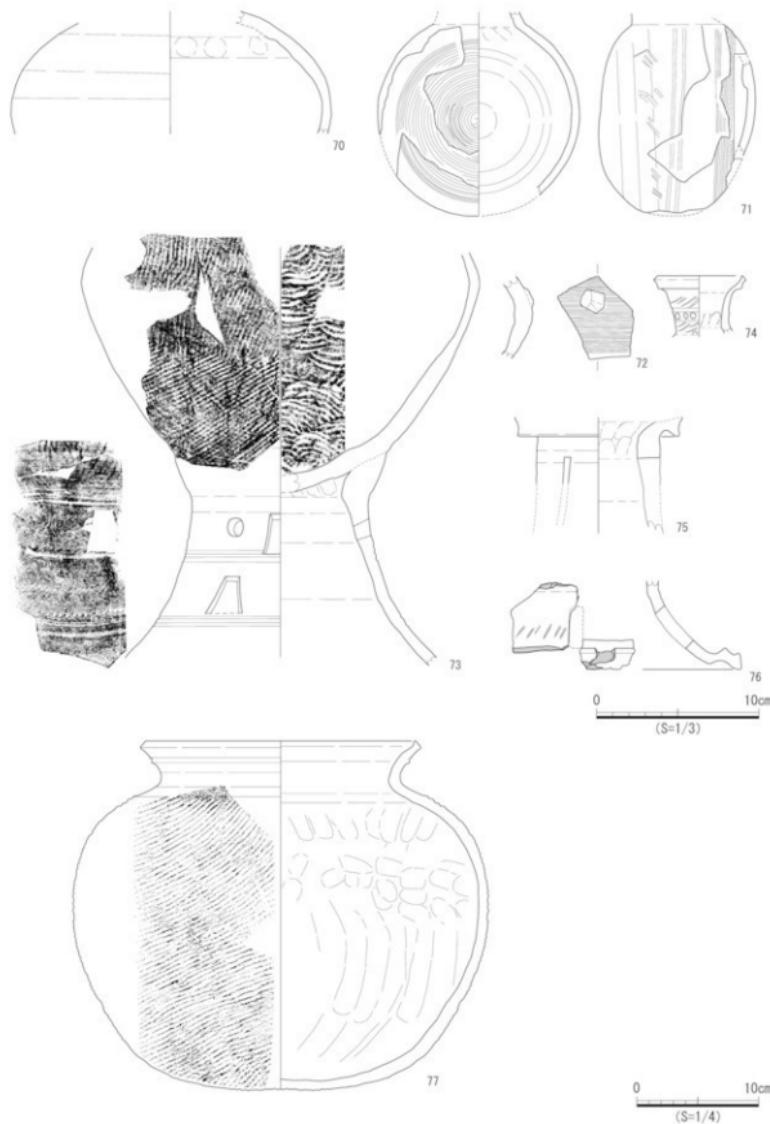


図 30 出土遺物実測図 (4)

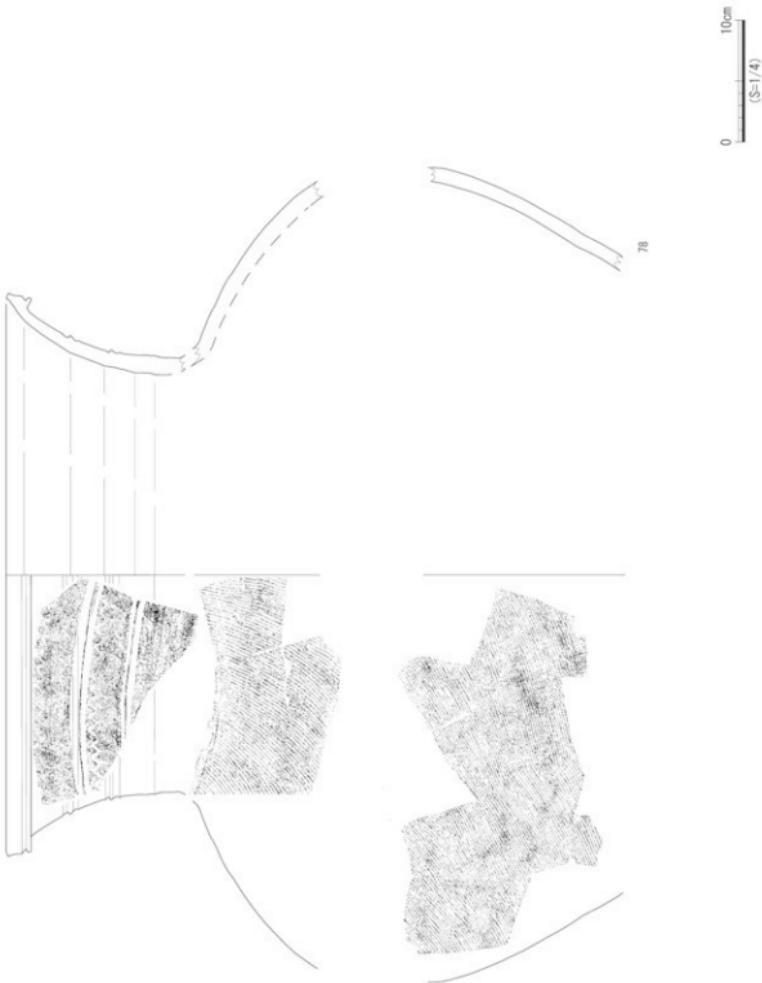


図31 出土遺物実測図（5）

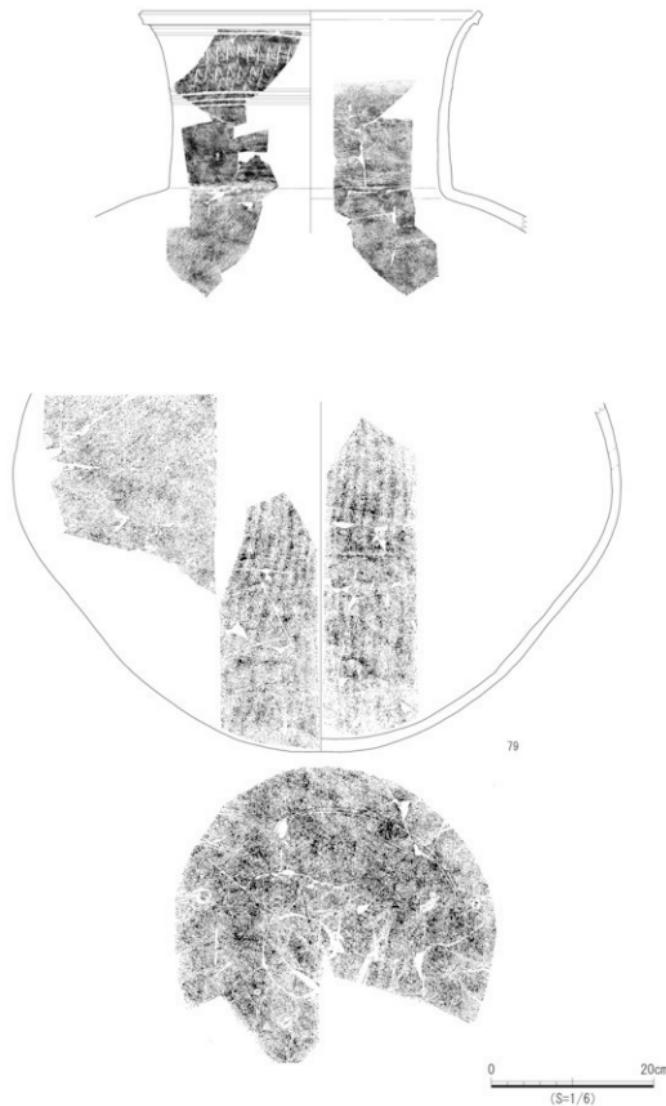


図 32 出土遺物実測図（6）

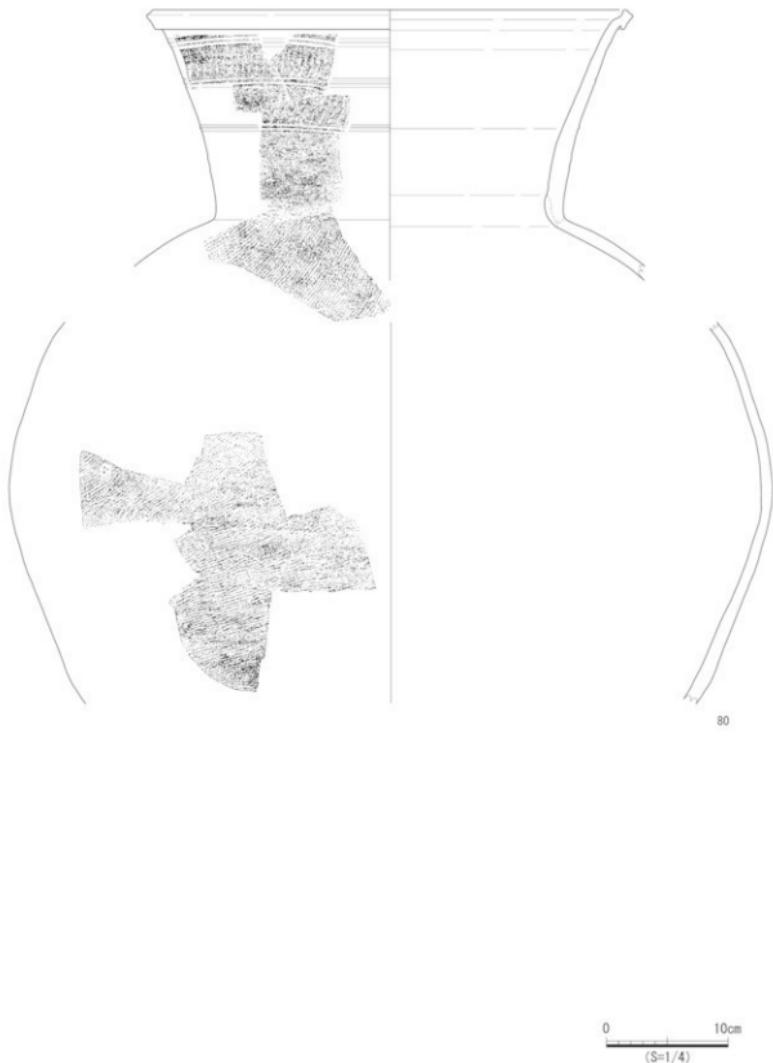


図33 出土遺物実測図（7）

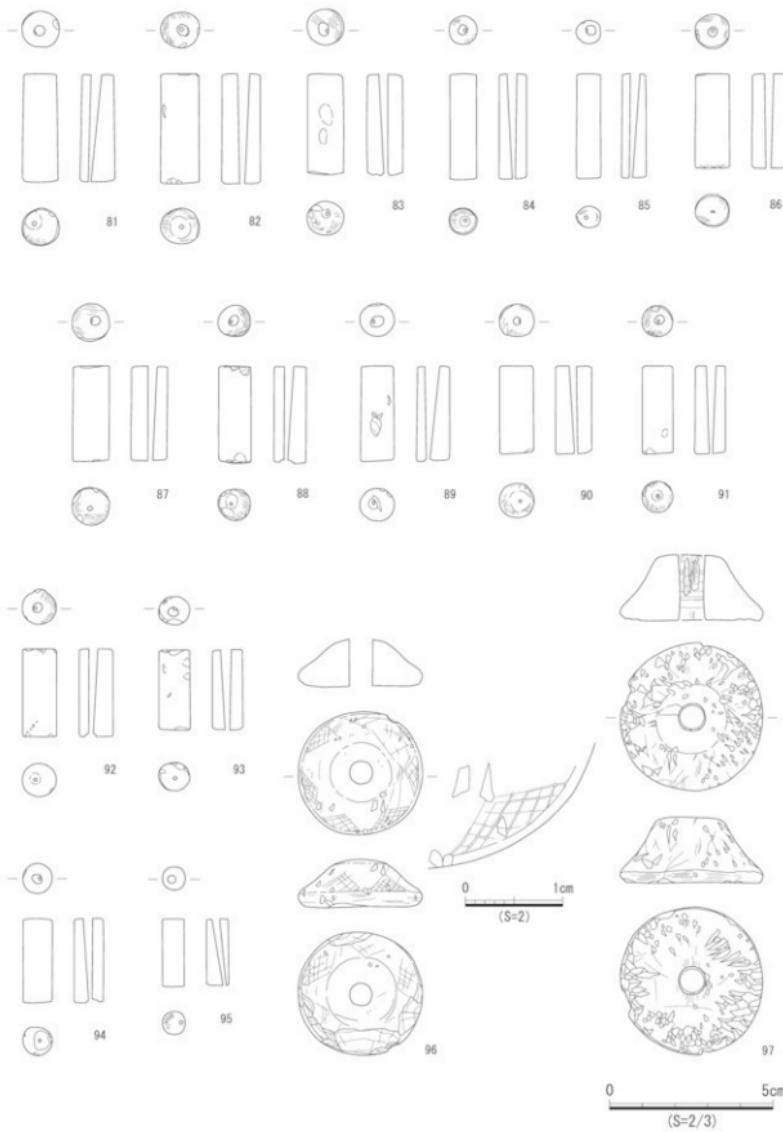


図 34 出土遺物実測図 (8)

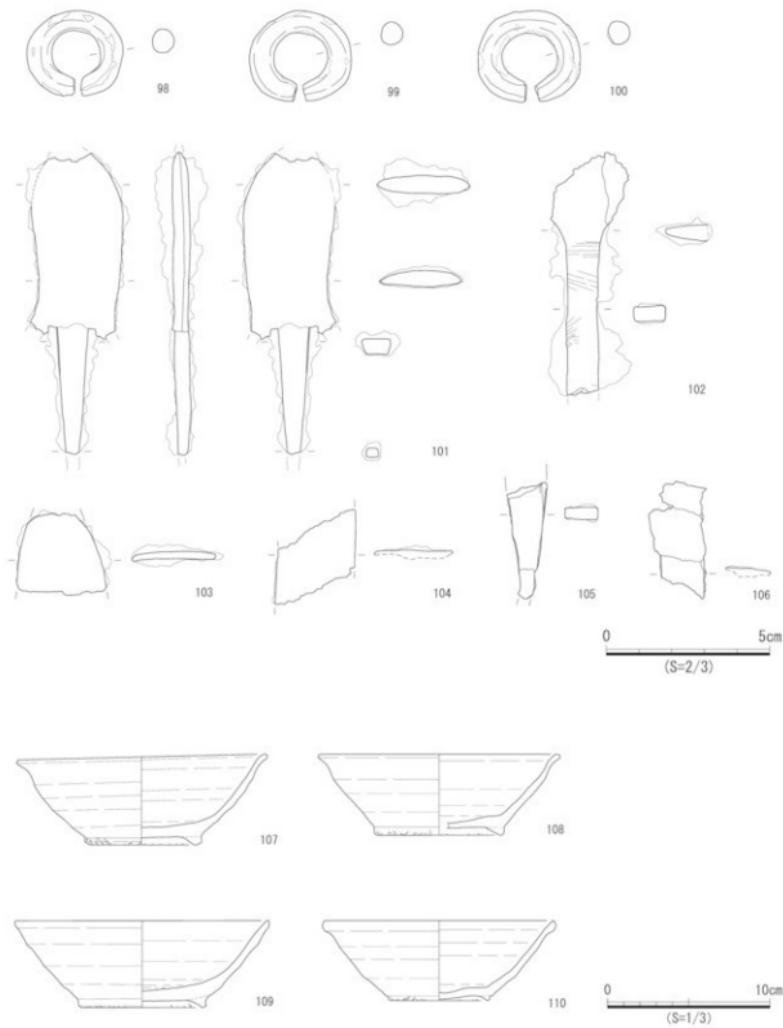


図35 出土遺物実測図(9)

## 第4節 中世以降の遺構・遺物

### (1) 中世以降の遺構

古墳築造後の時期の遺構をまとめた。遺構検出状況や遺物出土状況から、中世から近世にかけての遺構である可能性が高い。以下に遺構と遺物の詳細を述べる。

**SW 1 (図 36・図 37)**

**遺構の状況** 発掘区南西部のⅡ層上面で検出した石列である。F 3、F 4、G 4グリッドに位置する。当遺構は、古墳の墳丘の西から南西裾にかけてみられる盛土状の堆積（SX 3）の下端部に位置しているが、SX 3とは無関係である。平面形はL字状で、長辺は北西—南東方向で4.0m、短辺は北東—南西方向で1.7mである。東端は石が抜かれて、段のみが残る。

検出時は、墳丘からの流入土でほとんど覆われていた。石材は墳丘の葺石の転落石を利用したと考えられるが、数点川原石も含まれていた。石材の積み方は石材の平坦面を揃えるように1・2段で積まれている。小口積みや長手積みといったそれぞれの石材の形状を考慮した積み方は見られず、使用されている石材の大きさも様々である。また、SX 3の端部を削って設置したと考えられるが、背後の土層には裏込めが見られなかった（図 36C-C'）。この場所はSK11など墓と考えられる土坑が下層に存在することから、少なくとも近世以降は墓域として認識されており、墳丘から墓域への土砂の流入を防ぐ目的で設置された可能性がある。なお、この石積みによる区画の中央北寄りに、調査時に埋没しきっていない状態で検出したことから擾乱と判断した土坑が存在する。この土坑は、近世以降SW 1で囲まれた墓域の範囲内において、墓穴として利用するため掘削された穴が放棄された可能性がある。

**遺物出土状況** 石列区画内から寛永通寶を含む3枚の固着した銭貨が出土した。擾乱とした土坑の西側であり、Ⅲ層上面から検出したSK08の上層に位置する。その他、須恵器片2点、山茶碗片1点の細片が出土している。

**出土遺物（図37）** 固着した銭貨（111）は、六道銭の一部と考えられる。字体から、寛永通寶は「古寛永」<sup>1)</sup>と考えられる。

**所属時期** 寛永通寶を含む銭貨と石列の造られた時期との直接の関係は不明であるが、近世に墓域として認められていたと考えられる。SK11と石列の一部が重なることから、石列を設置する際にはSK11の位置が考慮されていないことがわかる。15世紀前半の遺構としたSK11とは時間差があると考えられるが、時期は不明である。また、SX 3を削平してつくられていることから、SX 3より後にする遺構である。

**SX 3（図38）**

**遺構の状況** 発掘区西部のⅢ層上面で検出した盛土状の遺構である。D 3～F 3・E 4～G 4グリッドに位置する。当遺構は、梅替古墳の墓道周辺から南西の法面にかけてみられる人為的な盛土である。南北方向は墓道の正面から周溝、西は墳丘外まで達している。長さ約14m、幅約4.5mである。SX 3造成時には墓道や石室、2段目葺石も埋没しており、盛土は頂部まで緩い傾斜になっていたと考えられる。盛土中からは葺石の転落石と考えられる礫が多量に出土したが、葺石が原位置を保った状態の箇所も見られた。

SX 3は、その形状と位置から墳丘頂部を何らかの目的で利用するに伴い、墳丘に登り易くするために設置された可能性があり、SX 3の北端から墓道の上を通って墳丘頂部に達した可能性がある。盛土中から須恵器と山茶碗・陶器類が混在した状況で出土していることから墳丘の墳頂部が改変された際に、石室の埋

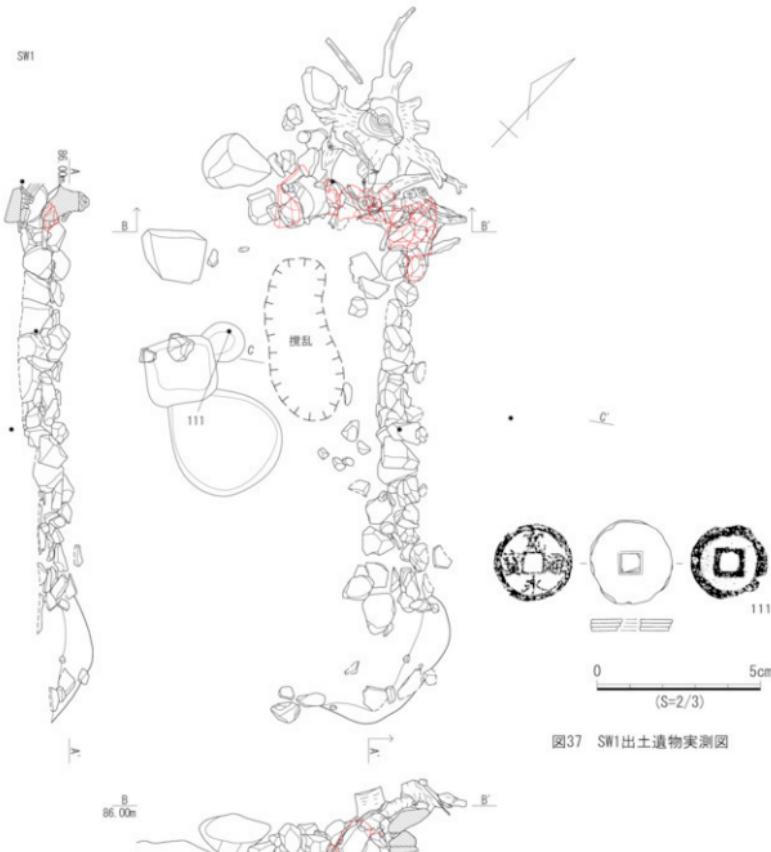


図37 SW1出土遺物実測図

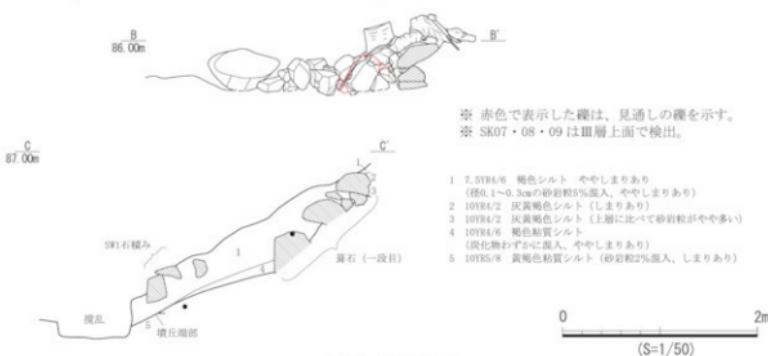


図36 SW1遺構図

※ 赤色で表示した縲は、見通しの縲を示す。  
※ SK07・08・09はⅢ層上面で検出。

没とほぼ同時期に人为的に造成されたものと考えられる。なお、転落石は積み上がったような状態になつておらず、盛土の芯材として利用された可能性がある。墳丘周縁の山茶碗の出土状況（第5章第3節参照）をみると、墳丘の南斜面及びSX3の南西部に分布のまとまりがあり、墳頂部に何らかの施設があり、そこから投棄されたり、流土とともに流れたりしたものが含まれている可能性がある。しかし、墳頂部は後世の大規模な盗掘にあっており、中世以降の遺構を確認する事はできなかった。

**遺物出土状況** 繩文土器11点、石器14点、土師器7点、須恵器174点、山茶碗60点、中世陶器11点が出土した。出土位置はSX3の範囲全域にわたり、遺構表面から30cm～40cm下層にどの種別も混在する状態で出土している。

**出土遺物（図42・図43）** 当遺構出土の土師器の甕54及び須恵器は第3節で述べた。同じく繩文土器166、167及び石器183、188、189は第5節で述べる。土師器のうち、中世以降と考えられる皿は細片であるため、実測しなかった。113～120は山茶碗の碗・皿である。113は小碗が高台を失い小皿化した段階で、器高が比較的高く、体部に稜が確認できる。114は、器壁が厚く、高台断面が三角形を呈する。高台径7.6cmと比較的大きい。113・114は美濃須衛産で尾張5型式併行期に比定される。115は器壁が厚く、口縁部を外反させ、口縁端部は外面に面をもってやや尖る。尾張5型式期に比定される。116は器壁が厚く、胎土が緻密である。口縁部をやや外反させ、口縁端部は外傾する面をなす。窯洞1号窯式期に比定される。117は器高が低く、体部に稜があり、底部内面中央がくぼむ。白土原1号窯式期に比定される。118は高台が粗雑化しており、高台径4.4cmと小さい。胎土が緻密で、器壁が薄い。大洞東1号窯式期に比定される。119は無高台で器壁が薄い。器高が3.2cmと比較的低い。脇之島3号窯式期に比定される。120は高台が分厚く、底部内面に圓線状の沈線が確認できる。胎土から美濃須衛産の可能性が高いが、時期は不明である。146は片口鉢である。体部が外反気味に開き、口縁端部が外側に突出する。尾張9型式に比定される。

**所属時期** 出土遺物の出土状況から15世紀前半以降に造成されたと考えられる。

### SK3（図38）

**遺構の状況** 発掘区北部中央寄りのⅢ層上面で検出した土坑である。D5グリッドに位置する。古墳墳丘2段目の斜面に掘り込まれた奥行6.5mの横穴状の遺構である。平面形の長軸の方位は、N-25°-Wで北西を向いており、北方向に開口している。入口は墳丘のテラスを含めて掘り下げられており、墓道のような状況を呈する。墳丘2段目部分以南の底面は入口よりわずかに低く、また底面の幅が0.5m程度となり、最奥部に達する。最奥部から約1.3mは天井が残存しており、突き当たりには石室の控え積みと考えられる石材が露出していた。遺構が前述の盗掘排土（SX1）によってほぼ埋没しており、これと一緒に掘り下げたため、土層記録を残すことができなかつたが、埋土には天井崩落土なども含まれていた可能性がある。また掘削中に、炭化物がまとまって出土した箇所もみられた。

可児・加茂地域では古墳時代の横穴墓が多数分布することが知られており、当遺構もその可能性が考えられたが、少なくとも完成された横穴墓とは言えず、何らかの目的で後世に構築された遺構と考えられる。

**遺物出土状況** 繩文土器片1点、須恵器片1点、石器1点が出土した。いずれも流れ込みと考えられる。

**出土遺物** 実測可能な遺物は出土しなかつた。

**所属時期** 中世の改変から現代の盗掘までに掘削された可能性があり、時期は不明である。

### SL1（図39）

**遺構の状況** 発掘区北部のⅢ層上面で検出した被窓遺構である。C6グリッドに位置する。埋没した梅替

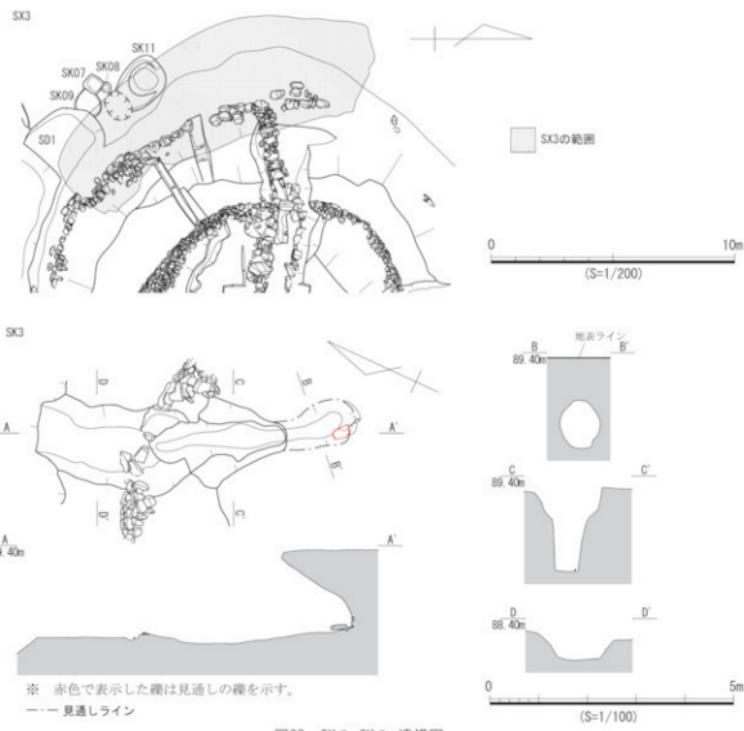


図38 SK3 SK3 遺構図

古墳の周溝上面で検出し、遺構の東側は墳丘の断割りにより掘削してしまったが、方形に近い形で炭化物の広がりを確認した。炭化物の下から検出した浅い掘方の平面形は楕円形を呈していたと考えられ、長軸の方位はN-5°-Eである。長軸長1.4m、短軸長0.7m、深さ0.1mを測る。砂岩の角礫が4つ、上面の高さを揃えて置かれており、いずれも被熱していた。また掘方北側には被熱痕が認められた。浅い掘方の埋土はほぼ炭化物であり、この場で火を焚き、炭を片付けることなく遺棄したものと思われる。可児市今渡遺跡でも同様な構造をもつ遺構が確認されており、「火葬施設」とされている<sup>2)</sup>が、今回確認したものは、今渡遺跡のものと比較すると掘方が浅く、埋葬された形跡は無い。設置された4つの砂岩が棺台とすれば、法量的に座棺の可能性がある。

**遺物出土状況** 土師器2点が出土した。

**出土遺物** 土師器は細片であるため詳細不明である。

**所属時期** 周溝埋没後に設置されていることから、古墳時代以降の遺構と考えられるが、遺物等から類推することができず、時期は不明である。

## SK 1 (図 39)

**遺構の状況** 発掘区北側のII層上面で検出した土坑である。C 5 グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸の方位はN-71° -Wである。長軸長 0.9m、短軸長 0.5mを測る。埋土は単層である。深さ 0.08m の浅い窪み状の掘方の中央から東寄りに長軸長 0.35m の亜円碟が立てられた状態で検出した。II層を掘り込んで立てられた石の周りに明確な掘方は見られないため、石とほぼ同じ大きさの穴を掘削して立てたと推定される。地境を示す指標の可能性もあるが、遺構の性格は不明である。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所属時期** 表土直下のII層上面で検出したことから、比較的新しい遺構と考えられるが、正確な時期は不明である。

## SK 5 (図 39)

**遺構の状況** 発掘区北側のIII層上面で検出した土坑である。C 6 グリッドに位置する。埋没した古墳の周溝上面に位置する。平面形は梢円形に近い形状を呈し、長軸の方位はN-28° -Eである。長軸長 1.4m、短軸長 0.7m、深さ 0.6mを測る。埋土には葺石の転落石と考えられる石が確認できるが、規則性は見られない。埋土上層がII層に類似する砂質土であることから、II層上面から掘り込まれていた可能性がある。

**遺物出土状況** 遺物は出土しなかった。

**所属時期** 周溝埋没後に形成されていることから、古墳時代以降の遺構と考えられるが、出土遺物がなく、時期は不明である。

## SK 7 (図 39)

**遺構の状況** 発掘区南西のIII層上面で検出した土坑である。F 3 ~ G 3 グリッドに位置する。平面形が1辺約 0.6m のほぼ方形を呈する。深さは 0.9m で、掘方の壁面は、底面に向かってほぼ垂直に下がる。底面には壁面などから崩落したと思われる粘質土が堆積しており、埋め戻されるまで若干の時間差があったと思われる。掘削が容易でないIII層を丁寧に垂直に掘り込んでいることから、定形の棺を納めるための土坑墓の可能性はあるが、根拠となるような遺物は出土していない。

**遺物出土状況** 須恵器 1 点、中世陶器 1 点が出土した。

**出土遺物** 実測可能な遺物は出土しなかった。

**所属時期** SK11 に近接することから同じ時期の土坑墓の可能性もあるが、所属時期は不明である。

## SK10 (図 39)

**遺構の状況** 発掘区南西のII層上面で検出した土坑である。G 3 ~ G 4 グリッドに位置する。平面形はやや不定な梢円形を呈し、長軸の方位はN-56° -Eである。長軸長 2.3m、短軸長 1.4mを測る。遺構埋土の上面に埴丘葺石と同様な碟が集積していたが、1 点のみ河原石が見られた。底面は南に向かってやや深くなるが、深さ 0.05m ~ 0.2m と面積の割には浅い印象を受ける。

**遺物出土状況** 士師器 1 点、須恵器 3 点、山茶碗 5 点、中世陶器 5 点が出土したが、いずれも細片である。

**出土遺物** 121 は山茶碗の高台から体部の破片である。高台が粗雑化しており、高台径が 3.2 cm と小さい。大洞東 1 号窯式期に比定される。122 は山茶碗の皿の底部から体部の破片である。底部内面中央がくぼむ。大畠大洞 4 号窯式に比定される。

**所属時期** II層上面で検出したことから SW1 と同時期の可能性がある。山茶碗の時期は 14 世紀末から 15 世紀初頭であるが、これらの遺物はII層に含まれていた可能性が高く、所属時期の判断はできない。

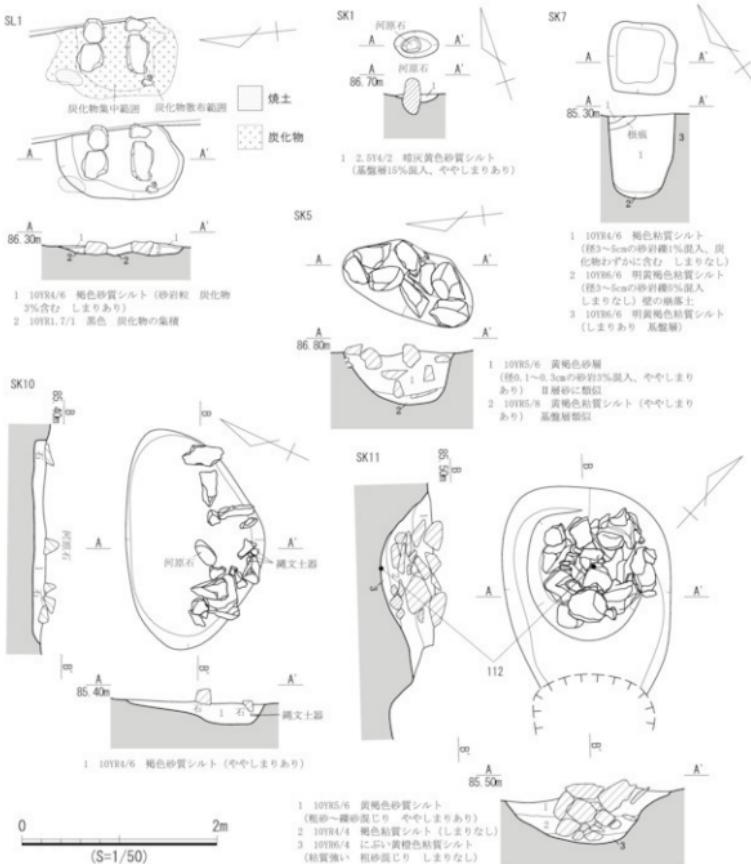


図39 SL 1 SK 1・5・7・10・11 遺構図

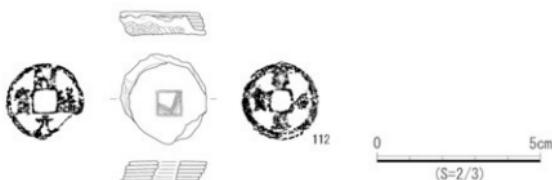


図40 SK11出土遺物実測図

## SK11（図39）

**遺構の状況** 発掘区南西のⅢ層上面で検出した土坑である。F3グリッドに位置する。平面形はやや不定な楕円形を呈し、長軸の方位はN-44°-Wである。南東側を搅乱坑とした土坑に切られる。現存の遺構は、長軸1.9m、短軸1.7m、深さ最大0.7mを測る。遺構の中央から北寄りに集石がみられた。集石は3層が堆積する底面のくぼみ部分の上層に集まっており、平面形は方形に近い形状になっていた。六道銭が出土していることから墓坑の可能性が高く、遺体が腐ったことにより礫も底面近くまで下がったと推定される。なお、棺の使用については不明である。SW1が当遺構の上面に築かれており、SW1が設置された段階では、すでに正確な位置がわからない状態になっていたと考えられる。

**遺物出土状況** 純文土器1点、須恵器8点、山茶碗4点、銭貨1点が出土している。銭貨は最下層である3層から出土しており、6枚が固着している。

**出土遺物（図40）** 112は刷毛器の六道銭と考えられる。両面とも銭貨の表面であり、それぞれ「開元通寶」と「祥符通寶」に判読できる。123は山茶碗である。器壁が薄く、胎土が緻密である。大洞東1号～脇島3号窯式に比定される。

**所属時期** 開元通寶（初鉄621年）は渡来銭と考えられ、中世において一般的に使用された銭貨である。祥符通寶（初鉄1009年）も渡来銭と考えられる。また、出土した山茶碗から、15世紀前半と考えられる。SD4以東の遺構群（図41）

**遺構の状況** 発掘区南西部から溝状遺構1基、土坑7基、柱穴及び柱穴状遺構6基を検出した。H3・H4、G4・G5グリッドに位置する。埴丘南側は谷状の地形になっておりⅡ層が厚く堆積していたが、H3からG6グリッドにかけて、人為的に造成された平坦面を検出した。SD4はその削平面端部に位置しており、排水施設として段に沿ってめぐっていた可能性がある。この平坦面は古墳の周溝を削平するが埴丘には及んでいないことから、埴丘を意図的に残して開発した可能性がある。この平坦面上でSP1～6、SK12～18を検出した。SP3・5・6のように明確な柱痕跡が残るものもあるが、一定間隔で並ぶ穴ではなく、掘立柱建物や柵列は確認できなかった。しかし、このような柱穴は発掘区内の他ではなく、この場所に建物など何らかの施設を設置する目的で造成された可能性がある。

**遺物出土状況** SK15から山茶碗2点、SP5から山茶碗1点、SP6から白磁1点が出土した。

**出土遺物** 124・125は山茶碗の皿である。124は底部内面中央がくぼみ、底部外面に「〇」の墨書がある。大畑大洞4号窯式期に比定される。125は底部外面に判読不明な墨書がある。大洞東1号窯式期に比定できる。145は白磁碗の高台である。高台が細く高い。横地城跡の編年でV類<sup>3)</sup>に比定される。

**所属時期** 遺構の検出状況や形状、埋土などが類似しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。Ⅱ層に含まれる陶器やSP5の山茶碗から15世紀初頭以前の遺構群と推定される。

## (2) 他の出土遺物（図42～図44）

ここでは、埴丘上や周溝埋土、遺物包含層から出土した遺物について述べる。

126～144はいずれも東濃産の山茶碗と考えられ、時期が複数認められる。126は小碗が小皿化した段階であり、後にする皿に比して器高が高く、底部の器壁が厚い。浅間窯下1号～丸石3号窯式期に比定される。127は高台径が4.8cmと大きく、高台の断面形が三角形を呈する。窯洞1号窯式に比定される。128は皿で、器高が低く、体部に稜が確認できる。白土原1号窯式に比定される。129は皿で、外反気味に立ち上がり、口縁端部は外面に面を形成して尖る。明和1号窯式期に比定される。130～134は高台径が小さく、

器壁が薄い。大烟大洞4号窯式期に比定される。135～141は立ち上がりの角度が緩く、器高が低い。また、高台径が小さい。大洞東1号窯式期に比定される。142は高台が低く無高台に近い底部の形状である。143・

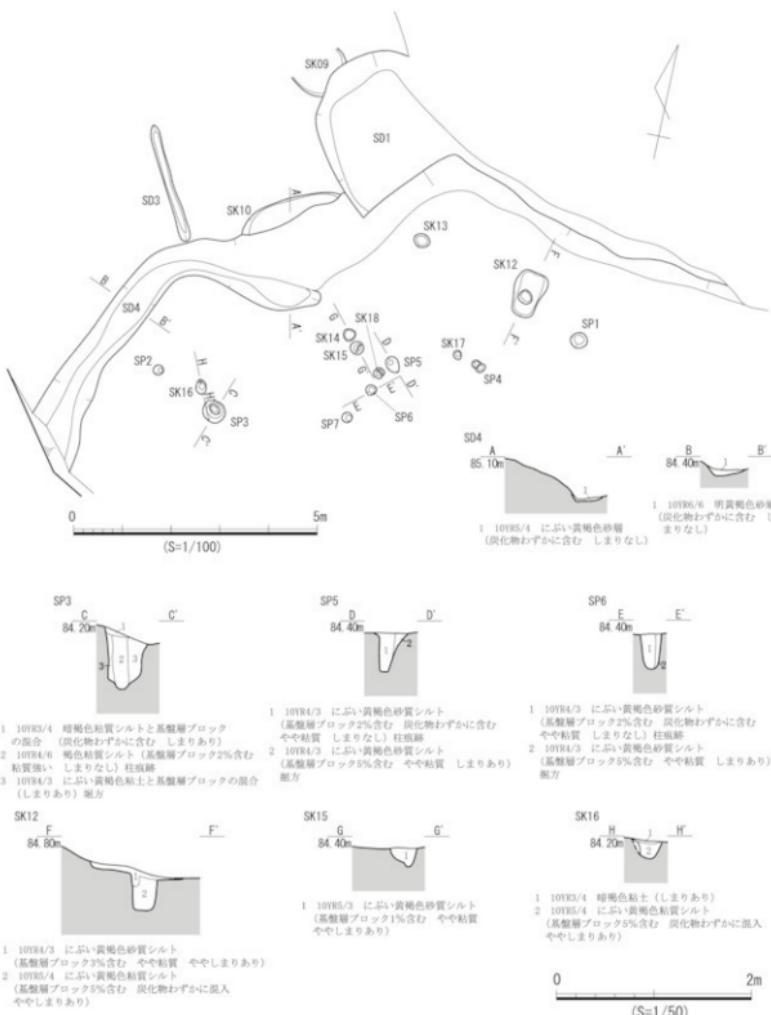


図41 SD4以東の遺構図

144は無高台である。142～143は脇之島3号窯式期、144は生田2号窯式期に比定される。147～151・155～158は古瀬戸である。147は縁袖小皿である。口縁部に施釉が施され、体部下位に煤が付着する。古瀬戸後III期に比定される。148は尊式花瓶である。体部が強く内湾する。古瀬戸後III～IV期古段階に比定される。149は小天目茶碗である。内外面に鉄釉が施される。古瀬戸後I期に比定される。150は天目茶碗である。内外面に鉄釉が施され、口縁部が屈曲する。古瀬戸後IV期古段階に比定される。151は耳付水注である。完形に近く、内外面に鉄釉が施される。また、範囲が不明瞭なため図化しなかつたが、底部に墨痕が確認できる。古瀬戸後III～IV期に比定される。155・156は四耳壺である。把手の上下には沈線が確認できる。155は古瀬戸後I～II期に、156は古瀬戸中I～II期に比定される。157は内耳鍋である。完形で、外面中位に煤が付着している。古瀬戸後IV期古段階に比定される。158は擂鉢である。口縁端部は外方へ突出し、凹面をなす。古瀬戸後IV期古段階に比定される。152・153は土師器の皿である。完形に近い形で出土した。ロクロを使用せず、手捏ねで成形している。152は内面底部に仕上げのナデが確認できる。153は底部と口縁部の接合時のユビオサエが確認できる。154は中国産の龍泉窯系の青磁である。外面に陽刻で鍼連弁文が施される。横地城跡の編年でB O類<sup>3)</sup>に比定される。159は片口鉢である。146に比べ、体部の立ち上がりの角度が緩く、口縁端部は外に突出する。瀬戸産と考えられ、尾張10型式に比定される。160は常滑産の玉縁状口縁壺である。肩部に2条、体部下位に1条の沈線が確認できる。中野編年6a型式に比定される。161・162は常滑産の甕である。161は胎土が赤褐色を呈し、口縁端部は折り曲げ下に垂れる。中野編年6a型式に比定される。162は胎土が褐色を呈し、口縁端部は折り曲げ、体部につく。中野編年9型式に比定される。163・164は砥石である。墳丘を覆うII層やSK3などから6点出土した。石材は砂岩が4点、泥岩が1点、安山岩が1点である。このうち2点を図化した。163・164は被熱がみられ、火入れして割れた面を砥面として利用したと考えられる。いずれも砂岩で荒砥と考えられる。163は置いて使用したと考えられ、砥面は3面である。164はその形状から手持ちで使用したと考えられ、砥面は4面で、線状にくぼんだ帶状痕も確認できる。時期不明のため、この章に掲載した。165は石鍋である。墳丘南東のII層で口縁部から体部にかけての破片が1点出土した。165は鈎を含む体部の破片である。口径が推定24cmで中型である。口唇部や鈎断面の角が鋭く、鈎の上辺より下辺が広い。頭部と鈎の境に穿孔があり、吊り金具が取り付けられていた可能性がある。外面はノミで成形した痕が確認できる。内外面に線状痕や磨痕が多く確認でき、欠損部断面も摩耗していることから、二次加工のうえ温石として再利用された可能性がある。鈎の形状から草戸軒遺跡の石鍋編年におけるIII-b類<sup>4)</sup>に比定される。

#### 注

- 「寛」の字の12画と13画の頭が接すること、「寔」の字の具画末尾が「ス」となることから古寛永といえる。  
永井久美男編 1998『近世の出土銭II』兵庫理銭調査会
- 今渡遺跡ではST9から検出された甕について、「甕は遺構床面から箱状容器を浮かせつつ燃焼に必要な通気性を確保する役割がある」とし、火葬施設と判断している。ST9は長軸長1.19m、短軸長0.82m、深さ0.31mである。  
岐阜県文化財保護センター 2013『今渡遺跡』
- 白磁・青磁の編年については、下記の文献を参照した。  
菊川町教育委員会 1999『横地城跡総合調査報告書』
- 石鍋の編年については、以下の文献を参照した。  
木戸雅寿 1982「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒No.112』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

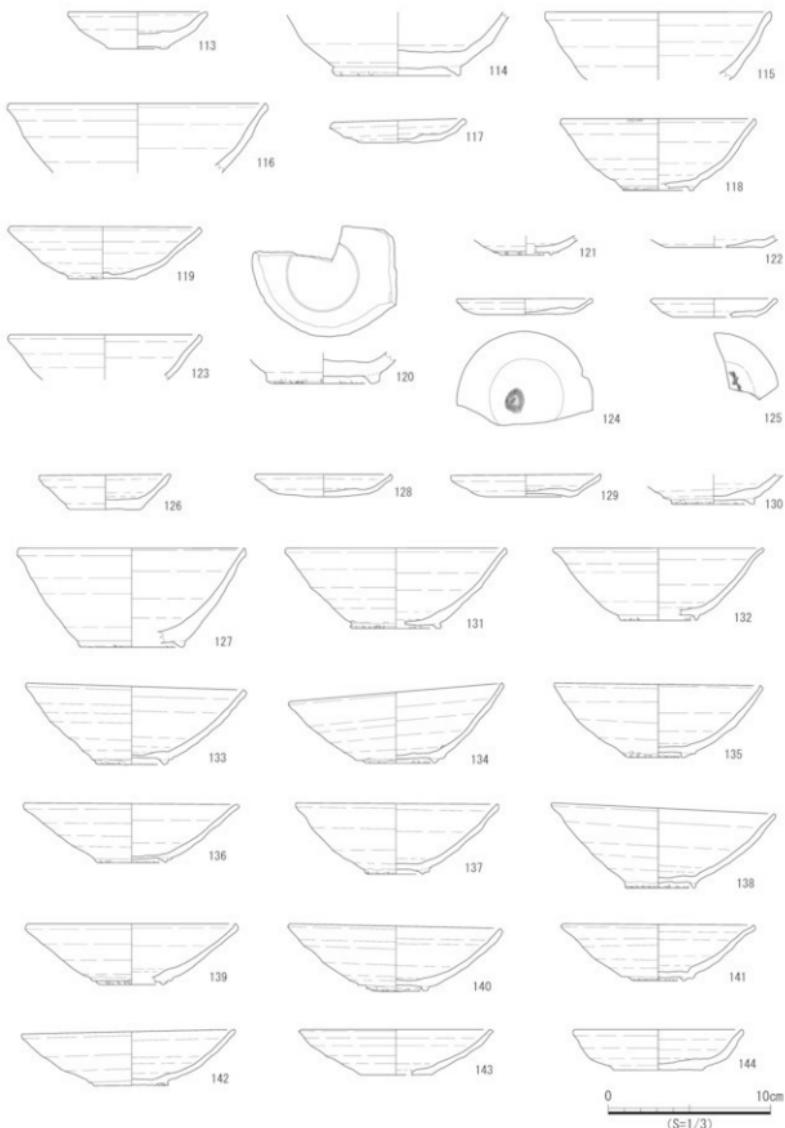


図42 出土遺物実測図(10)

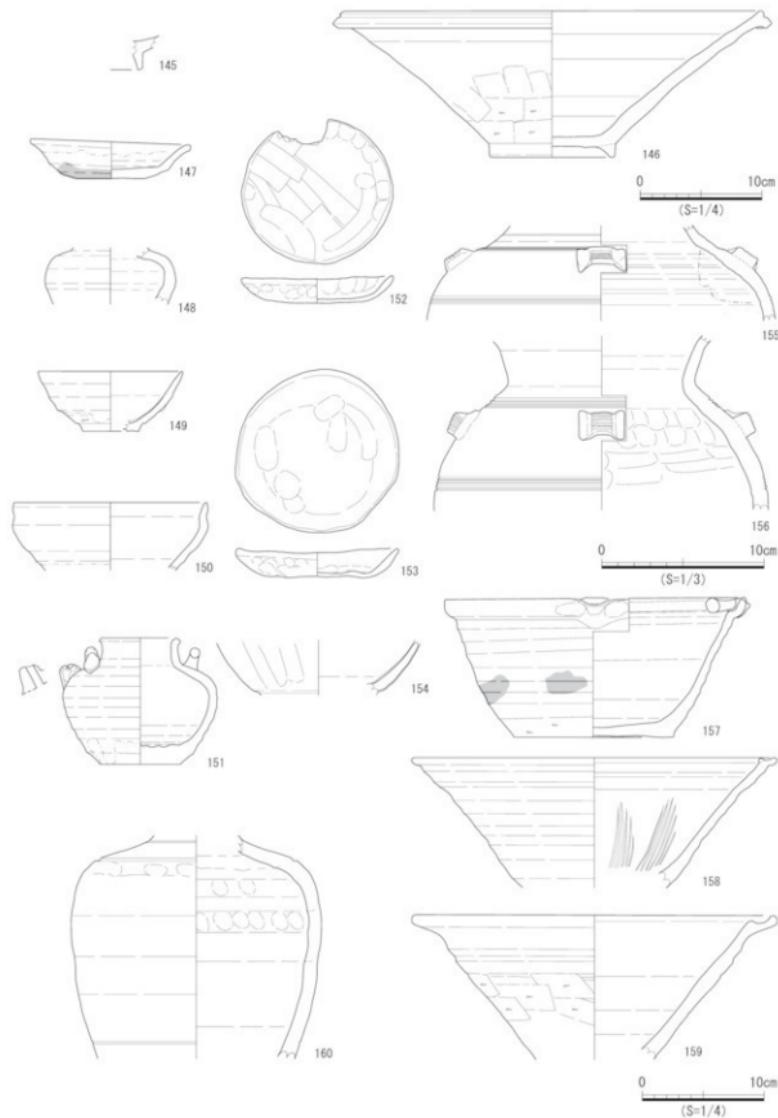


図43 出土遺物実測図(11)

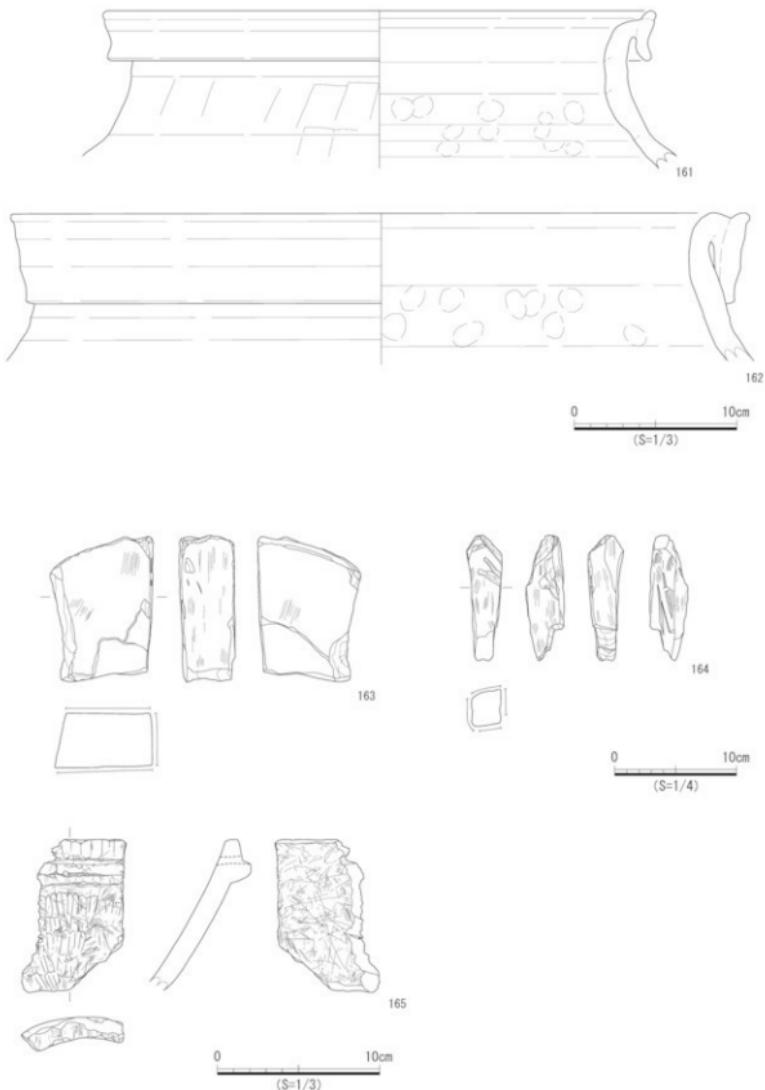


図44 出土遺物実測図 (12)

## 第5節 繩文時代の遺構・遺物

### (1) 繩文時代の遺構

墳丘解体後、墳丘下で検出した遺構をまとめた。確認した遺構は被熱遺構1基、土坑1基で、E 5・C 6・D 6グリッドに分布する。いずれも放射性炭素年代測定の結果（第4章参照）から、繩文時代早期の年代を示す。また、遺構から出土した繩文土器片は認められなかったが、墳丘盛土などから出土した土器には繩文時代早期から前期の土器が認められることから、墳丘下で検出した遺構は繩文時代の可能性が高いと考えられる。以下に遺構の詳細を述べる。

SL 2（図45）

**遺構の状況** 墳丘下で検出した被熱遺構である。C 6・D 6グリッドに位置する。墳丘断面の断ち割りを実施した際、西側を削平してしまった。平面形は梢円形を呈していたと考えられるが、削平した箇所を考慮して残る東側の北壁面、南壁面上端を延長した場合、西側に向かって北壁面、南壁面がそれぞれ大きく開き、平面形は三角形に近い形状を呈する可能性がある。現存する部分の長軸の方位はN-60°-Wで、長軸長1.9m、短軸長1.3m、深さ最大0.5mを測る。断面形はU字形で、B-B'断面より西側へ約0.4m離れた位置にあるA-A'断面の底面はやや平坦である。被熱痕が西側の底面、東側の北壁面、南壁面にそれぞれ認められる。底面の被熱痕や底面形状から、西側が焚口の可能性がある。埋土の下層には炭化物を多量に含む層が確認できる。平面形や被熱痕跡から当遺構は煙道付炉穴と類似する<sup>1)</sup>。また、出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、繩文時代早期前葉であることを確認した（第4章参照）。そのため、当遺構はその形状や放射性炭素年代測定で得られた年代により繩文時代早期の煙道付炉穴である可能性が高い。当遺構を煙道付炉穴と仮定すると、埋土上層（図45 B-B' 3層・4層）は当遺構の北壁面を覆っているが、この堆積が天井部崩落土か墳丘築造に関わる二次堆積かは判断できなかった。

**遺物出土状況** 炭化物以外の出土遺物は認められなかった。

**所属時期** 放射性炭素年代測定の結果から、繩文時代早期と考えられる。

SK24（図45）

**遺構の状況** 石室掘方底面で検出した土坑である。E 5グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸の方位はN-85°-Wである。長軸長1.4m、短軸長0.65m、深さ0.2mを測る。東西方向の断面形は舟底状で東側がやや深く、西側に向かって徐々に浅くなる。底面に明確な被熱の痕跡は認められないが、埋土上層（図45 C-C' 1層）に焼土が堆積していた。また、掘方の東側（図45 C-C' 2層）に炭化物がピット状に集積しており、その範囲は底面がやや深い箇所と一致する。

当遺構の長軸の方位が石室の掘方の主軸とほぼ一致することから、石室の構築と何らかの関係があると考えたが、出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果、繩文時代早期前葉であることが確認された（第4章参照）。そのため、当遺構はSL 2と近い時期に作られた煙道付炉穴の可能性があるが、底面及び壁面の被熱は認められない。

**遺物出土状況** 炭化物以外の出土遺物は認められなかった。

**所属時期** 放射性炭素年代測定の結果から、繩文時代早期と考えられる。

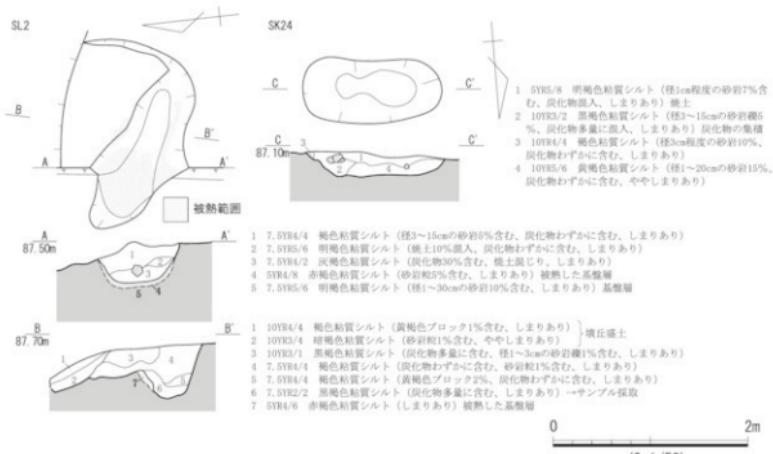


図45 SL2・SK24 遺構図

## (2) 繩文時代の出土遺物

縄文時代の土器や石器は、Ⅲ層上面の古墳や中世以降の遺構、墳丘下旧表土から出土した（実測縄文土器は墳丘盛土、SX 1、SX 3出土である）。出土点数は、縄文土器が168点、石器が164点である。墳丘下の旧表土からは数点出土したのみである。古墳や中世以降の遺構から出土した遺物が多いが、古墳時代以降の土地の改変によって混入したと考えられるため、本節で取り扱う。以下、縄文土器・石器について詳細を述べる。

### ① 文土器（図46）

出土した土器片は全体に器壁が薄く、摩耗が著しいことから観察の困難な破片が多数を占めた。その時期は以下に述べる土器からみて、縄文時代早期から前期の土器と考えられる。

166は深鉢の口縁部片である。口縁端部はナデによって平坦に形成され、やや内傾する。外面には横方向の条痕が確認できる。内面は摩耗が激しく、調整などは確認できない。167は深鉢の口縁部片である。口縁端部はナデにより平坦に形成される。内外面に横方向の条痕が確認できる。内外面条痕を施す東海条痕文系土器<sup>2)</sup>であり、縄文時代早期後半に属すると考えられる。168は深鉢の体部片である。外面にはLR繩文が確認できる。169は深鉢の体部片である。内面はナデ調整が確認でき、外面にはLR繩文が確認できる。170は深鉢の口縁部片である。外面に横走する2条の突帯が確認できる。内外面ともに摩耗しており、調整は不明である。171は深鉢の口縁部片である。内面を肥厚した上にキザミを加えて施している。口縁端部には粘土紐を貼付し、半裁竹管状工具によるΣ字状の押し引きがなされている。外面には1条の突帯が確認できる。縄文時代前期後葉の北白川III式・大歳山式土器と考えられる<sup>3)</sup>。172は深鉢の底部である。底径は復元で8.0cmである。底部が外方に張り出し、指頭による連続する浅い押圧が確認できる。縄文時代前期の特徴に類似する<sup>4)</sup>。内面にはユビオサエが確認でき、外面は摩耗している。173は深鉢の底部から体部の破片である。底径は推定5.6cmである。体部内外面に斜め方向の条痕が認められる。

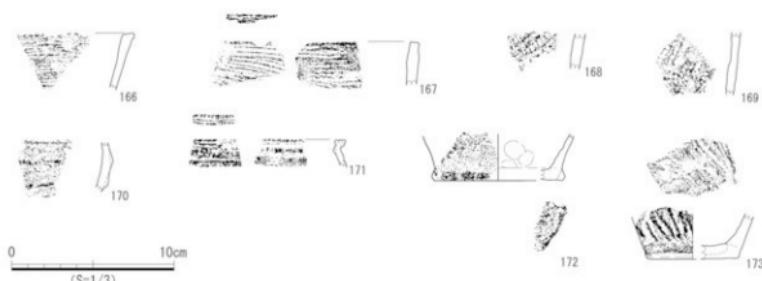


図 46 出土遺物実測図 (13)

## ②石器 (図 47・図 48)

縄文時代と考えられる石器を 32 点掲載した。以下種別ごとに詳細を述べる。

**石鎌** 墳丘盛土、石室埋土、SX 1 から 10 点出土した。石材は下呂石が 5 点、チャートが 5 点である。そのうち 5 点を図化した。全体に薄く、主要剥離面を残さないものが多い。出土した石鎌は、すべて無茎鎌で基部が圓状のものと平らなものとに分けられる。174～176 は圓状の基部を有するもので、175 は抉りが浅い。176 は脚部の一端を欠き、175 は脚部両端の先を欠く。174 は先端部をわずかに欠損している。177・178 は平らな基部を有するものである。177 は未製品と考えられる。178 は片面に打瘤が残る。

**石錐** 墳丘直上から 1 点出土した。石材は下呂石である。179 は、先端から基部に向かって太く広がり、頭部との区別が不明瞭な形状である。先端の断面形状は菱型に近い。錐部先端は磨滅している。頭部上面に自然面が残る。

**石匙** SK 2 から 1 点出土した。石材はチャートである。194 は横型石匙である。茎部の位置から左右非対称形であるといえる。刃部は片面調整である。紐などの着柄の痕跡は確認できない。

**スクレイパー** 墳丘盛土、石室埋土、SX 1、SX 3 から 8 点出土した。石材はチャートが 7 点、頁岩 1 点である。そのうち 4 点を図化した。185 は両面調整で凹形の刃部を作り出している。186 は両面調整で刃部を作り出しているが、その角度は比較的鈍い。187 は扁平な三角形の剥片を用いており、両側縁部中央付近に片面調整の刃部を作り出している。188 は、剥片の尖った部分をはさんだ両側縁に片面調整で刃部がみられる。

**楔形石器** SX 1 から 1 点出土した。石材は下呂石である。180 は剥片の両端に潰れ状の剥離が認められる。**打製石斧** 墳丘盛土や石室掘方から 8 点出土した。石材はホルンフェルス 4 点、粘板岩 2 点、泥岩 2 点である。完形のものが少なく、残存部の形状から大半が小型の短冊型であることが推測される。そのうち 2 点を図化した。197 は小型で、両面に斜め方向の線状痕が確認できる。198 は右側縁部が直線的であるのに対し、左側縁部はやや膨らみがある。刃部先端は尖っており、刃部付近に磨滅痕が確認できる。

**磨製石斧** 石室埋土から 1 点出土した。石材は流紋岩である。199 は、基部が欠損している。側縁部には加工痕と考えられる線状痕が確認できる。刃部に磨滅痕や剥離が認められる。

**石核** 墳丘盛土、SX 1 から 3 点出土した。石材はすべて下呂石である。そのうち 1 点を図化した。195 は円錐を打ち欠いたもので、風化した自然面が観察できる。

**RF** 墳丘盛土、SX1、SX3、包含層I・II層から7点出土した。石材は下呂石が2点、チャートが5点である。そのうち4点を図化した。181～184は二次加工が確認できる。183は薄く細長い形状で、左端に細かい剥離が確認できる。

**MF** 墳丘盛土、石室埋土、SX1、SX3、包含層II層から33点出土した。石材はチャートが25点、下呂石が7点、黒曜石が1点である。そのうち5点を図化した。189は風化した自然面があり、その反対側の側縁に剥離が確認できる。190は全面風化しており、剥片側縁の1か所に剥離がみられる。191は剥片上端部にわずかに平坦面があり、剥片側縁の2か所に剥離が確認できる。192は剥片側縁の一部に自然面が残り、その反対側縁に剥離が確認できる。193は風化した自然面の反対側縁の一部に剥離が確認できる。

**石錐** SX1から1点出土した。石材は安山岩である。196は、扁平な梢円形の河原石を用いて、長軸の両端を打ち欠いて抉りを作っている。両面に敲打によるはがれが確認できる。

**磨石・敲石** 墳丘盛土、周溝埋土、SX1、SX3、包含層II層から25点出土した。石材は安山岩12点、砂岩5点、その他花崗岩、凝灰岩、濃飛流紋岩、黒色片岩などである。そのうち5点を図化した。200～203は河原石を用いた磨石である。いずれも扁平な両面を作業面として使用しており、敲打痕が両面と側面に確認できる。204は棒状の敲石である。長軸の両端に敲打痕が確認できる。

**石皿・台石** 周溝埋土、包含層II層から3点出土した。石材は安山岩、花崗岩、花崗斑岩である。そのうち1点を図化した。205は河原石を用いた台石である。厚さ4.3cmで、断面形状は扁平な梢円形を呈する。両面とも中央部に使用した跡痕が確認でき、細かな凹凸がある。

#### 注

1) 煙道付炉穴は全国的に形が類似しており、平面形は細長い二等辺三角形形状を呈している。二等辺三角形の底辺付近に開口部、トンネル状になっていたと考えられる部分に煙道部、二等辺三角形の頂点にあたる部分に煙出部がある。焼土・炭化物が煙道部付近に認められる例が多い。小濱氏によると煙道付炉穴の全長は東海地方では1.5m～2.0mが最も多いとしており、その時期は大川式～鴻ノ木式としている。

小濱学 2003『煙道付炉穴及び炉穴に関する一考察』『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 関西縄文文化研究会編、六一書房

2) 山下勝年 2008『東海条痕文系土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編、アム・プロモーション

3) 県内では同様の特徴をもつ土器の出土例として、揖斐郡揖斐川町上原遺跡、下呂市立場遺跡がある。

財團法人岐阜県文化財保護センター2000『上原遺跡』

萩原町教育委員会 1993『立場遺跡』

4) 県内では同様の特徴をもつ土器の出土例として、揖斐郡揖斐川町上原遺跡、加茂郡坂祝町芦戸遺跡がある。

財團法人岐阜県文化財保護センター2000『上原遺跡』

坂祝町教育委員会・岐阜県・建設省 1988『芦戸遺跡——級河川木曽川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘報告書—』

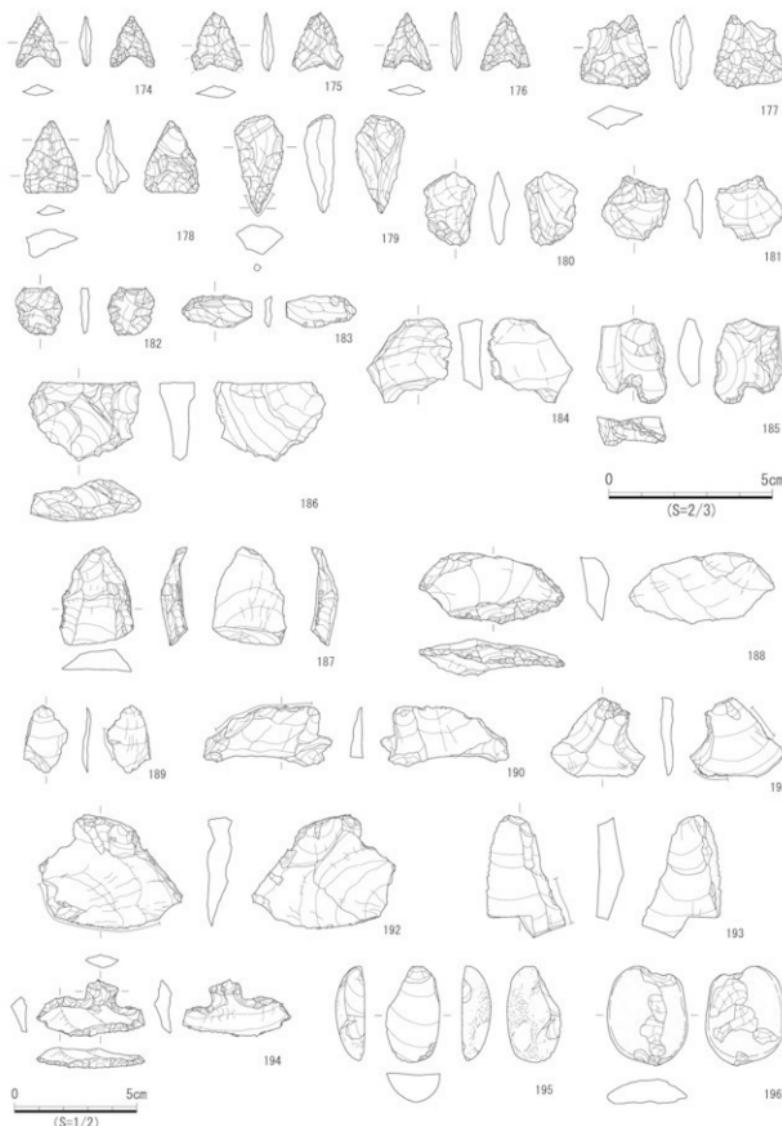


図47 出土遺物実測図(14)

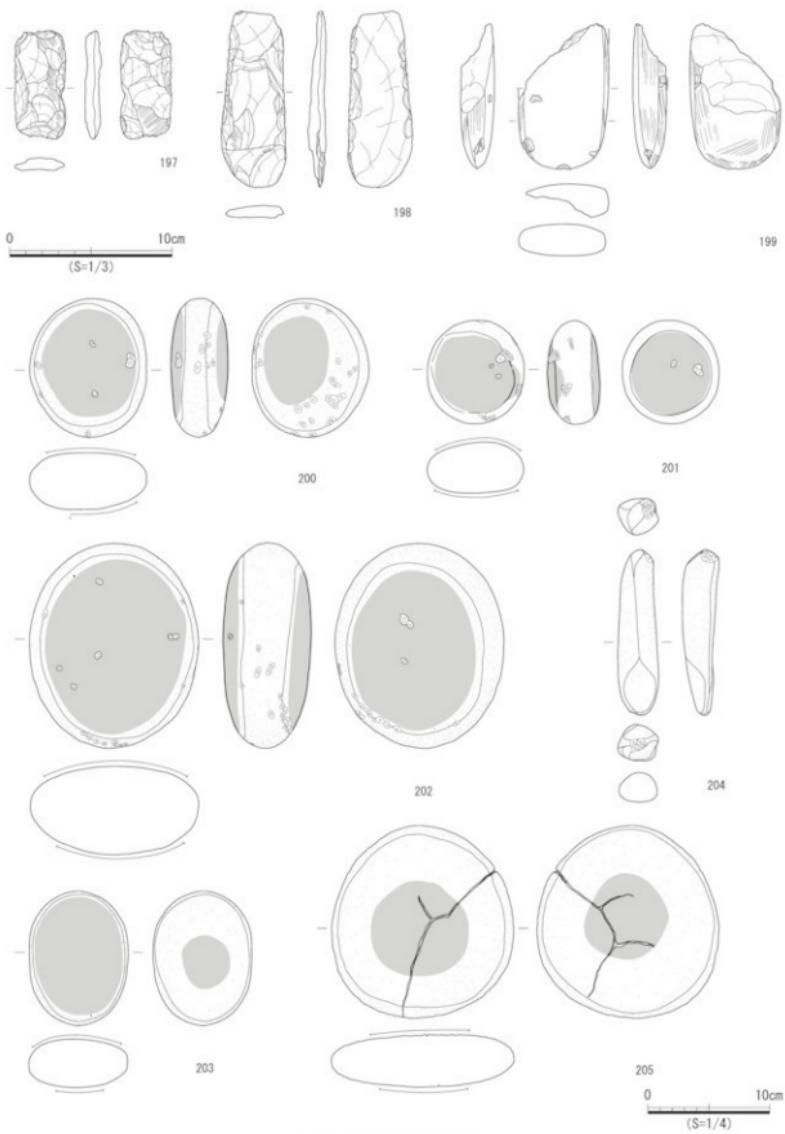


図 48 出土遺物実測図 (15)

## 74 第3章 調査の成果

表7 溝状遺構観察表

遺構名 遺構番号	調査時 遺構番号	グリッド		検出 層位	断面 形状	上端 長軸 (m)	上端 短軸 (m)	下端 長軸 (m)	下端 短軸 (m)	深さ (m)	切り合い		備考	時代
		東西	南北								> 切る	< 切られる		
SD3	SD32	G	3	田畠上	II	2.46	0.18	2.16	0.12	0.73	—	—	遺物器葉片出土	古墳か
SD4	SD42	G+H	3~5	田畠上	IV	(2.96)	0.31	—	0.21	0.11	—	—	—	中世以降
SD5	SD50	G	6	田畠上	I	(0.61)	0.2	(0.56)	0.07	0.13	—	—	墳丘	古墳以前

※SD 1は周溝、SD 2は排水溝のため実化していない。

表8 土坑観察表

遺構名 遺構番号	調査時 遺構番号	グリッド		検出 層位	堆積 状況	平面形状		断面 形状	上端 長軸 (m)	上端 短軸 (m)	下端 長軸 (m)	下端 短軸 (m)	深さ (m)	切り合い		時代 備考
		東西	南北			上端	下端							> 切る	< 切られる	
SK1	SK11	C	5	II 畠上	a	a	a	I	0.45	0.31	0.26	0.16	0.08	—	—	—
SK2	SK13	E	6	墳丘上	a	a	a	不定	0.55	0.16	0.35	0.15	0.31	墳丘	墳丘	中世以降
SK3	SK16	D	5	墳丘上	—	—	—	—	6.5	1.92	6.22	0.29	1.72	墳丘	—	中世以降
SK4	SK18	E+F	6	墳丘上	d	c	e	IV	2.41	1.8	2.1	1.64	0.2	墳丘	—	中世以降
SK5	SK23	C	6	田畠上	b	a	a	I	1.4	0.69	0.83	0.31	0.52	両溝	—	中世以降
SK6	SK25	B	5	田畠上	a	a	a	I	0.38	0.3	0.22	0.14	0.06	両溝	—	中世以降
SK7	SK26	F-G	3	田畠上	b	b	b	II	0.72	0.68	0.54	0.43	0.85	SK8 SK9	—	中世以降
SK8	SK27	F	3	田畠上	a	a	a	I	(0.34)	0.41	(0.24)	0.2	0.06	—	SK7	中世以降
SK9	SK29	F-G	3-4	田畠上	a	a	a	IV	(1.04)	1.08	(0.96)	0.97	0.07	—	SK7	中世以降
SK10	SK30	G	3-4	II 畠上か	a	a	a	IV	2.26	1.43	2.01	1.24	0.11	—	—	中世以降
SK11	SK31	F	3	田畠上	b	b	b	I	(1.92)	1.72	0.84	0.98	0.5	—	SKW1 SKX3 隕丘	中世以降
SK12	SK33	G	5	田畠上	d	b	b	V	0.96	0.56	0.87	0.43	0.05 (0.38)	—	—	中世以降
SK13	SK35	G	4	田畠上	a	a	a	IV	0.33	0.29	0.24	0.19	0.09	—	—	中世以降
SK14	SK36	H	4	田畠上	a	a	a	II	0.25	0.25	0.2	0.19	0.1	—	—	中世以降
SK15	SK37	H	4	田畠上	a	a	a	V	0.28	0.26	0.15	0.16	0.19	—	—	中世以降
SK16	SK39	H	3	田畠上	e	a	a	IV	0.31	0.22	0.11	0.11	0.18	—	—	中世以降
SK17	SK44	H	4	田畠上	a	a	a	I	0.19	0.19	0.09	0.1	0.11	—	—	中世以降
SK18	SK45	H	4	田畠上	a	b	a	V	0.22	0.19	0.12	0.12	0.15	—	—	中世以降
SK19	SK53	F	6	田畠上	a	a	a	不定	0.28	0.14	0.11	0.06	SK20	墳丘	古墳以前	
SK20	SK54	F	6	田畠上	a	a	a	不定	(0.24)	0.23	0.14	0.13	0.07	—	SK19	古墳以前
SK21	SK55	D	6	田畠上	a	不明	不明	不定	1.06	(0.88)	0.85	(0.72)	0.09	—	墳丘	古墳以前
SK22	SK56	E	6	田畠上	a	a	a	I	(0.44)	(0.42)	0.26	0.27	(0.11)	—	墳丘 石室	古墳
SK23	SK57	E	6	田畠上	a	a	a	I	(0.55)	(0.54)	0.25	0.29	0.43	—	墳丘 石室	古墳
SK24	SK58	E	5	田畠上	d	a	c	IV	1.42	0.65	0.82	0.2	0.25	—	石室	鶴大寺期

表9 被熱遺構観察表

遺構名 遺構番号	調査時 遺構番号	グリッド		検出 層位	堆積 状況	平面形状		断面 形状	上端 長軸 (m)	上端 短軸 (m)	下端 長軸 (m)	下端 短軸 (m)	深さ (m)	切り合い		時代 備考
		東西	南北			上端	下端							> 切る	< 切られる	
SL1	SL24	C	6	田畠上	b	b	c	IV	1.28	(0.71)	1.05	(0.61)	0.1	両溝	—	中世以降
SL2	SL29	C-D	6	田畠上	d	c	c	IV	(1.88)	(1.44)	(1.57)	0.28	0.42	—	墳丘	鶴文早期

表10 柱穴状遺構観察表

遺構名 遺構番号	調査時 遺構番号	グリッド		検出 層位	堆積 状況	平面形状		断面 形状	上端 長軸 (m)	上端 短軸 (m)	下端 長軸 (m)	下端 短軸 (m)	深さ (m)	切り合い		時代 備考
		東西	南北			上端	下端							> 切る	< 切られる	
SP1	SP34	C	5	田畠上	d	a	a	ア	0.35	0.35	0.18	0.18	0.38	—	—	中世以降
SP2	SP49	B	3	田畠上	a	a	a	イ	0.21	0.2	0.09	0.07	0.27	—	—	中世以降
SP3	SP41	B	3	田畠上	c	a	a	ウ	0.48	0.44	0.28	0.3	0.58	—	—	中世以降
SP4	SP43	B	4	田畠上	a	b	b	ウ	0.28	0.2	0.09	0.12	0.26	—	—	中世以降
SP5	SP46	B	4	田畠上	d	a	a	イ	0.35	0.16	0.11	0.12	0.4	—	—	中世以降
SP6	SP47	B	4	田畠上	d	a	a	ア	0.22	0.2	0.11	0.14	0.36	—	—	中世以降
SP7	SP48	B	4	田畠上	a	a	a	ア	0.22	0.21	0.11	0.11	0.35	—	—	中世以降

表11 土器観察表 (1)

閲観番号	出土地点・層位	接合遺構・層位	種別	産地	器種	時期型式	以降残存率(0/12)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考 (内)…内面(外)…外面	開拓番号	図版番号
1	石室・埋土下層	E3-表上	須恵器	尾張	环蓋	BII	1	(14.0)	—	(3.1)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	
2	石室・埋土床直 上・下層・k、SK11-1・2、 SK3-c・d・e、E3-表上	石室・埋土下層 須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	7	14.3	—	5.0	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	8	
3	石室・埋土床直 上・石室・埋土下層 尾、SK11-1・2、 SK3-f	石室・埋土下層 須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	8	15.0	—	4.4	(内)回転ナデ (外)ヘラ削り・回転ナデ・自然輪 付着	27	8	
4	墳丘-II	墳丘-直上・D4-II	須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	3	(14.0)	—	3.3	(内)回転ナデ・回転ナデ (外)回転ナデ・回転削り	27	
5	墳丘-II	墳丘-直上・I、 SK02-c・d、D4-II m	須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	5	(14.6)	—	4.7	(内)回転ナデ・回転 (外)回転ナデ・ヘラ削り・回転ナデ	27	8
6	墳丘-II	墳丘-直上・c・ d・e、D4-II	須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	3	(14.4)	—	4.7	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ切り 陥没有り	27	
7	墳丘-I 直上	D4-II	須恵器	尾張	环蓋	BII (新)	1	(14.8)	—	(3.6)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	
8	SK1-d	SK1-直	須恵器	尾張	環・池	6	14.8	—	4.9	(内)回転ナデ (外)回転ヘラ削り・回転ナデ	27	8	
9	石室・埋土k	墳丘-直上・石室 ・埋土・SK3-f、 E4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK10~43	5	(14.8)	—	4.6	(内)回転ナデ・当て具 (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	27	8
10	墳丘-II	墳丘-直上・c、 SK1-d、D3-II、 D4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK43	4	(13.6)	—	(4.5)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転削り・ヘラ切 り未調整	27	
11	墳丘-II	墳丘-直上・SK1- c、D4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK43	9	13.1	—	4.3	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	27	
12	墳丘-II	墳丘-直上・a、 SK1-e、D4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK43	4	13.8	—	4.8	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	27	
13	墳丘-II	SK1-直、D4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK43	8	13.8	—	4.1	(内)回転ナデ・当て具 (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	27	
14	墳丘-II	墳丘-直上・d、 47、D4-II、D4-II	須恵器	畿内	环蓋	TK43	9	13.8	—	4.5	(内)回転ナデ・当て具 (外)回転ナデ・回転削り・ヘラ切 り未調整	27	8
15	SK3-g	F3-II	須恵器	尾張	环蓋	BII	1	—	—	—	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	27	
16	E7-Ⅲ直上		須恵器	尾張	环蓋	BII	1	(10.4)	—	(3.5)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	
17	石室・埋土下層	墳丘-J	須恵器	尾張	环蓋	BII	3	(12.0)	—	(4.1)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	
18	石室・埋土k	墳丘-J	須恵器	尾張	环蓋	BII	3	(12.0)	—	(3.7)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り 外面削り有り	27	
19	SK3-g	F3-II	須恵器	尾張	环蓋	BII	1	(11.4)	—	(3.8)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	27	
20	石室・埋土k	墳丘-c・d・k、 SK3-c・f	須恵器	美濃 須恵	环蓋	頭蓋65号	6	11.4	—	4.1	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り 保付曾	27	8
21	SK1-d		須恵器	尾張	身-身	BII (新)	6	(15.0)	—	(4.7)	(内)回転ナデ (外)回転ヘラ削り	27	
22	石室・埋土・u	墳丘-b、SK1-b、 uの重・埋土下層	須恵器	尾張	身-身	BII (新)	2	(14.0)	(4.7)	(4.9)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転削り	27	
23	03-II	D4-II、D3-II、 D4-II	須恵器	尾張	身-身	BII (新)	—	—	—	—	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	27	
24	C3-II	D4-II	須恵器	尾張	身-身	BII (新)	—	—	—	—	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	27	
25	D4-II		須恵器	尾張	身-身	瓶・池	2	(12.0)	4.8	4.7	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り	28	
26	墳丘-II	墳丘-直上・e、 D4-II	須恵器	尾張	身-身	瓶・池	2	(12.8)	5.0	4.7	(内)回転ナデ (外)回転ヘラ削り・回転ヘラ削り	28	8
27	墳丘-II	墳丘-直上・c、 D4-II、D4-II	須恵器	尾張	身-身	瓶・池	3	(14.4)	(4.8)	(3.9)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転削り・ヘラ記号	28	
28	石室・埋土下層	墳丘-下層・直 上・II、03-I	須恵器	畿内	环蓋	TK43	11	12.4	—	3.9	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・回転ヘラ削り ヘラ切・未調整	28	8
29	墳丘-II	墳丘-直上	須恵器	畿内	环身	TK43	5	(11.4)	(7.0)	4.8	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	28	
30	墳丘-II	墳丘-直上	須恵器	畿内	环身	TK43	4	(12.0)	—	(4.2)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ・ヘタ切り未調整	28	
31	D4-II		須恵器	畿内	环身	TK43	1	(11.6)	—	(2.7)	(内)回転ナデ (外)回転ナデ	28	
32	石室・埋土下層	石室・埋土下層	須恵器	尾張	身-身	BII454BII	1	(11.2)	(3.6)	(4.1)	(内)回転ナデ・静ガサエ (外)回転ナデ・回転削り	28	8

表12 土器観察表(2)

開観番号	出土地点 -層位	接合構 -層位	種別	地	器種	時期 型式	口縁残 存率 (X/12)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考 (内)…内面 (外)…外面	開観番号
33 56-II			須恵器	美濃 須恵器	环身	了字記和頭 一束半	—	—	(6.8)	(2.2)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・ヘラ切り末調整	28
34 SX3-g	F3-II		須恵器	尾張	环身	H15	—	—	(3.6)	(1.7)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り ヘラ切り未調整	28
35 岩塚-堆土f	F3-III直上		須恵器	美濃 須恵器	輪	H15併行	3	(10.0)	—	(5.7)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・削り・回転ナダ	28
36 石室-堆土下層	SX3-e・f		須恵器	美濃 須恵器	环身	須65号	1	(13.0)	—	(3.8)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り	28
37 石室-埋土底 SX1-e・d、 H、D+II			須恵器	鏡内	有蓋高 外蓋	TK43	6	13.8	—	(4.7)	(内)回転ナダ・透孔エキ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り	28 8
38 石室-堆土下層 7、SX3-f			須恵器	鏡内	有蓋高 外蓋	TK43	9	14.7	—	5.0	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り・ナダ	28
39 石室-堆土下層			須恵器	鏡内	有蓋高 外蓋	TK43	9	12.8	—	5.1	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り	28 8
40 SX1-t			須恵器	鏡内	有蓋高 外蓋	TK43	—	—	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・ナダ	28
41 SX1-d			須恵器	尾張	环	輪々泡か	—	—	(8.0)	(6.0)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・透孔3方向	28
42 SX1-d	G5-I・II		須恵器	尾張	环	長脚高 泡か	—	—	8.2	(8.7)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・透孔3方向	28 9
43 石室-埋土下層 e・f			須恵器	尾張	环	H14併行	2	(16.1)	(12.0)	(16.9)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・沈織糸・刺突文 回転ケズリ・沈織1条	28 8
44 石室-埋土下層 -堆土下層・d・ f・⑤			須恵器	尾張	环	H14併行	2	15.8	—	(14.8)	(内)回転ナダ・しづり痕 (外)回転ナダ・回転ヘラ削り 沈織・透孔3方向2段	28 8
45 表土			須恵器	鏡内	短脚高 环	TK43	—	—	(9.6)	(4.1)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・透孔3方向	29
46 墳丘-b			須恵器	鏡内	長脚高 环	TK43	—	—	(11.5)	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ	29
47 墳丘-直上			須恵器	鏡内か 外	長脚高 环	TK209-217 併行	2	(10.0)	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・次織・回転ヘラ削り	29
48 墳丘-直上			須恵器	尾張	环	H15	1	(9.4)	—	(3.4)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り	29
49 墳丘-直上	SX1-b・c、周塚- 埋土下層、F7-II		須恵器	鏡内	長脚高 泡か	TK43-209併 行	2	(11.0)	—	(13.3)	(内)回転ナダ・シボリ痕 (外)回転ナダ・刺突文・沈織	29 8
50 SX1-c			須恵器	尾張	环	H15	—	—	(10.0)	(10.0)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・回転ヘラ削り 透孔3方向2段	29 9
51 潜乱坑			須恵器	尾張	环	H15	—	—	—	—	(内)回転ナダ・ヘラオサエ (外)回転ナダ 脚注記の内面に切り込み有り	29
52 SX1-下層	SX1-d、E3-表土		須恵器	美濃 須恵器	短脚高 环	須65号	2	(12.0)	(10.0)	(10.0)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ	29 9
53 石室-埋土下層			須恵器	美濃 須恵器	長脚高 泡か	須65号	—	—	(16.0)	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ	29
54 SX3-g			土師器	中形	燒	古墳時代	—	—	(5.0)	—	(内)ナダ・(外)ハケ	29
55 石室-埋土u			土師器	中形	燒	古墳時代	2	(8.4)	3.0	8.3	(内)指オサエ・ナダ・、(外)ナダ	29
56 石室-埋土k	石室-埋土g		須恵器	鏡内	縫	TK43-217	—	—	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・沈織・刺突文 回転ヘラ削り・自然釉	29
57 SX3-b	D3-II		須恵器	鏡内	縫	TK43-217	—	—	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・沈織3条 刺突文・回転ヘラ削り	29
58 C5-II			須恵器	鏡内	縫	TK43-217	—	—	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・沈織・刺突文 静止ヘラ削り	29
59 C3-II	D4-II		須恵器	鏡内	縫	TK43-217	—	—	—	—	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・刺突文・沈織2条 静止ヘラケズリ・櫛描文 自然釉付着	29 9
60 SX1-d			須恵器	尾張	縫	H15	1	(11.0)	—	(2.0)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・波状文か	29
61 56-II			須恵器	鏡内	縫	TK85-TEK43	1	(12.0)	—	(4.5)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・波状文	29 9
62 SX3-e			須恵器	鏡内	縫	TK43-209	1	(15.0)	—	(7.7)	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・櫛描文・沈織3条 内面自然釉付着	29 9
63 SX3-f	墳丘-直上		須恵器	美濃 須恵器	縫	須65号	5	(7.0)	—	7.7	(内)回転ナダ (外)回転ナダ・刺突文2段・静止 ヘラ削り	29 9

表13 土器観察表 (3)

開載番号	出土地点 -層位	接合構造 -部位	種別	產地	器種	時期 型式	口縁残 存率 (0/12)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考 (内) ... 内面 (外) ... 外面	総固 番号	回版 番号
64	墳丘-II	墳丘-直上。S31-c, D4-II	須恵器	尾張	広口瓶	TK43	2 (11.6)	4.6	13.4		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・波状文・沈継2条 回転ヘア削り・底部ヘア記号	29	9
65	石室-埋土下層 堆土-e, f	墳丘-e, 周溝 堆土-e, f	須恵器	尾張か 島	短腹壺	TK43	5 (9.8)	—	(4.0)		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転ヘア削り	29	
66	周溝-埋土下層		須恵器	不明	短腹壺	TK209～217 併行	1 (8.2)	—	(3.1)		(内) 回転ナデ, (外) 回転ナデ	29	
67	石室-埋土k	S31-c, e-f	須恵器	尾張か 瓶	平瓶	RI15	—	—	6.9	(9.5)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転クリエリ・沈継 2条・自然釉付着・触着物有	29	
68	墳丘	墳丘-h	須恵器	尾張か 瓶	平瓶	RI15	2 (7.8)	—	(3.3)		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・沈継2条	29	
69	D4-II		須恵器	尾張か 瓶	平瓶	RI15	—	—	—		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・波状文・刺突文 沈継2条	29	
70	石室-埋土下層	墳丘-直上。D3-II, E3-II	須恵器	尾張か 瓶	平瓶	RI15	—	—	—		(内) 回転ナデ・指オサエ (外) 回転ナデ・回転ヘア削り	30	
71	D2-II, D3-II, E3-II		須恵器	尾張	壺瓶	RI15	—	—	(12.6)		(内) 回転ナデ・指オサエ (外) 沈継・カ目・回転ナデ 回転ヘア削り	30	9
72	S31-e		須恵器	鏡内	壺瓶	TK209～217	—	—	—		(内) 回転ナデ, (外) カ目ナデ	30	
73	墳丘-直上	S31-c, d, C3-II, C4-II	須恵器	鏡内	脚付壺	TK43	—	—	—		(内) 当て具痕・指ナデ・回転ナデ (外) タタキ・回転ナデ・波状文 透孔設	30	10
74	墳丘-直上		須恵器	鏡内	子持器 台座	TK43	9 (5.2)	—	—		(内) 回転ナデ・指ナデ (外) 竹管文・沈継・回転ナデ	30	9
75	F3-直上		須恵器	尾張か 台	合	RI15	—	—	(7.3)		(内) 回転ナデ・指オサエ 回転ナデ・透孔3方向	30	
76	S31-f		須恵器	尾張か 台	合	RI15	—	—	(12.2)	(7.7)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・刺突文・透孔有り	30	
77	S31-h	墳丘-直上。SD3-a, b, c, d, e, f-h	須恵器	尾張	壺	6世紀後半	5 (22.0)	(10.0)	推定 28.7		(内) 指オサエ・ナデ (外) タタキ・ナデ	30	10
78	S31-f		須恵器	尾張	壺	6世紀後半	3 (45.8)	—	—		(内) ナデ (外) 平行タタキ・波状文・沈継 ナデ	31	
79	周溝-埋土下層	墳丘-直上。II, b	須恵器	尾張	口縁部 裏部	6世紀後半	1 (41.8)	—	(27.8)		(内) ナデ・ハラ後ナデ・当て具痕 (外) ナデ・北系・波状文・タタキ	32	10
80	S31-c	S31-c, d, D3-II, G6-II	須恵器	尾張	口縁部 體部	6世紀後半	1 (38.6)	—	(22.4)		(内) ナデ・北系・波状文 タタキ	33	10
107	石室-埋土下層	石室-埋土k	山茶柄 須留	鏡	5型古波端 併行	4	15.3 (6.4)	5.6			(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り 貼付高台・板設板・隣灰	35	12
108	石室-埋土	S31-c, 石室-埋 土下層。e, G6-II	山茶柄	東濃	鏡	浅間窓下I 小丸石3	1 (14.7)	7.5	5.0		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り後ナデ 貼付高台・板設板	35	12
109	石室-埋土k	石室-埋土下層。 I	山茶柄	東濃	鏡	浅間窓下I	1 (18.1)	7.3	5.3		(内) 回転ナデ・貼付高台 回転糸切り・板設板	35	
110	石室-埋土k	墳丘-直上。S31-e, d	山茶柄	東濃	鏡	自土原I	4 (14.0)	(6.0)	(4.9)		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り 貼付高台・板設板	35	12
113	S31-d		山茶柄 須留	皿	5型式併行	1 (8.6)	(3.6)	(2.3)		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り	42		
114	S31-e	S31-c	山茶柄 須留	鏡	5型式併行	—	—	7.6 (3.6)		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り 貼付高台・板設板	42		
115	S31-e		山茶柄	尾張	鏡	5型式	3 (14.0)	—	—		(内) 回転ナデ, (外) 回転ナデ	42	
116	S31-f		山茶柄	東濃	鏡	富原I	3 (16.0)	—	(4.2)		(内) 回転ナデ・自然難 回転ナデ	42	
117	S31-f		山茶柄	東濃	皿	白土原I	12 (8.0)	5.0	1.4		(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り・板ナデ	42	12
118	S31-f		山茶柄	東濃	鏡	大隈東I	6 (12.0)	(4.4)	4.4		(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り・ナデ 板設板・口縁周辺に板設板	42	
119	S31-g		山茶柄	東濃	美濃 須留	鏡之鳥3	5 (11.6)	4.2	3.2		(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転糸切り・板設板	42	12
120	S31-f	S31-e	山茶柄 須留	鏡	5型式併行か	—	—	(7.0)	(1.5)	(内) 回転ナデ・回転糸切り・板設板	42		

表14 土器観察表(4)

開拓番号	出土地点 -層位	接合構造 -層位	種別	産地	器種	時期 型式	口縁残 存率 (0/12)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考 (内)…内面(外)…外面	博団 番号	実取 番号
121	SK10-1		山茶柄 東濃	陶	大堀東1	—	—	(3, 2)	(1, 6)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・板付 高台・板鏡底	42		
122	SK10-a		山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4	—	—	(6, 0)	(0, 7)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・板ナデ	42		
123	SK11-a		山茶柄 東濃	陶	大堀東1か 鶴之島3	4	(11, 6)	—	(2, 8)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ	42		
124	SK15-d	SK15-1	山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4	6	8.4	4.6	1.0	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・板ナ デ・器有り	42		
125	SP5-g		山茶柄 東濃	陶	大堀東1	3	(8, 0)	(5, 2)	1.1	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・器底 有り	42		
126	F7-II		山茶柄 東濃	陶	浅間窯下1 少丸石3	12	8.1	4.4	2.2	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・自然 輪付着	42	12	
127	周携-埋土下層		山茶柄 東濃	陶	鶴之島1	1	(14, 0)	(6, 4)	(6, 1)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・板付高台・板鏡底	42		
128	SK1-h		山茶柄 東濃	陶	白土原1か2	12	8.2	4.8	1.4	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・静止ナデ	42		
129	SK1-h	SK1-b, 岡崎-埋 立2a, G6-II	山茶柄 東濃	陶	明和1	11	9.2	5.2	1.4	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 板ナデ・全体にひずみ有り	42		
130	SK1-d		山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4 (古)	—	—	5.1	(1, 8)	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・板付 高台・板鏡底・板ナデ・隕灰	42		
131	周携-埋土1		山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4	3	(13, 4)	(5, 6)	(3, 9)	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・板ナデ・板付高台 板鏡底	42		
132	周携-埋土1		山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4	4	(13, 0)	(4, 8)	(4, 5)	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・板付高台・板鏡底	42		
133	SK1-h	SK1-e, g	山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4 (新)	7	13.3	2.2	4.8	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 板ナデ・静止ナデ・板鏡底	42		
134	周携-埋土下層 G7-II, E7-II 直上		山茶柄 東濃	陶	大堀大洞4	9	13.1	4.1	4.9	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・板付高台・回転あ 切り・板鏡底	42		
135	SK1-d	SK1-e	山茶柄 東濃	陶	大堀東1	7	12.7	3.8	4.5	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 點付高台・板鏡底	42	12	
136	墳丘-直上		山茶柄 東濃	陶	大堀東1	9	12.9	4.2	3.7	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り・板ナデ ヘラ切り・板付高台・板鏡底	42		
137	SK1-h	岡崎-埋土h	山茶柄 東濃	陶	大堀東1	8	12.3	3.6	4.5	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 點付高台・板鏡底	42		
138	SK1-d	SK1-e	山茶柄 東濃	陶	大堀東1	7	13.6	4.4	4.9	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 點付高台・板鏡底	42		
139	SK1-i	SK1-h, F7-II	山茶柄 東濃	陶	大堀東1	3	(12, 8)	3.8	3.7	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・板付高台・板鏡底	42		
140	G7-II		山茶柄 東濃	陶	大堀東1	5	13.0	3.5	4.0	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・板付高台・回転あ 切り・板ナデ・板鏡底	42		
141	G6-II		山茶柄 東濃	陶	大堀東1	8	11.7	3.0	3.5	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 點付高台・板鏡底	42		
142	G7-II		山茶柄 東濃	陶	鶴之島3	6	(13, 0)	4.6	3.3	(内) 回転ナデ・静止ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り 點付高台・板鏡底・煤付着か	42		
143	周携-埋土h, G6-II		山茶柄 東濃	陶	鶴之島3	4	(11, 6)	(4, 4)	(2, 8)	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・回転あ切り	42		
144	G6-II		山茶柄 東濃	陶	生垣2か大 窓	4	(10, 3)	(5, 4)	(2, 5)	(内) 回転ナデ・施跡 (外) 回転ナデ・回転あ切り	43		
145	SP6-1		白磁	牛津	白磁編 V型	—	—	—	—	(内) 回転ナデ・施跡 (外) 回転ナデ・施跡	43		
146	SK3-g	SK1-q, G6-II, G7-II	山茶柄	瓶	口鉢切口式	1	(34, 0)	10.2	12.0	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・ヘラ削り	43	12	
147	G6-II		古薺	瓶	縦彫小・古薺戸後留 瓶	5	10.0	5.0	2.5	(内) 回転ナデ・施跡 (外) 回転ナデ・施跡・回転あ切り 保付着	43		
148	G6-II		古薺	瓶	導花口	—	—	—	—	(内) 回転ナデ (外) 回転ナデ・施跡	43		
149	H4-II		古薺	瓶	小天日	古薺戸後1 部	2	(8, 8)	(3, 4)	3.7	(内) 回転ナデ・施跡 (外) 回転ナデ・施跡・施跡	43	

表15 土器観察表 (5)

閥倅番号	出土地点 -層位	接合遺構 -層位	種別	産地	器種	時期 型式	口縁残 存率 (0/12)	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考 (内) ... 内面 (外) ... 外面	閥倅 番号	閥版 番号
150 G6-II	古窯戸	瓶/4	天日茶	古窯戸IV期 古	2	(11.8)	—	—	—	—	(内) 回転ナブ・施釉鉢脚 (外) 回転ナブ・施釉鉢脚、回転ヘ ル削り	43	
151 G4-II	古窯戸	瓶/4	耳付木	古窯戸後遺 層-IV	9	4.6	5.0	7.8	—	—	(内) 施釉 (外) 回転ナブ・施釉切切り	43	12
152 C7-III底上	土師器	不明	基	15~17世紀	10	9.3	5.8	1.6	—	—	(内) ナヂ・施釉ナブ (外) 指オナビ後ナヂ	43	12
153 C7-III底上	土師器	不明	基	15~17世紀	12	9.8	6.0	1.7	—	—	(内) ナヂ・指オナヂ (外) 指オナビ	43	12
154 G3-II	青磁	中国	青磁罐	施釉系80 年	—	—	—	—	—	—	(内) 施釉 (外) 施釉・施蓮瓣文	43	
155 周擴-堆土d	古窯戸	瓶/4	四面垂	古窯戸後 I・II期	—	—	—	—	—	—	(内) 回転ナブ・施釉 (外) 回転ナブ・沈継・把手粘付 施釉	43	12
156 売庄-87	G3-II	古窯戸	瓶/4	四面垂	古窯戸中期 I~II	—	—	—	—	—	(内) 指ナブ・指オサビ (外) 指ナブ・沈継4段2段 把手粘付・施釉	43	12
157 G6-II	G7-II	古窯戸	瓶/4	内瓦罐	古窯戸後IV 古	12	24.5	13.0	11.6	—	(内) 回転ナブ (外) 回転ケズリ・静止系切り 復付前	43	
158 G7-II	古窯戸	瓶/4	踏鉢	古窯戸後IV 古	3	30.0	—	(10.7)	—	—	(内) 回転ナブ・横目 (外) 回転ナブ	43	
159 G3-II	山茶碗	瓶/4	片口鉢	10型式	—	(30.0)	—	(11.9)	—	—	(内) 回転ナブ (外) 回転ナブ・ハフケズリ	43	
160 G6-II	常滑	常滑	玉縁壺	6型式	—	—	—	—	—	—	(内) 指オサビ・ナヂ (外) 沈継・回転ナブ・ナヂ・ケズリ	43	12
161 G6-II	常滑	壺	6型式	3	(33.6)	—	(9.7)	—	—	—	(内) 指ナブ・指オサビ (外) タクナブ・指オサビ、粘土棒・隕灰	44	
162 S31-1	G5-II	常滑	壺	9型式	1	(45.6)	—	(9.3)	—	—	(内) 指ナブ・指オサビ (外) 指ナブ	44	
166 S33-1	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文早期	—	—	—	—	—	—	(内) ナヂ・(外) 条痕	46	13
167 S33-1	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文早期	—	—	—	—	—	—	(内) 条痕、(外) 条痕	46	13
168 S31-1	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文時代	—	—	—	—	—	—	(内) 摩耗、(外) LBR文	46	13
169 境庄	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文時代	—	—	—	—	—	—	(内) ナヂ、(外) LBR文	46	13
170 境庄-6	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文前期	—	—	—	—	—	—	(内) 摩耗、(外) 摩耗・粘付帶隙	46	13
171 境庄	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文前期末 白立川式、大瀧山式土器	—	—	—	—	—	—	(内) 突起貼付・刷毛、ナヂ (外) ナヂ・粘付带隙・鉄網	46	13
172 S31-1b	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文前期	—	—	(8.0)	(2.9)	—	—	(内) 指オサビ (外) 摩耗・底鉢キズ上	46	13
173 境庄-8	鐵文土器	不明	深鉢	鐵文時代	—	—	(5.6)	(2.6)	—	—	(内) ナヂ・条痕、(外) 条痕	46	13

表16 石製品観察表

閥倅番号	器種	遺跡名 地区名	層位	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	備考	閥倅 番号	閥版 番号	
81 菅玉	石室理土	5	緑色凝灰岩	—	3.3	1.2	0.32	0.10	8.1	34	11	
82 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	3.4	1.2	0.36	0.17	8.1	34	11	
83 菅玉	石室理土	5	緑色凝灰岩	—	3.1	1.1	0.26	0.11	8.1	34	11	
84 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	3.2	0.7	0.49	0.10	5.2	34	11	
85 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	3.3	0.9	0.28	0.09	3.3	34	11	
86 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.9	1.1	0.29	0.14	6.8	34	11	
87 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.9	1.1	0.30	0.19	7.4	34	11	
88 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	3.0	1.0	0.29	0.12	6.0	34	11	
89 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	3.0	1.1	0.42	0.09	5.5	34	11	
90 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.7	1.1	0.20	0.11	6.2	34	11	
91 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.8	0.9	0.30	0.09	5.1	34	11	
92 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.7	1.0	0.30	0.14	6.3	34	11	
93 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.5	0.9	0.31	0.10	4.2	34	11	
94 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.6	0.9	0.28	0.08	3.9	34	11	
95 菅玉	石室理土	下層	緑色凝灰岩	—	2.6	0.7	0.22	0.12	1.8	34	11	
96 細縫車	石室理土	下層	緑色凝灰岩	厚さ1.5	—	3.8	0.70	0.70	28.3	複合銅文	34	11
97 細縫車	石室理土	下層	緑色凝灰岩	厚さ2.0	—	4.6	0.90	0.90	44.4	34	11	

表17 金属製品観察表

周波 番号	器種	遺構名 地区名	層位	素材	長 さ (cm)	幅 さ (cm)	最大厚 (cm)	重 さ (g)	備考	種別 番号	実版 番号
98	耳環	石室埋土	下層	銅	3.00	2.60	0.70	20.7	副芯金張	35	11
99	耳環	石室埋土	下層	銅	3.20	2.80	0.66	20.6	副芯金張	35	11
100	耳環	石室埋土	下層	銅	3.20	2.85	0.71	21.6	副芯金張	35	11
101	鉄鍼	石室埋土	下層	鉄	9.40	3.00	0.60	4.7	織紋部	35	11
102	鉄鍼	石室埋土	下層	鉄	7.50	1.50	0.60	24.4	系部 木質が確認できる	35	11
103	鉄鍼	石室埋土	上	鉄	2.50	2.60	0.20	4.9	鍼身部か	35	11
104	鉄鍼	石室埋土	下層	鉄	2.90	2.40	0.17	3.0	織紋部か	35	11
105	鉄鍼	墳丘TR3	上	鉄	3.60	1.30	0.42	2.9	織紋か	35	11
106	鉄鍼	石室埋土	下層	鉄	3.70	1.40	0.15	3.8	塞頭か	35	11
111	鉄貨	SK1	-	銅	2.50	2.50	0.38	8.6 (3枚)	實木通寶を含む3枚	37	12
112	鉄貨	SK11	上	銅	2.50	2.50	0.70	13.2 (6枚)	開元通寶を含む6枚	40	12

表18 石器観察表

周波 番号	器種	遺構名 地区名	層位	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 さ (g)	備考	種別 番号	実版 番号
163	砥石	SK1	上	砂岩	12.0	8.5	4.5	777.6	研磨片面	44	12
164	砥石	墳丘	底面	砂岩	10.3	2.9	3.1	94.0	研磨片面 手持ち	44	12
165	石鏡	包含層66	Ⅲ	滑石	(9.4)	(5.3)	2.1	159.9		44	12
174	打製石器	墳丘	上	チャート	(1.5)	1.4	0.4	0.4		47	13
175	打製石器	墳丘	1層直上	下呂石	(1.8)	(1.5)	0.4	0.7		47	13
176	打製石器	石室埋土	下層	下呂石	1.8	(1.5)	0.3	0.4		47	13
177	打製石器	包含層63	Ⅲ	チャート	(2.2)	2.2	0.7	2.6		47	13
178	打製石器	石室埋土	下層	下呂石	2.2	1.7	0.9	1.9		47	13
179	石錐	墳丘	1層直上	下呂石	3.0	1.5	0.9	3.2		47	13
180	楔形石器	SK1	上	下呂石	2.2	1.8	0.6	2.0	くざりげ一対	47	13
181	R.F	SK1	上	下呂石	2.0	2.1	0.6	1.5		47	13
182	R.F	墳丘	上	チャート	1.5	1.5	0.3	0.7		47	13
183	R.F	SK3	上	チャート	2.0	2.2	0.2	0.3		47	13
184	R.F	包含層63	Ⅲ	下呂石	2.6	2.6	0.7	5.0		47	13
185	スクレイパー	墳丘TR3	上	チャート	2.6	2.1	0.9	4.5		47	13
186	スクレイバー	包含層63	Ⅲ	チャート	2.4	3.4	1.3	9.6		47	13
187	スクレイバー	包含層64	Ⅳ	チャート	4.0	3.1	1.1	11.4		47	13
188	スクレイバー	SK3	上	チャート	4.0	5.9	1.5	19.0		47	13
189	M.F	SK3	上	下呂石	2.7	1.8	0.3	0.9	風化面有り	47	13
190	M.F	墳丘	上	下呂石	2.4	5.2	0.5	7.3	風化面有り	47	13
191	M.F	墳丘	上	下呂石	2.2	3.9	0.5	4.1		47	13
192	M.F	墳丘	墳丘南西斜面 日暮雲母土	チャート	4.6	5.9	1.0	25.2		47	13
193	M.F	SK1	上	下呂石	3.7	2.4	0.8	5.6	風化面有り	47	13
194	石核	SK2	上	チャート	2.3	4.4	0.9	6.0		47	13
195	石核	SK1	上	下呂石	3.9	2.2	1.3	9.8	風化面有り	47	13
196	打矢石鍬	SK1	上	安山岩	4.1	3.3	1.0	15.9		47	13
197	打製石斧	SK3	上	ホルンフェルス	6.2	3.0	1.1	25.2	縦状痕	48	13
198	打製石斧	墳丘	上	ホルンフェルス	10.8	3.9	1.2	59.6		48	13
199	磨製石斧	石室埋土	上	斑紋岩	(9.1)	5.4	2.1	118.4	縦状痕	48	13
200	磨石	包含層67	Ⅲ	安山岩	11.4	9.6	4.7	767.7	磨面2面	48	
201	磨石	SK1	上	安山岩	8.5	8.0	4.2	579.8	磨面2面	48	
202	磨石	SK3	上	安山岩	16.9	13.9	7.3	2472.1	磨面2面	48	
203	磨石	SK3	上	安山岩	11.0	8.1	4.0	429.2	磨面2面	48	
204	鐵石	包含層66	Ⅲ	砂岩	12.6	3.4	3.0	161.7		48	
205	石鑿・台石	調査TR3	上	安山岩	15.8	15.0	4.3	1698.3	使用面2面	48	13